

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成 14 年度—

2003. 3

東大阪市教育委員会

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成 14 年度—

2003. 3

東大阪市教育委員会

は し が き

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとは、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。昨年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成14年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。馬場川遺跡では、縄文時代晩期の土壙墓が2基検出され、人骨が良好に残存されていました。このことは縄文人の精神生活をうかがうだけでなく人類学の貴重な資料であり、大きな成果を上げることができました。瓜生堂遺跡では、古墳～奈良時代の集落跡を検出し、従来不明であった遺跡西端部での動態を掴むことができました。このように限られた調査範囲ではありますが、既往の調査成果に新たな知見を加えることができ、地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成15年3月

東大阪市教育委員会

目次

はしがき

目次・例言

第1章	平成14年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章	縄手遺跡第17次発掘調査	4
第3章	山畑古墳群第21・22次発掘調査	6
第4章	瓜生堂遺跡第51次発掘調査	13
第5章	馬場川遺跡第13次発掘調査	40
第6章	水走氏館跡第3次発掘調査	70
第7章	友井東遺跡第5次発掘調査	84

例言

- 1 本書は、国庫補助50%・市負担50%(総額10,000,000円)で実施した、個人住宅建設工事及び個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査は、調査原因に係る個人・小規模事業主の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 3 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 4 「土坑」「土壙墓」等の用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。
- 5 本書には、平成14年度に実施した民間開発にかかる確認調査・立会調査の成果を併載した(第6章・第7章)
- 6 一部の調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・溝状遺構
SK	土坑・土壙墓	SX	その他の落ち込み状遺構

- 7 馬場川遺跡で出土した人骨については、大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学講座 安部みき子氏よりご鑑定いただき、玉稿を賜った。記して厚くお礼申し上げます。
- 8 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関からご協力いただいた。記して謝意を申し上げます次第である。
清水 登輪・佐野 俊雄・佐野 紀代・森田 正克・辻本真喜子・出口 恵三
高橋 裕二・浜口建設工業株式会社・株式会社カクダイ・生和建設株式会社
松田 真一・大野 薫・松尾洋次郎・村上 昇

第1章 平成14年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成14年度の文化財保護法第57条の2・3に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成15年2月28日現在で届出は653件、通知は91件で合計744件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は下表のとおりとなる。

個人住宅	122件	分譲住宅	201件	共同住宅	14件	工場	0件	店舗	11件
その他建物	28件	道路	12件	学校	7件	宅地造成	9件	公園造成	0件
ガス	121件	電気	0件	水道	43件	下水道	176件	電話	0件

744件の届出(通知)の指導事項は、発掘調査65件、工事立会246件、慎重工事433件であった。

東大阪市教育委員会では、上記の工事内容のうち、個人住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸用共同住宅建設に伴う確認調査と発掘調査について、次ページ一覧表のとおり平成14年度国庫補助事業として実施した。その内訳は、個人住宅に伴う確認調査が9件、同発掘調査が5件、個人・小規模事業主による賃貸用共同住宅に伴う確認調査が4件、同発掘調査が2件であった。なお、平成14年度は埋蔵文化財包蔵地外での試掘調査は実施していない。

近年の傾向としては、個人住宅建設の際、地盤改良の一環として簡易鋼管杭や柱状改良杭など、基礎工事に杭打設を伴う工事が激増している。平成14年度にあっても発掘調査に至った個人住宅はすべて基礎杭打設工事の事前調査となったものである。いっぽう、景気の低迷と連動するためか、共同住宅建設工事は低調で、それに伴う発掘調査も減少している。地域的には、東大阪市西端の宮ノ下遺跡から東端の山畑古墳群まで、市域全体で確認調査・発掘調査を実施したが、とくに馬場川遺跡など八尾市に近接する東部の南端地域での調査が目立つ。これと平成14年6月から8月まで民間開発に伴って実施した善根寺遺跡の例と考えあわせると、開発工事が近鉄奈良線や大阪線付近から市域の端部に移る、いわば「ドーナツ化」現象というべき事態が近時の傾向としてうかがわれる。

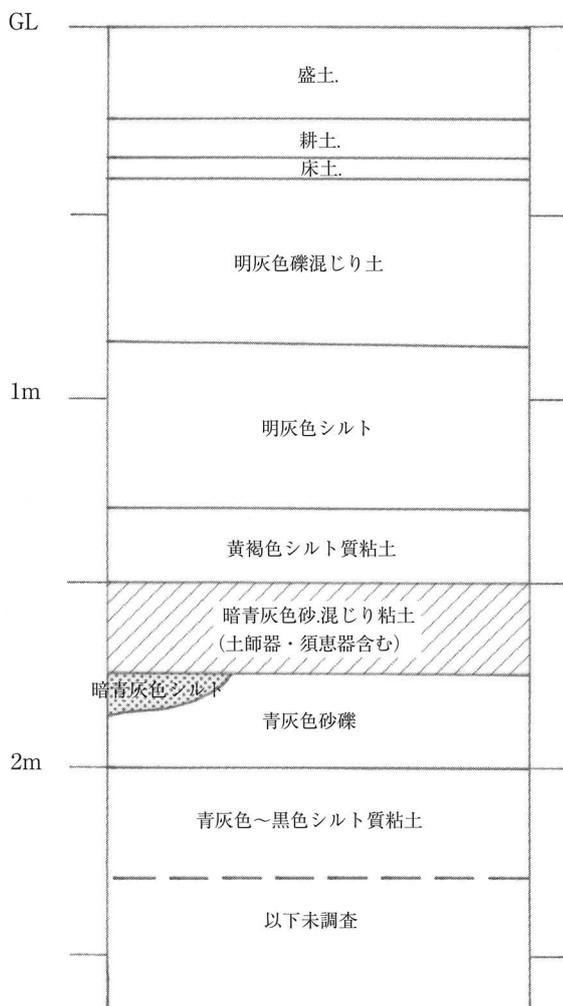
次に、平成14年度に調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査例を報告しておきたい。まず、平成14年度前半期の確認調査では、調査掘削深度で遺物包含層などが検出されたケースは数少ない。その中で、No2の鬼塚遺跡では古墳時代中期後半の遺物包含層が検出され注目される。断面柱状図をみると、地表面から0.5mまでは近現代の盛土・耕作土である。以下、明灰色礫混じり土・明灰色シルト・黄褐色シルト質粘土と続き、地表面下1.5mで暗青灰色砂混じり粘土にいたる。暗青灰色砂混じり粘土層には、土師器・須恵器・製塩土器を含んでおり、その下面にあたる青灰色砂礫層の上面には溝状の遺構がみられた。当初、基礎杭打設工事を予定されており、発掘調査実施の協議に入ったが、届出書再提出の上、遺物包含層に抵触しない範囲での基礎工事に設計変更された。このため発掘調査は実施していない。

No10の馬場川遺跡では、弥生時代後期と縄文時代晩期の遺物包含層を検出した。地表面下0.5mまでは盛土で、以下、暗青灰色砂質土・黄灰色砂・暗灰色細粒砂と続く。その下部、地表面下1.3mで、暗灰色砂混じり粘土に至っている。暗灰色砂混じり粘土層には、弥生時代後期の土器を含んでいた。その下部には暗青灰色砂混じり粘土があり、縄文時代晩期の土器が出土した。弥生時代後期の遺物包含層の上部には砂層が厚く堆積することや2層の遺物包含層の層準は本書第5章の馬場川遺跡第13次発掘調査と酷似しており、2つの調査地一帯に同様の層位が広がることが知られる。届出工事は低層の共同住宅であり、基礎工事は弥生時代後期の遺物包含層には抵触しないものの、共同浄化槽の埋設が付帯工事として設計されていた。そこで浄化槽部を対象として調査実施の協議に入ったが、公共下水道が開発地の近くまで来ており、浄化槽埋設工事を中止されたため、発掘調査には至らなかった。

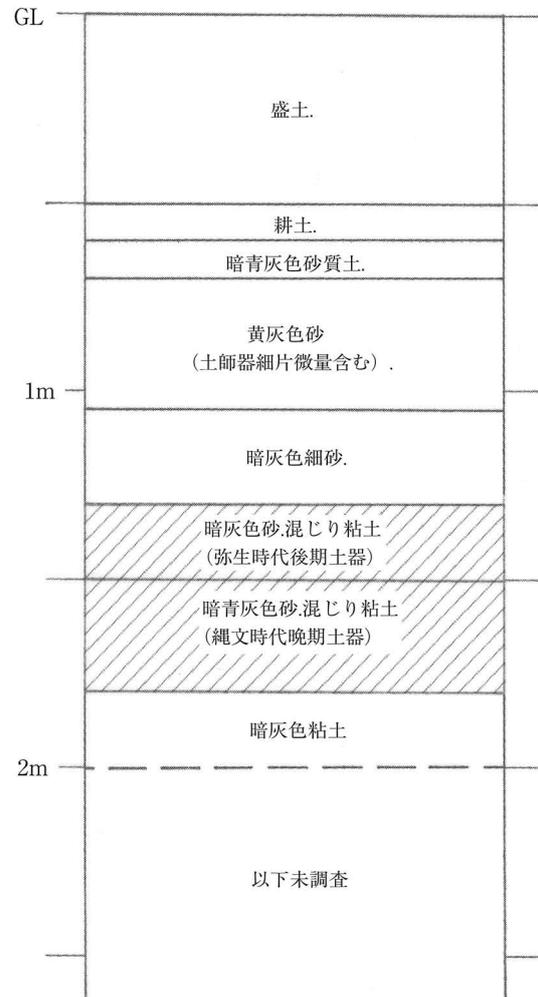
平成14年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
	縄手遺跡第17次発掘調査 (賃貸共同住宅)	南四条町754-1	菅原	平成13年12月5日	4.4㎡	本書第2章
	山畑古墳群第21次発掘調査 (個人専用住宅)	四条町479-3,-4	菅原	平成14年2月4日・ 2月18日	22.9㎡	本書第3章
	山畑古墳群第22次発掘調査 (個人専用住宅)	瓢箪山町932-5	菅原	平成14年2月14日・ 3月5日	28.3㎡	本書第3章
1	小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江3丁目123-12,-14	菅原	平成14年6月13日	4㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
2	鬼塚遺跡確認調査 (個人専用住宅)	新町386-1,-5~-7	福永	平成14年7月18日	6㎡	GL-2.3mまで確認。GL-1.3~1.65mで古墳時代中期後半の溝と遺物包含層を検出。
3	小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江2丁目212-37,-48	福永	平成14年8月1日	6㎡	GL-2.3mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
4	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町1790-18	福永	平成14年8月2日	6㎡	GL-2.2mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
5	西堤遺跡確認調査 (個人専用住宅)	御厨西ノ町2丁目53-12の一部	福永	平成14年8月19日	6㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
6	小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江3丁目670-28	福永	平成14年9月4日	2㎡	GL-2.2mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
7	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江北町4丁目948	福永	平成14年9月6日	2㎡	GL-2.5mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
8	瓜生堂遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	下小阪5丁目31-1	菅原	平成14年9月24日	12㎡	GL-4.1mまで確認。GL-1.9~2.2mで古墳時代後期の遺物包含層と溝状落ち込みを検出。発掘調査実施(N09)。
9	瓜生堂遺跡第51次発掘調査 (賃貸共同住宅)	下小阪5丁目31-1	菅原	平成14年10月16日~ 10月31日	60㎡	本書第4章
10	馬場川遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	横小路町3丁目461-1	福永	平成14年10月3日	4㎡	GL-2.0mまで確認。GL-1.3~1.8mで弥生時代後期と縄文時代晩期の遺物包含層を検出。
11	馬場川遺跡第13次発掘調査 (個人専用住宅)	横小路町3丁目1150-3	菅原	平成14年11月6日~ 11月27日	30㎡	本書第5章
12	中垣内遺跡確認調査 (個人専用住宅)	善根寺町4丁目258-3	菅原	平成14年11月28日	4㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財を検出せず。
13	山畑遺跡第23次発掘調査 (個人専用住宅)	上四条町1716-3の一部	菅原・ 福永	平成14年12月5日・ 12月16日	11㎡	(12/5)GL-1.1mまで確認。GL-0.23mで後期古墳を検出。石室内から鉄製品ほか土師器・須恵器多数出土。 (12/16)GL-2.0mまで確認。GL-0.9~1.2mで弥生時代中期の遺物包含層を検出。詳細は次年度報告予定。
14	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目860-3	福永	平成14年12月9日	3㎡	GL-0.8mまで確認。GL-0.15mで中世~近世期の遺物包含層を検出。発掘調査実施(N017)。
15	芝ヶ丘遺跡第13次発掘調査 (個人専用住宅)	中石切町4丁目2176-2,2178-4	菅原	平成14年12月25日 平成15年2月28日	確認調査 4㎡	(12/25)GL-1.55mまで確認。GL-0.75~1.25mで古墳時代中期~後期の遺物包含層を検出。 (2/28)GL-0.8~1.1mで古墳~奈良時代の遺物包含層を検出。次年度報告予定。
16	若江遺跡第78次発掘調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目704-1	菅原	平成14年12月13日~ 12月24日	48㎡	GL-0.8mで鎌倉~室町時代のピット・土坑を検出。詳細は次年度報告予定。
17	若江遺跡第79次発掘調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目860-3	菅原	平成14年12月13日~ 12月24日	約60㎡	GL-0.8mで鎌倉~室町時代のピット・土坑を検出。詳細は次年度報告予定。
18	小若江遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	小若江4丁目340-10	菅原	平成15年1月10日	4㎡	GL-1.0mまで確認。GL-0.8mで中世期の遺物包含層に相当する層を検出。立会調査実施。

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
19	宮ノ下遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	長堂1丁目70-6,70-11	菅原	平成15年1月20日	4㎡	GL-3.0mまで確認。GL-0.7mで鎌倉時代の遺物多数出土。発掘調査実施(N _o 20)。
20	宮ノ下遺跡第12次発掘調査 (賃貸共同住宅)	長堂1丁目70-6,70-11	菅原	平成15年2月6日～ 2月22日	41㎡	GL-0.3～0.6mで鎌倉時代初頭の土器溜りを検出。土器溜りからコンテナ20箱の大量の遺物が出土。白色礫・黒石礫・緑色礫等がみられ、地鎮に関する祭祀か。下層では平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構面を2面検出。溝・ピット・土坑を確認。詳細は次年度報告予定。



第1図 No.2(鬼塚遺跡)断面柱状図

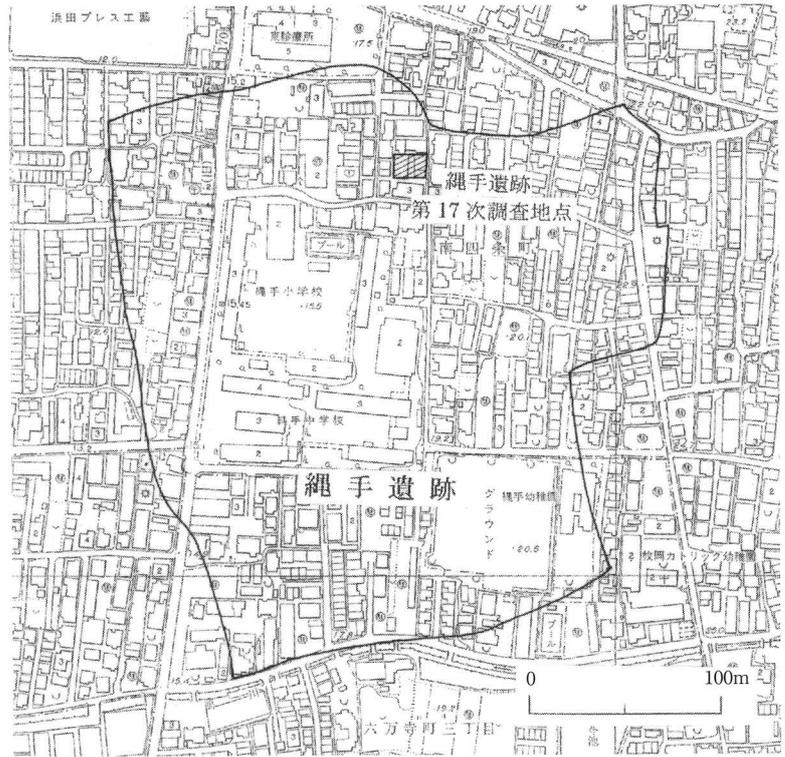


第2図 No.10(馬場川遺跡)断面柱状図

第2章 縄手遺跡第17次発掘調査

1) はじめに

縄手遺跡は、東大阪市南四条町を中心に末広町・六万寺町3丁目にかけて広がる、縄文時代中期から江戸時代にわたる集落跡である。本遺跡はとくに縄文時代後期前半の大集落として著名であり、住居址・炉址・石組遺構・土坑墓・埋甕などが検出され、該期の縄文土器のほか、石鏃・石匙・石斧・磨石・石皿・石錘などの石器が多く出土している。これらの遺物から縄文時代後期に河内潟を前面にして活発な生業活動を展開していたことが窺われる。いっぽう、遺跡の範囲内には径30mを測る円墳のえの木塚古墳があり、主体部は未確認であるが該期の土師器・須恵器のほかヒレ付円筒埴輪や子持勾玉が見つかった。遺跡は生駒山地西麓で発達する扇状地上、標高15～22mに立地している。



第1図 調査地位置図

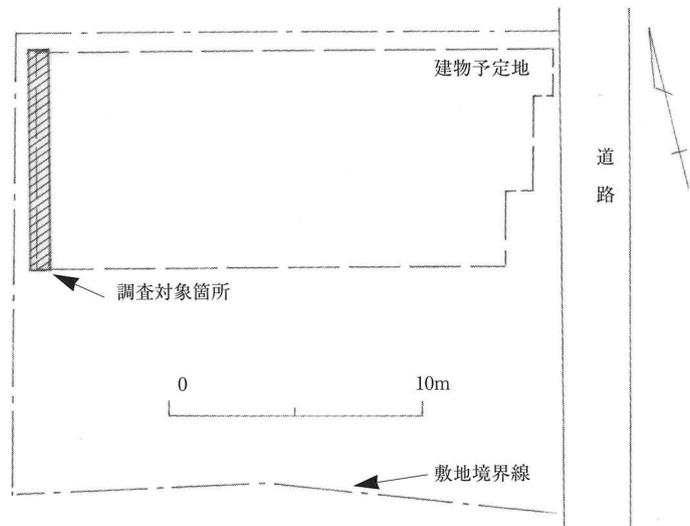
平成13年10月、東大阪市南四条町754-1番地において、個人から2階建の賃貸共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設工事は建物予定地の大部分では現地地表下-0.3mの掘削にとどまるが、建物の西端部のみ幅0.8m×長さ5.5mにわたって-0.9mの掘削を行うこととなっていた。このため、前記の深掘り部を調査対象として、事前の発掘調査を実施することになった。調査は平成13年12月5日に実施した。

2) 調査の概要

調査は、盛土層～床土層を機械で除去し、遺物包含層は機械を併用しながら人力で掘削し、遺物の収集に努めた。遺物包含層の下面で遺構を検出した。遺構の写真撮影・実測後、引き続き地表面下0.9mまで掘削した。確認した層位は以下のとおりである。

第0層 盛土層。 第1層 旧耕土層。
第2層 床土層。

第3層 2.5Y4/1黄灰色細礫混じりシルト質細粒砂。中世期の土師器、古墳時代の須恵器・土師器、弥生土器の各小細片を包含する。

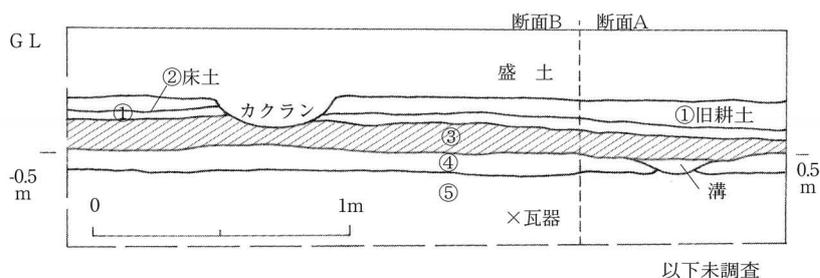


第2図 調査トレンチ位置図

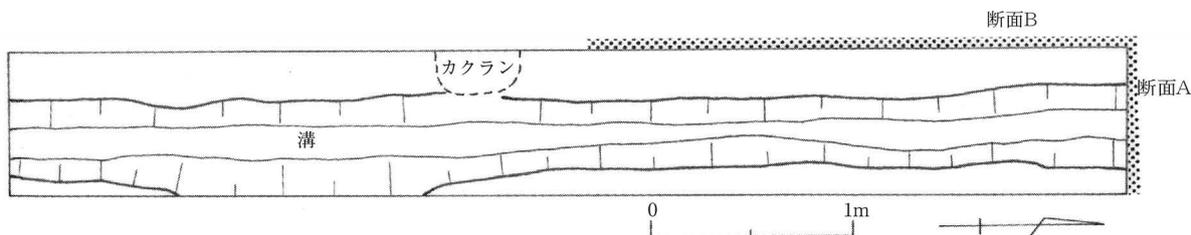
第4層 7.5YR5/6明褐色シルト質細粒砂。上面は遺構面をなす。

第5層 7.5Y4/3暗オリーブ色シルト混じり中粒砂。

検出した遺構は溝状の遺構で、幅40cm、深さ8cmを測る。現地の所見では、北から南へ流下する



第3図 調査地断面図



第4図 遺構平面略図

と思われる。第3層と第4層は色相や土質から古相の耕作土と考えられ、介在する溝は耕作に伴う鋤溝の類かと推定されよう。また第5層内より13世紀代の瓦器埴小片が出土したため、溝はおおむね室町時代ごろの所産に比定される。なお、出土遺物は細片化した土器で、図示にはいたらなかった。

3) まとめ

調査地は、縄文時代の集落跡が検出された縄手小学校や該期の頭部土偶が出土した縄手農協(現、JAグリーン大阪縄手支店)敷地と近接しており、縄文時代の遺物包含層ないしその二次堆積層の検出が期待されたが、中世期の溝のみの発見にとどまった。むしろ、古相の耕作土の存在や最下部が砂層であったことを考慮すると、今回の調査地は縄手小学校敷地より地形的に低いことが想定され、かつ調査地を横断する自然流路の存在が暗示される。このように仮定すると、調査地は遺跡の北端部にあたることから縄文時代の集落域の北への広がりや推定することが可能となろう。さらにその例証には、調査地付近とくに北側での調査例の進展が望まれるところである。



第5図 溝掘削後の状態

第3章 山畑古墳群第21・22次発掘調査

1) はじめに

山畑古墳群は、東大阪市瓢箪山町・四条町・客坊町・上四条町に広がる6世紀前半から7世紀初頭にかけての市内最大の群集墳である。山畑古墳群に包摂される遺跡範囲のうち郷土博物館の西方部は弥生時代後期の山畑遺跡として周知されている。現在まで古墳は68基確認されているが、近代以降開墾などにより多くが消滅した。形態は横穴式石室をもつ直径10～15m前後の円墳がほとんどであるが、双円墳や方墳、上円下方墳などもみられる。石室内からは馬具が多く副葬されていることから馬飼部を統率した河内首一族が築いた古墳群と想定されている。

平成13年2～3月、瓢箪山古墳と消滅した鬼塚古墳との間で共同住宅建設に伴う調査が実施された(山畑古墳群第20次発掘調査)。調査の結果、弥生時代後期・古墳時代後期前半・江戸時代後半の各時期の遺構と弥生時代から江戸時代にわたる遺物が検出された。とくに古墳時代後期の遺構・遺物は濃密で、第20次調査地から西方の市尻遺跡に及ぶ地域は、5世紀代から6世紀初頭までの集落が広がると推定されている。山畑古墳群では現況の目標物で近鉄瓢箪山駅南側一帯の扇状地での調査例が稀薄であったため貴重な調査成果であり、集落の营造時期から東方の古墳群との関係が課題となった。

平成13年12月、東大阪市瓢箪山町932-5番地、および四条町479-3・4番地において、別体の個人から個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。偶々建設工事の施工業者が同じで工事の工法も同一であった。距離にして約150mの地点となる。ここでは調査の概要を個別に報告し、「まとめ」は2つの調査成果から導かれる諸課題について考えていくこととしたい。

2) 第21次調査の概要

確認調査は平成14年2月4日に実施した。調査の対象地は建物の南東になった。これは建築工法として簡易鋼管杭を部屋の壁立ちに打設するため、支障のない箇所を選定したことによる。確認調査の層位は以下のとおりである。

第0層 表土層。 第1層 旧耕土層。 第2層 床土層。

第3層 10YR3/2黒褐色粘質シルト。

第4層 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土。

第5層 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土。下部は中礫混じり。

第6層 2.5Y5/3黄褐色細礫混じりシルト。地山層である。

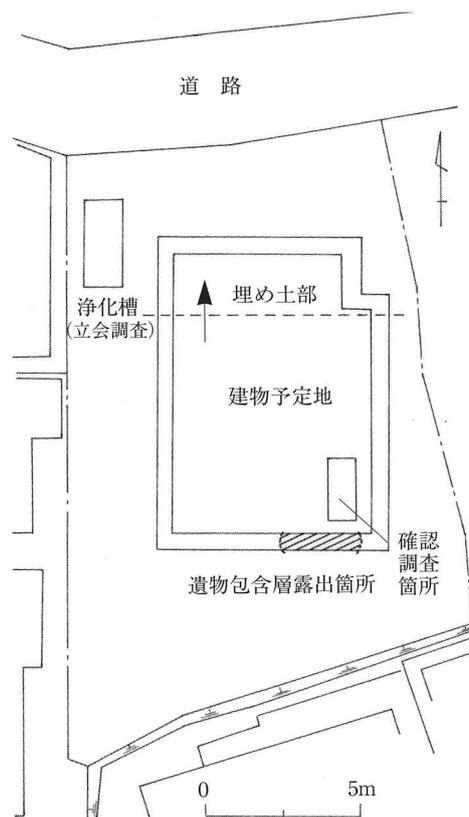
調査トレンチの南東隅では、第6層(地山層)が地表面下0.5mで検出され、北西へ傾斜する落ち込みが確認された。第3～5層はこの落ち込みに伴う埋土と考えられ、古墳時代の土器を多く包含する。

確認調査の結果、建物敷地の北西隅に予定される浄化槽と建物の外周部の掘削箇所について、立会調査を行うことになった。立会調査は平成14年2月18日に実施した。まず浄化槽部の層位は次のとおりである。

第0層 表土層。 第1層 旧耕土層。

第2層 5Y4/3暗オリーブ色細礫混じりシルト質細粒砂。

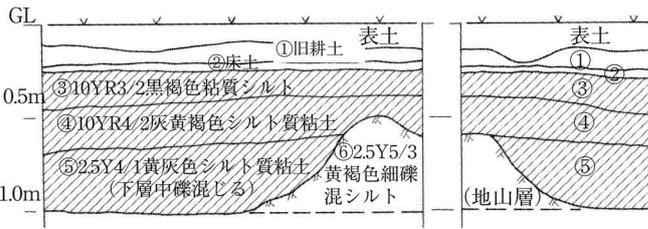
第3層 2.5Y5/4黄褐色細礫混じりシルト。



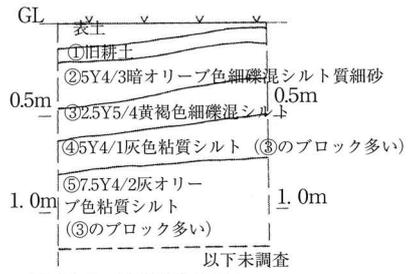
第1図 第21次調査の概況図

第4層 5Y4/1灰色粘質シルトで第3層のブロック土を多く含む。

第5層 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘質シルトで第3層のブロック土を多く含む。



第2図 第21次調査(確認調査)断面図



第3図 第21次調査(浄化槽部)断面図

第1層以下は南から北へ緩く傾斜していることが観察できた。浄化槽部では遺物は出土していない。第3層は周辺での地山層と相似しているが粘性がなく客土と思われる。第4・5層も第3層のブロック土が混入していることから、近代以降の埋立てに伴う土層と考えられる。

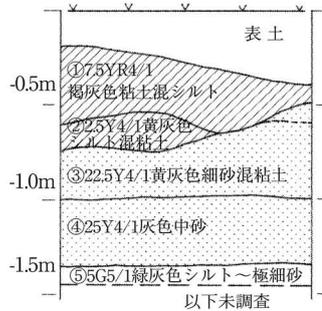
建物外周部は地表面から0.3mの掘削で、確認調査箇所の南側で遺物包含層が露出したほかは旧耕土層ないし床土層を検出したにとどまった。

確認調査と立会調査の結果を勘案すると、旧地形が南東から北西へ大きく傾斜していることが推定される。確認調査で落ち込みと捉えた遺構もこの旧地形に伴うものと考えられる。敷地南側には水路を挟み家屋が林立するが、調査地表面との比高差は1.5m以上を測り、そのまま南の集落に続く。敷地中央から北側では古相の堆積土がなく、その辺りから旧地表面が地中深く潜行するとみられる。

3) 第22次調査の概要

確認調査は平成14年2月14日に実施した。第21次調査と同様の事由で建物敷地の南側を調査トレンチとした。確認調査の層位は以下のとおり。

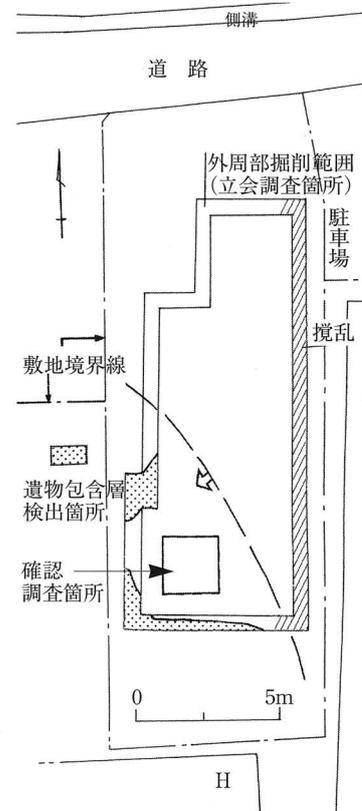
- 第0層 表土層。
- 第1層 7.5YR4/1褐灰色粘土質シルト。
- 第2層 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土。
- 第3層 2.5Y4/1黄灰色細粒砂混り粘土。
- 第4層 5Y4/1灰色中粒砂。
- 第5層 5G5/1緑灰色極細粒砂～シルト。



第4図 第22次調査断面図

第1～2層は古墳～平安時代の遺物を多量に包含する。第3～4層は古墳時代遺物を中量含んでいた。調査トレンチ内では表土下で近代以降の耕作土や埋土は見られず、古相の遺物包含層が露出していた。断面の観察結果から、第2層上面と第3層上面に遺構の凹地形が認められた。とくに第3層上面は南から北へ大きく傾斜していた。これは敷地北端を西へ流下する棚林川に伴うものと考えられる。また第3～4層の遺物包含の状態から、調査トレンチでは少なくとも①第2層上面、②第3層上面、③第5層上面の3期の遺構面を確認することができた。調査トレンチ全体でビニール袋大3袋分の遺物を採集した。調査トレンチの規模(2m×2m)からみて多量の遺物といえよう。

確認調査の結果、前記の第21次調査と同様、建物外周部の掘削工事時に立会調査を実施することになった。なお浄化槽設置工事はなく下水は生放流である。立会調査は平成14年3月5日に行なった。



第5図 第22次調査概況図

建物外周部の掘削工事は現地表下0.3mの深度で、外周部の南西部で遺物包含層(確認調査の第1層)を確認した。層内から摩滅した古墳時代の土師器・須恵器を少量検出した。

4) 出土遺物(第6図)

図示したのは、すべて第22次調査(確認調査)第1~2層からの出土遺物である。

土師器坏(1~9)口縁部が体部から逆ハの字形に張り出し、頸部にやや厚みもち、口縁部先端を尖らす。外面は口縁部ヨコナデ、体部下半にユビオサエを施す。内面はヨコナデで仕上げる。口縁部の強いヨコナデにより頸部に屈曲点をもつものがある(4・5・6・7・8・9)。口径は10.8cm~15cmである。色調は1~8がにぶい褐色系(7.5YR 7/4)、9は赤橙(10R6/8)を呈する。14世紀~15世紀に位置づけられる。いわゆる「粗製坏」で、9~10世紀代に位置付けられる。

黒色土器(10・11) 埴でいわゆる内黒である。10は高台部分で、先端部がやや尖る。摩滅のため調整は不明である。11は外上方に広がる器形を呈し、口縁端部を尖らせる。内外面共、ナデにより仕上げています。

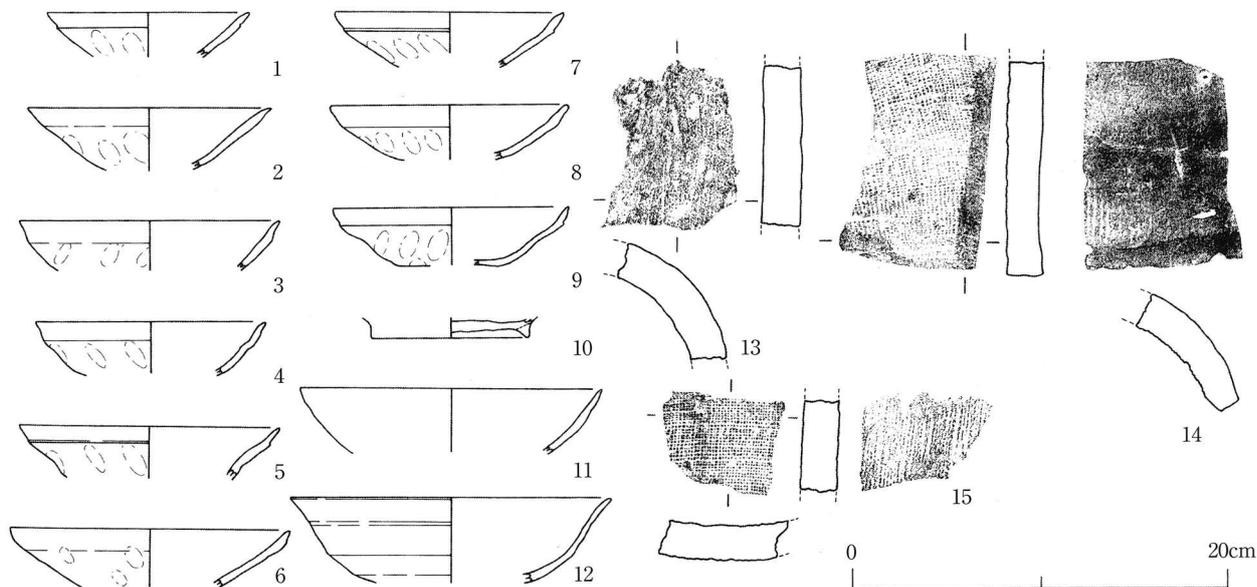
須恵器 12は埴で直線的に外上方に広がる器形をもち、口縁端部を尖らす。体部上半は回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリを施しその角度で屈曲点をもつ。内面は回転ナデを施す。9世紀に位置づけられる。

瓦(13~15) 丸瓦2点(13・14)と平瓦1点(15)が出土している。13は凹面に布目の圧痕をもち、凸面の調整については不明である。14は凸面をタタキのちナデで調整し、凹面に布目(5本/cm)の圧痕がつく。端面はナデ仕上げである。15は凸面縄タタキで凹面は布目圧痕(7本/cm)が残る。13・14については生駒西麓産の胎土だが、15については生駒西麓産の胎土ではない。

5) まとめ

第21・22次調査とも極めて限られた調査区であったが、従来未詳であった山畑古墳群の西端部(扇状地部)において新たな知見をもたらした。ここでは箇条書きに調査成果をまとめておきたい。

① 第22次調査では、3面の遺構面を確認した。このうち第2層上面・第3層上面の遺構面は平安時代前半を中心とした時期に措定できる。第6図に図示した遺物のうち、1~9の粗製坏は調査地の北300mにある皿池遺跡に出土例がある。河内寺を挟んで北と南に該期の集落が所在することが推定



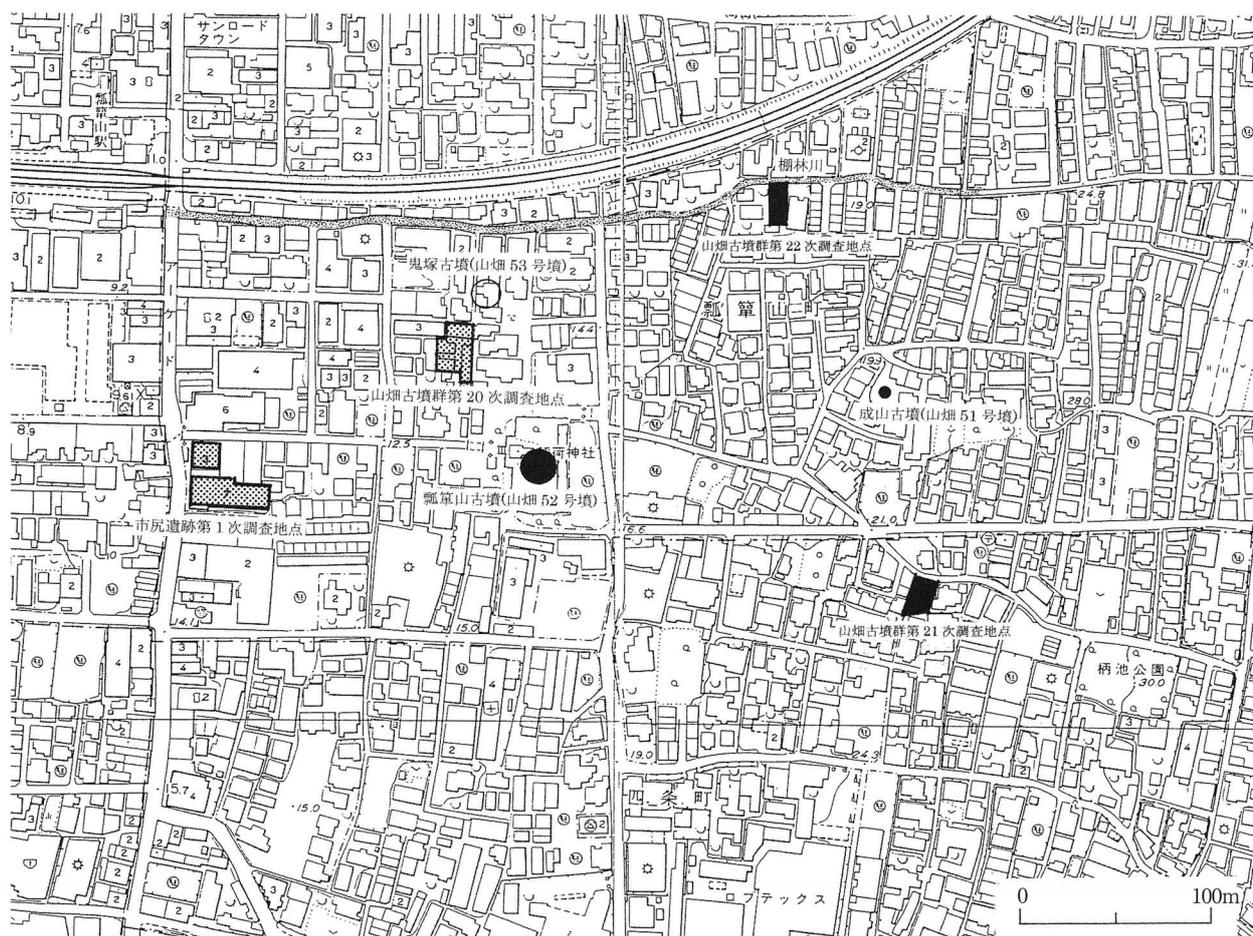
第6図 第22次調査出土遺物実測図

できる。第22次調査地の地形から平安期の集落は南西方向に広がることが予想される。しかし、第20次調査地では該期の遺物は出土しておらず、小規模な集落構成をとるものと思われる。

② 古墳時代の遺物は図示できなかったが、第22次調査で6世紀前半の須恵器坏身の細片が見られた。第21次調査地と第22次調査地の中間には成山古墳(山畑51号墳)があり、墳丘から円筒埴輪が採集されている。第21・22次調査地の地形からみた古墳時代の集落の広がりとは不明だが、中間位置に古墳が介在することで、今後の調査進展によっては、その時期や立地の問題が明らかになることが期待される。なお、第22次調査地は山畑古墳群の北端部に位置し、今回の調査成果から遺跡範囲の拡大が必要と思われる。

【参考文献】・東大阪市教育委員会『東大阪市の古墳〔改訂版〕』、2001年。

・東大阪市教育委員会『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』、1979年。



第7図 第21・22次調査地の位置と周辺の古墳・調査地

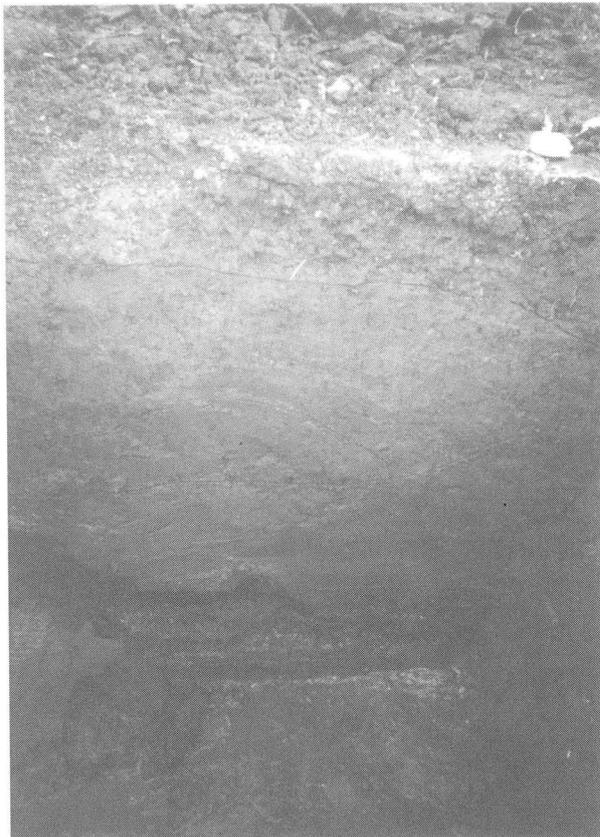
図版1 山畑古墳群第21・22次調査 遺構



第21次調査 浄化槽部掘削前状況



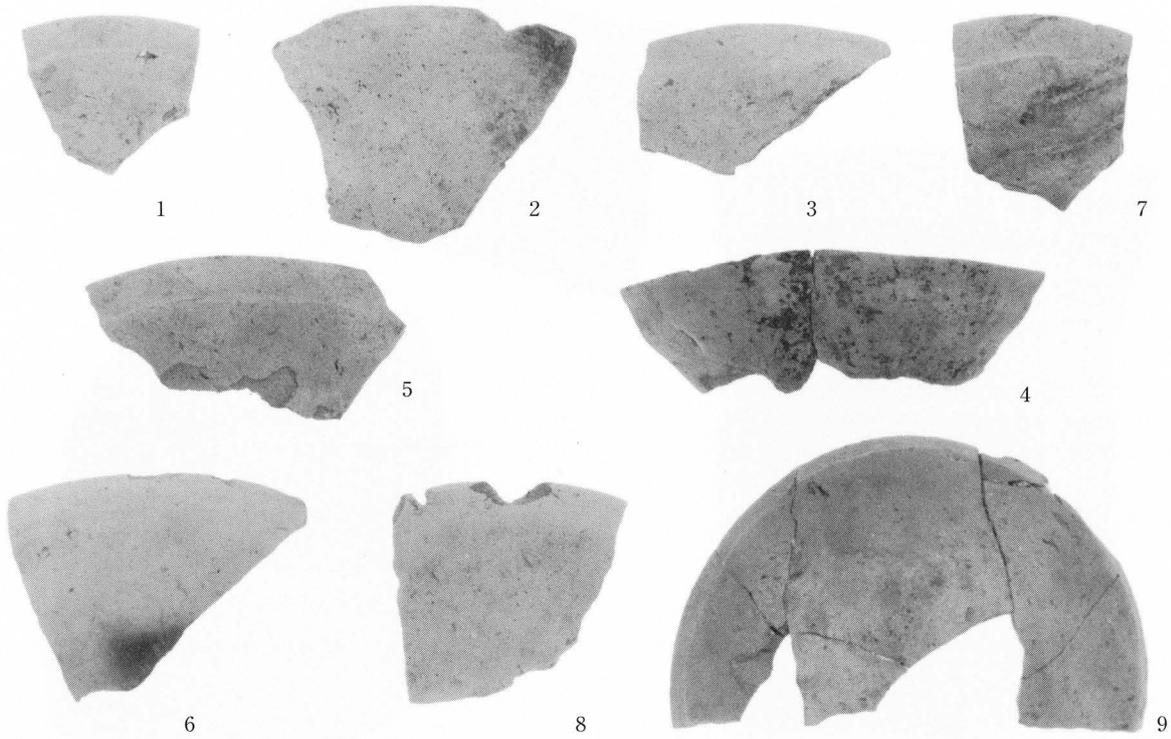
第21次調査 立会調査の状況



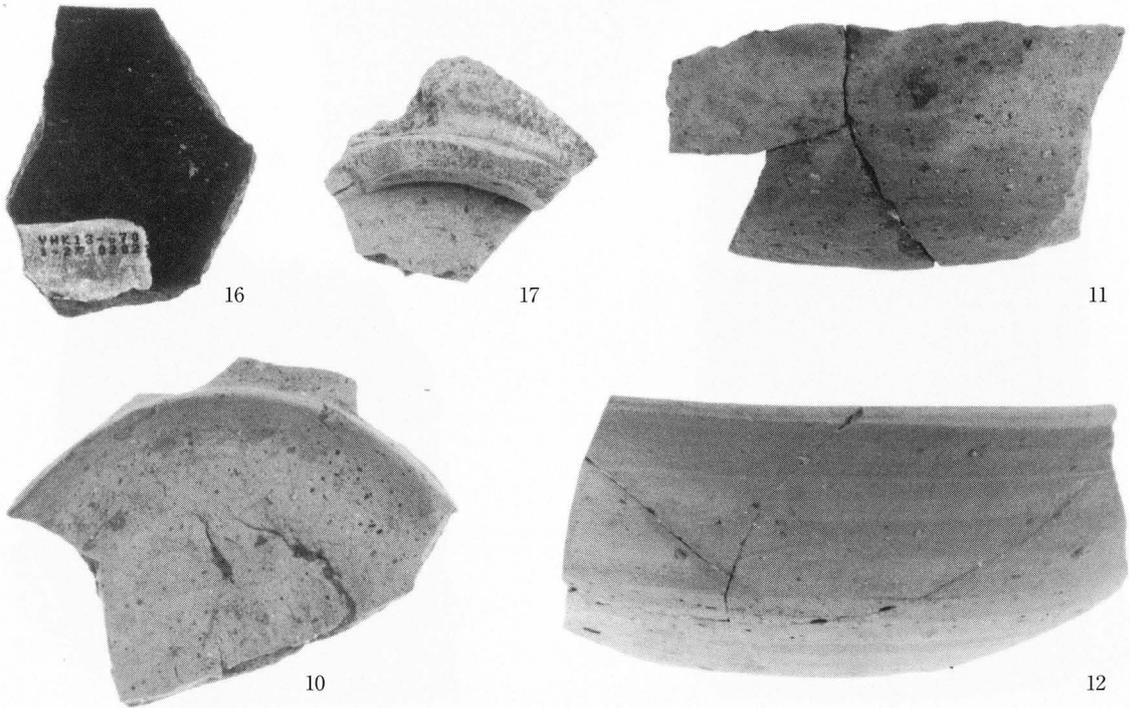
第22次調査 調査地断面



第22次調査 立会調査の状況

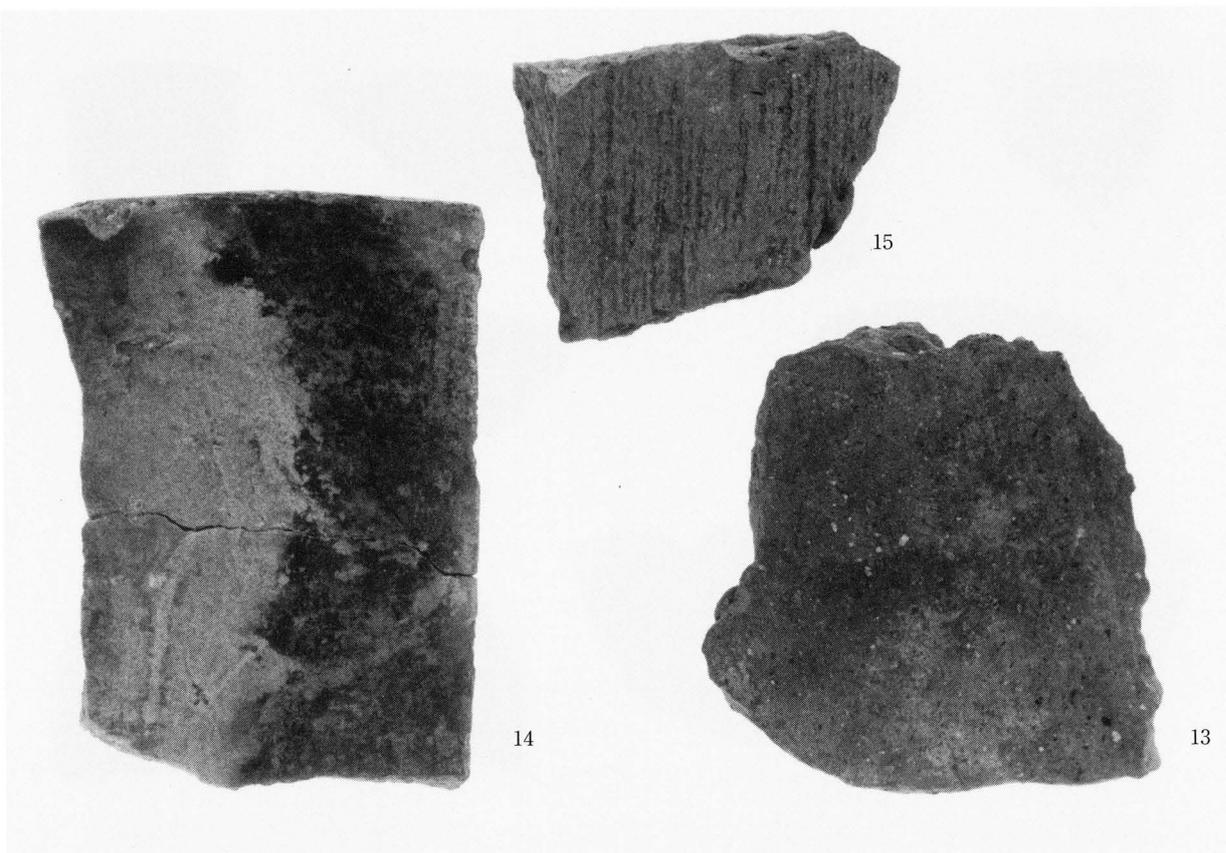


土師器坏 (1~9)

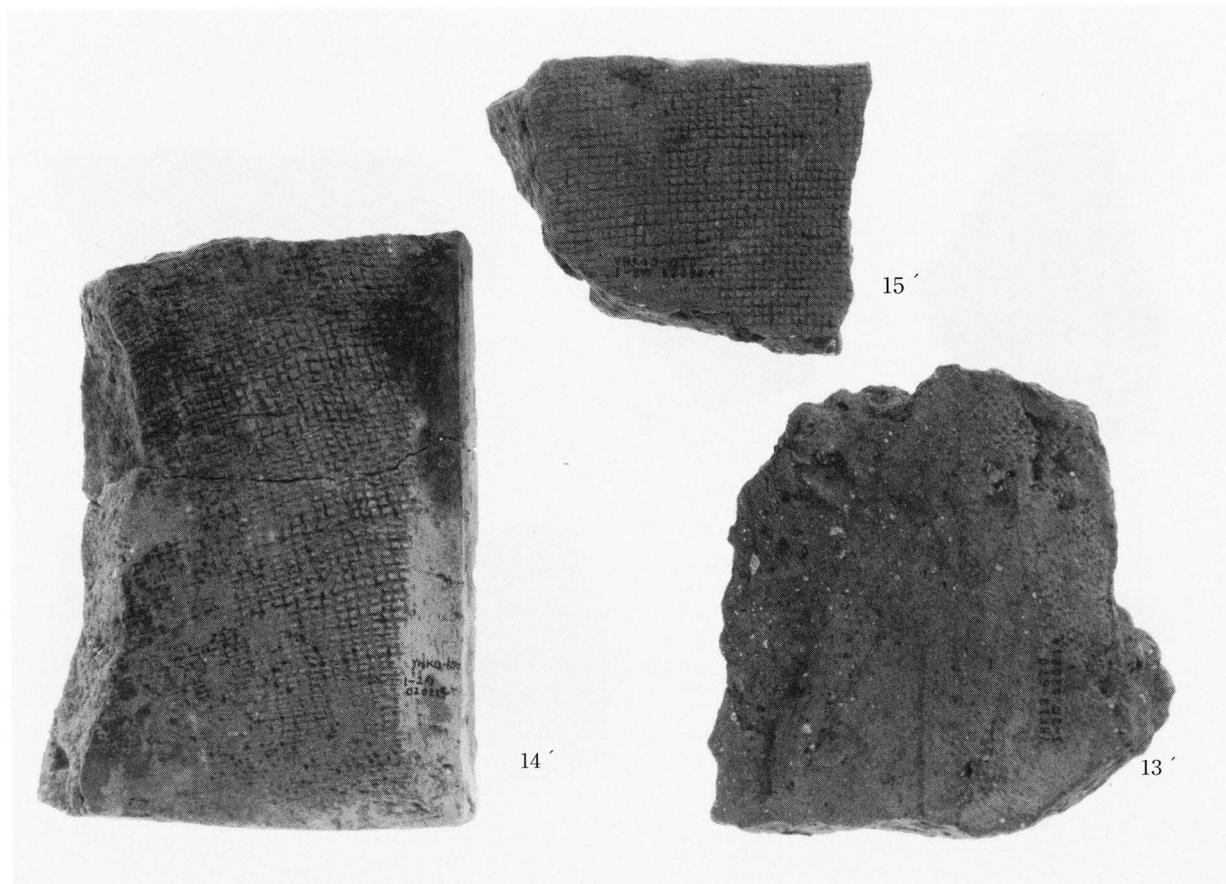


黒色土器 碗(10・11・16) 須恵器碗(12)、坏(17)

図版3
山畑古墳群第21・22次調査
遺物



丸瓦 (13・14) 平瓦 (15)



同上

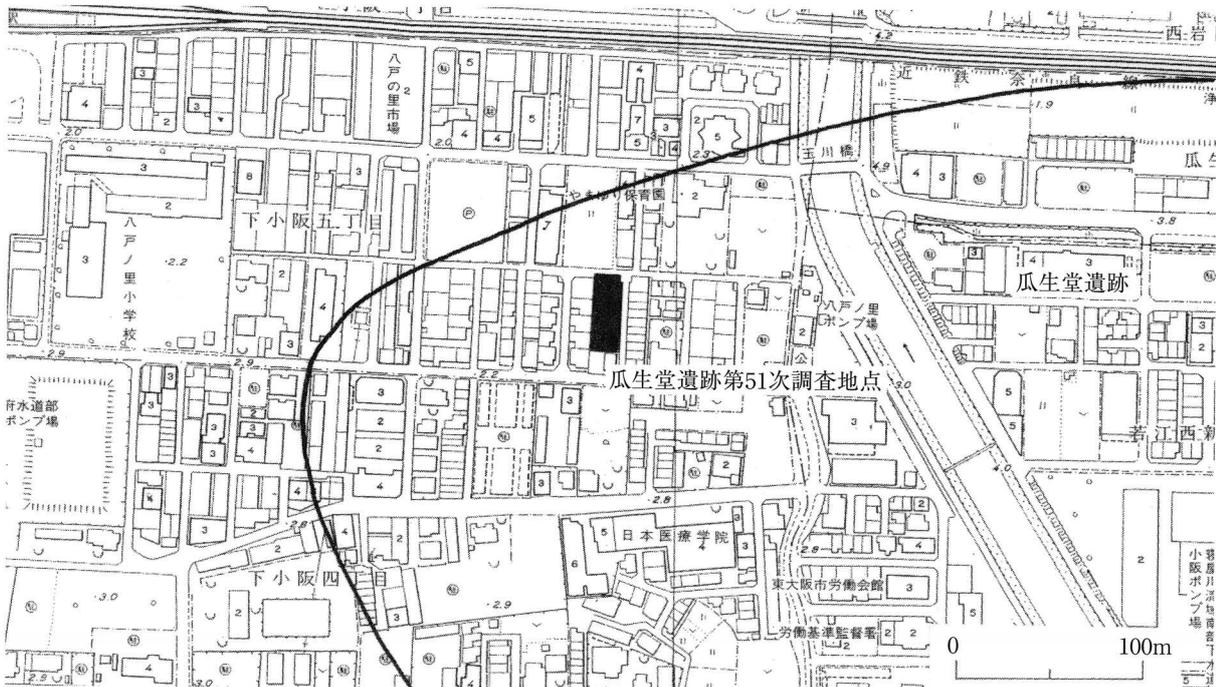
第4章 瓜生堂遺跡第51次発掘調査

1) はじめに

瓜生堂遺跡は、東大阪市若江西新町1～2丁目、瓜生堂2～3丁目、若江北町1～2丁目、下小阪4～5丁目、中小阪4～5丁目に広がる弥生時代前期から江戸時代にかけての集落遺跡である。遺跡内外での諸工事に伴い、遺跡の範囲は拡大の一途を辿り、現在東西約1000m、南北約750mに及ぶものと推定されている。遺跡は旧大和川に属する諸河川が形成する自然堤防、あるいは三角州上に立地し、現在の地表面で標高2～4mに位置している。

平成14年9月、東大阪市下小阪5丁目31-1番地において、小世帯向共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人より提出された。基礎工事は杭打ち工事を計画されていたため、工事実施により埋蔵文化財が破壊される恐れがあった。このため東大阪市教育委員会では事前の確認調査が必要な旨、届出者に通知した。確認調査を同年9月24日に実施したところ、現地表下1.9m～2.2mで古墳時代後期の遺物包含層を検出した。直ちに東大阪市教育委員会と届出者は埋蔵文化財の取扱いについて、協議に入り工事内容を精査した結果、西側と東側の杭通り2本分が埋蔵文化財に支障を来たことが判明した。ただし開発地内に排土の仮置き場を確保する必要があること、西の側面に民家が密集しており調査に危険が伴うこと、杭通りの幅は1.2mで遺物包含層が地下深いため調査進行に安全が図られ難いこと、などの諸条件があったため、調査の実施方法については大阪府教育委員会の指導を仰いだ。そこで東側の杭通りに2本分の幅2.4m分を確保し、その西側は排土置場とすることで合意した。調査対象は東西2.4m南北24.6mで面積は約60㎡である。調査は平成14年10月16日から10月31日まで行なった。

今回の調査地は瓜生堂遺跡の西端部にあたり、下小阪地区でははじめての発掘例となる。現在の地形で第二寝屋川以東では遺跡の調査例は多いが、西側では極めて少ない。この観点から集落の時期的な動態解明が大きく期待されることになった。



第1図 調査地位置図

2) 調査方法と層位

まず、確認調査で遺物包含層の検出深度が地下深いことを確認していたため、トレンチの設定にあたり調査進行の安全を図る必要が生じた。そこで地表面では各々1m拡張しノリ面をつけながら、遺構面で幅2.4mを確保するよう心がけた。調査は盛土層・第1～3層を重機で除去し、第4層以下を人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。第3層は後述のようにマンガン粒の沈着が激しく、遺物は見出していないがほぼ近世期頃の耕作土と推定されるため、機械掘削の対象とした。

調査開始まもなく、トレンチのほぼ中央で第2層(床土)上面を遺構面とする近代期の野井戸を検出した。このため調査地北側をA区、中央の井戸検出部をB区、南側をC区と仮称し地区割りを行なった。調査で検出した層位は以下のとおりである。

第0層 盛土層。調査着前まで使用されていた駐車場の地上げ土。表層はアスファルトであった。

第1層 旧耕土層。

第2層 床土層。

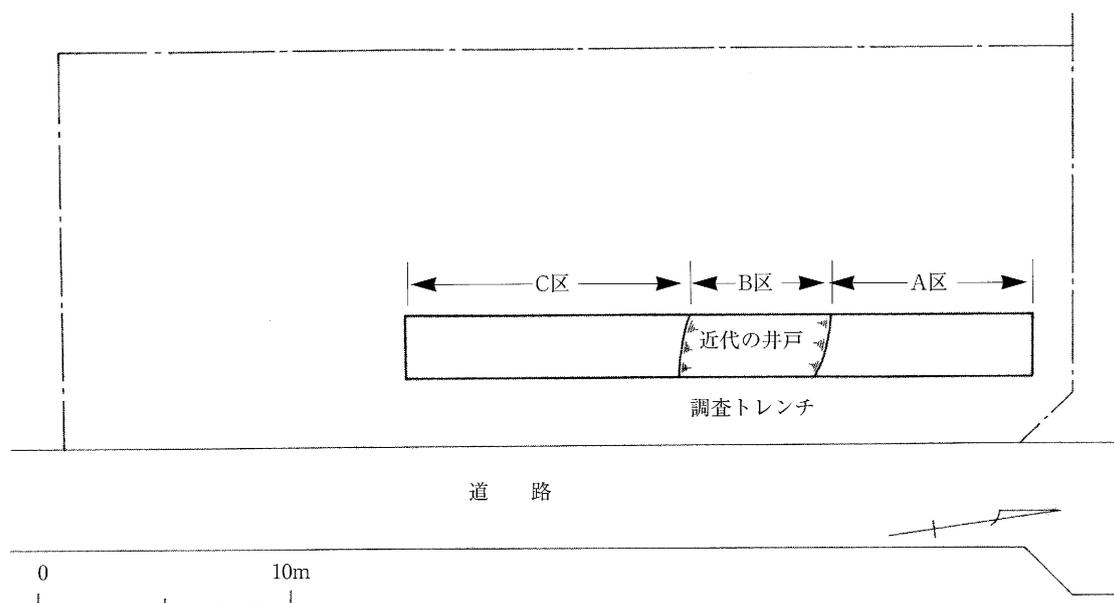
第3層 5Y5/3灰オリーブ色粗粒砂混じりシルト。マンガン粒の沈着が著しい。層厚15～20cm。近世期頃の耕作土と思われる。

第4層 2.5Y6/2灰黄色シルト混じり粘土。第5層の上面で検出。層厚30cm以上。西端際にトレンチのラインに沿って幅0.5～0.7mまで続く。後記の第5層の検出レベルが本調査のトレンチと西側の確認調査のそれと第4層分の比高差があり、基本層位として取り扱った。大きな坪境に伴う段落ちの堆積層の類かと推定される。

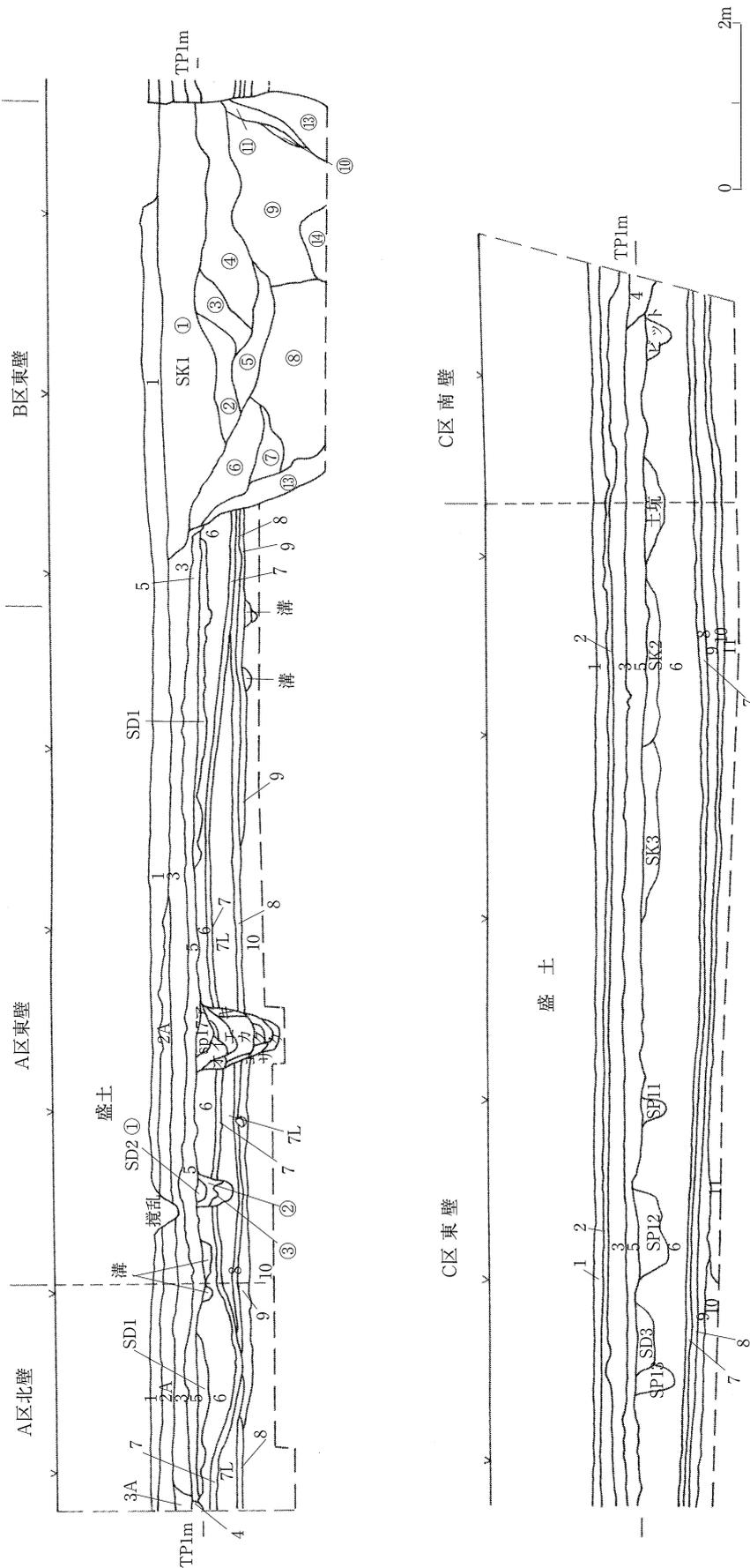
第5層 2.5Y4/1黄灰色シルト混じり粘土。層厚10～20cm。古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層。調査トレンチのほぼ全域を覆う。

第6層 10YR5/6黄褐色粘土。層厚10～65cm。色相や土質は段丘の地山層と酷似し、安定した地盤を示す。上面は飛鳥～奈良時代の遺構面を形成する(遺構面Ⅰ)。

第7層 N3/暗灰色粘土のラミナ層。3ないし4層の互層堆積が見られた。層厚6～8cm。上面のレベルは、北端0.9m南端0.5mで緩やかに傾斜している。上面は遺構面Ⅱを形成する。北側では次の第8層との間に嵌入する層がある。これを第7L層とした。その色相・土質は



第2図 調査地位置図



- SP11(細方) 6層で微量に5層を含む。つづいて(柱状)5層主体で少量6層が混じる
 SP12 6層主体で5層ブロック含む
 SP13 6層主体で5層ブロック含む
 SD3 5層主体で6層少量混じる
 SK2 6層主体で5層ブロック少量含む
 SK3 6層主体で5層ブロック少量含む
 SD1 5層主体で6層少量含む
 SD2① 6層主体で少量5層含む
 ② 10Y4/1 灰色シルト質粘土で6層ブロック中層含む
 ③ 7L下層と7層と②の灰色シルト質粘土の混合土

- 1 旧耕土
 2 床土
 3 5Y5/3 灰オリーブ色粗粒砂混シルト
 4 2.5Y6/2 灰黄色シルト混粘土(上面にマンガンの沈着あり)
 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト混粘土
 6 10YR5/6 黄褐色粘土
 7 N3/暗灰色粘土のラミナの互層 (A区では黒褐色)
 7L 7.5YR4/4 褐色粘土
 8 N4/灰色粘土(2.5G6/1 オリーブ灰色粘土のラミナあり) (A区では明褐色)
 9 N2/黒色粗粒砂混粘土
 10 5EG5/1 青灰色中砂～粗少量含む (A区ではオリーブ黄色)
 11 2.5Y5/3 黄褐色極粗砂～細礫

第3図 調査地断面図

7.5YR4/4褐色粘土である。

第8層 北側と南側では色相・土質が相違する。北側では7.5YR5/6明褐色シルト。南側ではN4/灰色粘土で2.5GY6/1オリーブ灰色粘土のラミナが認められる。層厚5~15cm。

第9層 北側と南側では色相・土質が相違する。北側ではN4/灰色シルト~極細粒砂。南側ではN2/黒色粗粒砂混じり粘土。北側では土師器鉢(第12図69)が1個体出土した。層厚8cm。

第10層 5Y6/4オリーブ黄色中粒砂~細粒砂。南側では2.5Y5/3黄褐色極粗粒砂~細礫。最深部で60cm以上を確認した。上面は遺構面Ⅲを形成する。

今回の調査で基盤層となるのは第10層である。第10層から上部の層準とその出土遺物の年代観から、第10層は古墳時代初頭(庄内式期)ごろの河川氾濫による堆積層と考えられる。

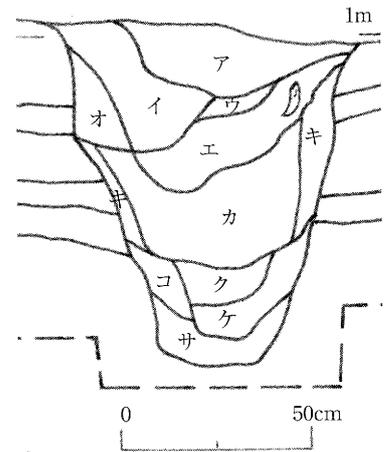
3) 検出した遺構

今回の調査で検出した遺構について、概略を述べていきたい。その際、遺構番号は現場の名称を踏襲していることを付記しておく。

① 遺構面Ⅰ(第6図)

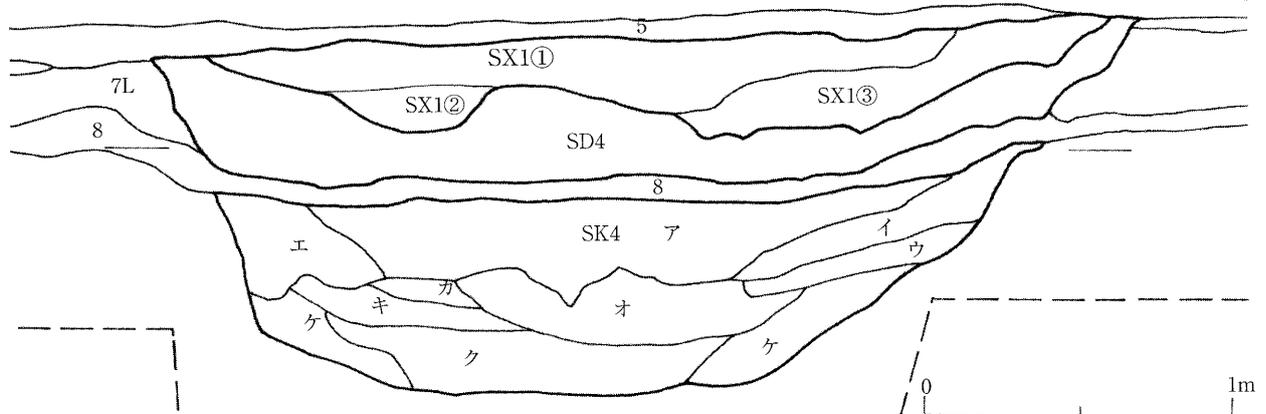
第6層上面を遺構面Ⅰとする。遺構面Ⅰでは、ピット・土坑・溝・落ち込みを検出した。

ピット 規模や形状は別表にまとめたので参照されたい。平面形態は円形ないし楕円形を呈するものが大部分で、方形のものは少ない。柱痕跡が明瞭に認められ、遺構面Ⅰのピットは柱穴に相当する。埋土は柱痕跡に第5層、柱掘形に第6層に第5層がブロック状に混入する層の組み合わせが多い。この中で、SP9とSP10で切り合いがある。柱掘形の埋土がSP9は第5層の含入が大きく、SP10は小さいという相違が認められた。柱通りは、トレンチの規模の制約上明確にしがたいが、SP7-SP18-SP10のライン



- ア 5層主体で6層を中量含む
- イ 5層主体で6層と7層を中量含む
- ウ 10Y4/1灰色粘土で炭化物層を少量含む
- エ 炭層と粘土を含む
- オ 5層主体で6層を多量含む
- カ 7L層と8層を主体で10Y4/1灰色シルト粘土を中量含む
- キ 10Y4/1灰色粘土と7L層を少量含む
- ク 9層主体で炭化物と10層を含む
- ケ 9層主体で10層を少量含む
- コ 9層主体で10層を多量含む
- サ 10層主体で9層を少量含む

第4図 SP17断面図



- SX1① 10Y4/1 灰色シルト質粘土主体で6層を少量含む
- SX1② 5Y4/1 シルト質粘土
- SX1③ 5Y4/1 灰色シルトで6層を中量含む
- SD4 5Y4/1 灰色シルトで7L層を少量含む
- SK4 ア 2.5Y5/1 黄灰色粘土
- イ 2.5Y5/1 黄灰色粘土主体で10層を少~中量含む
- ウ 10層主体で2.5Y5/4 黄褐色粘土を少量含む
- エ 10層主体で2.5Y5/1 黄灰色粘土を中量含む
- オ 5B4/1 暗青灰色粘土
- カ 5B4/1 暗青灰色粘土と2.5Y5/1 黄灰色粘土を少量含む
- キ 5B4/1 暗青灰色主体で5B6/1 青灰色中粒砂を少量含む
- ク 5B4/1 暗青灰色主体で5B6/1 青灰色中粒砂を中量含む(植物遺体を含む)
- ケ 5B4/1 暗青灰色主体で5B6/1 青灰色中粒砂を中量含む

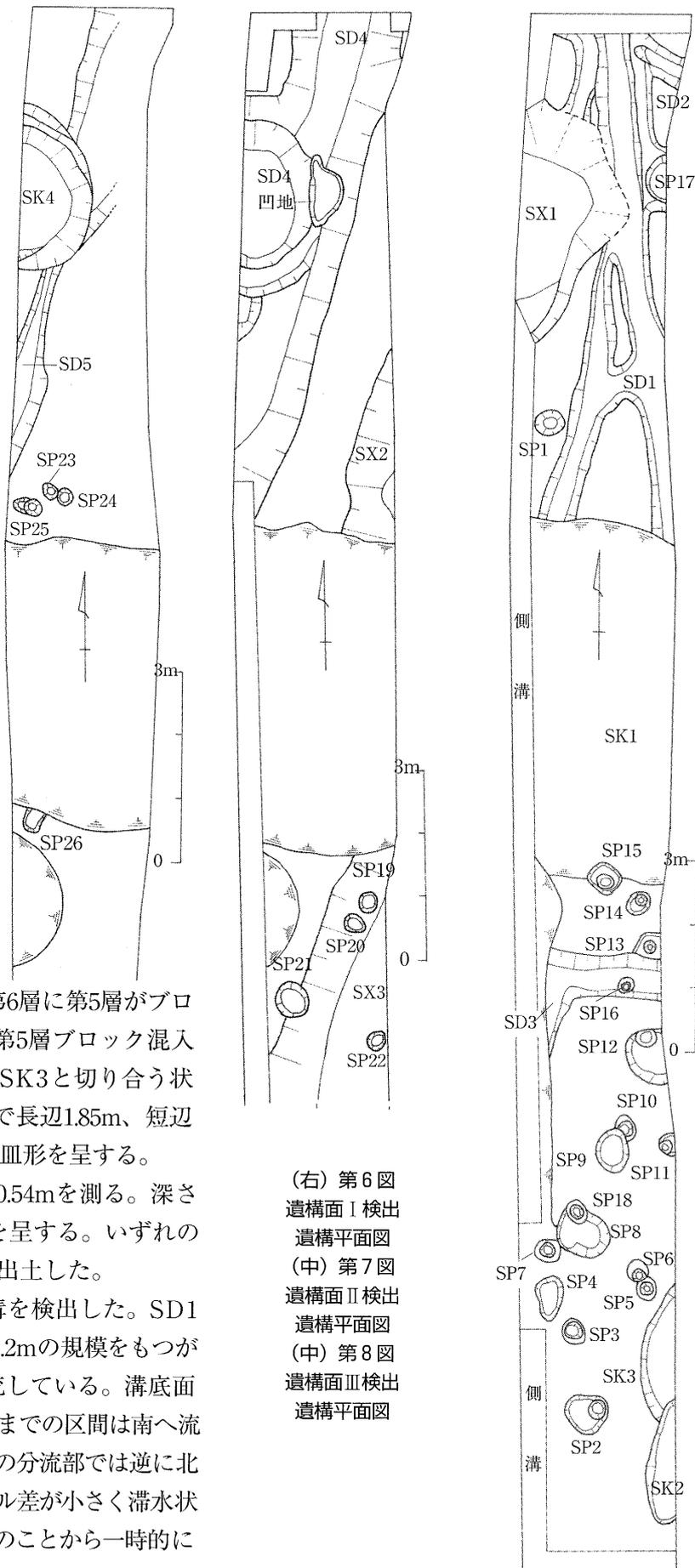
第5図 SX1・SD4・SK4断面図

とSP7-SP5のラインは直行するため、掘立柱建物の存在がうかがわれる。

ピットのうち、SP17は円形を呈し、現存長で長軸74cm、短軸33cmを測る。深さは90cmに及んでいる。ピットの壁は直下気味に落ちる。坑内の埋土は11層に区分される(第4図)。大きくはア～エ層の上層、オ～キ層の中層、ク～サ層の下層の3層に分類できる。遺構の掘り下げ時では、遺物の出土は顕著でなかったが、壁面に土器が露出していたため調査の最終日に壁面からの掘り下げを行なったところ、多数の製塩土器とともに斜方に坐る土師器甕の完形品が出土した(図版4・6)。埋土の堆積状況や遺物の出土状態からみて、SP17は柱穴とは考えにくく、底面が砂層の第10層に達していることから、小規模な井戸と捉えられる。

土坑 調査地の南端で土坑2基を検出した。埋土はいずれも第6層に第5層がブロック状に混入する層であるが、第5層ブロック混入の度合いの大きさからSK2がSK3と切り合う状態が観察された。SK2は現存長で長辺1.85m、短辺0.44mを測る。深さは6cmで浅い皿形を呈する。SK3は現存長で長辺2.05m、短辺0.54mを測る。深さは9cmでSK2と同様浅い皿形を呈する。いずれの土坑も土師器・須恵器の細片が出土した。

溝 A区で2条、C区で1条の溝を検出した。SD1はA区全域でみられ、北側は幅1.2mの規模をもつが南側では幅0.5mの2本の溝に分流している。溝底面のレベルをみると、北端からSX1までの区間は南へ流下するが、SX1から南端にかけての分流部では逆に北へ流下する。また分流部ではレベル差が小さく滞水状態であったことが推定される。このことから一時的に



(右) 第6図
遺構面Ⅰ検出
遺構平面図
(中) 第7図
遺構面Ⅱ検出
遺構平面図
(中) 第8図
遺構面Ⅲ検出
遺構平面図

溝の滞水を防禦する施設がSX1に相当すると推定できよう。深さは北端部で16cm、分流部で3~7cmであった。北端部の断面形は二段落ちをみせている。埋土は第5層を主体とし、第6層のブロックを少量含む層であった。土師器・須恵器が出土したが、凶化しうるものは少量である(第10図)。SD2はA区の北端でSD1に接続する溝である。幅0.45mで深さは東で40cmに及ぶ。延長0.8m分を検出したにとどまったが、溝内から中量の土師器・須恵器が出土した。埋土は3層に区分される(第3図)。①層は第6層を主体に少量第5層が混じる層である。②層は10Y4/1灰色シルト質粘土に第6層が中量ブロックで混じる層である。③層は第7層・第7L層・②層の混合土である。溝壁面が直下するため溝状の土坑の可能性が指摘できる。

落ち込み 西側で不定形の落ち込みSX1を検出した。現存長で長辺3.8m、短辺1.7m、最深部で33cmを測る。後述するようにSX1の下部には前代の溝や井戸が存在し、その埋没後凹地になっていたところにシルト質土が堆積したものである。前記のようにSD1の排水機能を有していたと考えられる。出土遺物の年代観は遺構面Ⅰの他の遺構と比して古相で飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した(第10図)。

② 遺構面Ⅱ(第7図)

第7層上面を遺構面Ⅱとする。遺構面Ⅱでは、ピット・溝・落ち込みを検出した。

ピット ピットはすべてC区で検出した。落ち込みSX3の肩部に穿たれている。平面形は円形を呈する。遺物は出土しなかった。

溝 SD4を検出した。SD4は幅1.7m、深さ24~26cmを測る。底面のレベル差から、南から北へ流下する流れと凹地で西へ流下する流れとがある。西側で径2.7m最深部37cmを測る凹地がみられた。凹地内から須恵器坏蓋・坏身、土師器高坏脚部、円筒埴輪片、板材などが一括出土した。

落ち込み SD4と併行する溝状の落ち込みをA区、C区各1ヵ所確認した。A区をSX2、C区をSX3とした。これらはともに溝状遺構の一部と考えられるが、溝の両肩を検出していないため、落ち込みと仮称している。いずれも遺物は出土しなかった。

③ 遺構面Ⅲ(第8図)

第10層上面を遺構面Ⅲとする。遺構面Ⅲでは井戸・ピット・溝を検出した。

井戸 西側で検出。井戸SK4は円形で径2.6m最深部0.83mを測る。素掘りの井戸である。底面は砂層の第10層の下部にまで達している。上部のSX1・SD4の凹地はすべてSK4の埋没が起因となったものである。断面観察からSD4凹地下部とSK4上部との間に第8層が介在しており、上部遺構と下部遺構は明確に峻別される(第5図)。埋土は9層に区分される。古墳時代の須恵器・土師器や竈(第11図41)が出土した。

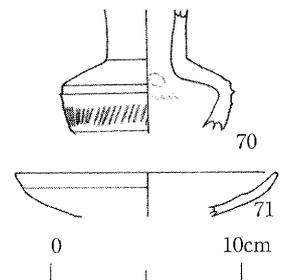
ピット A区南端からC区北端にかけて検出した。円形・方形を呈する。埋土はいずれも第9層である。第遺物は出土しなかった。

溝 A区の南西から北東にかけて流下する溝SD5を検出した。南側では幅0.24~0.4mを測るが、北側では喇叭状に開き、推定幅1.0mとなる。埋土は第9層である。その相違から井戸SK4に先行する。古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

4) 出土遺物

① 確認調査出土遺物

須恵器 70は小型の壺。体部外面に上下二本の沈線によって囲まれたクシによる刺突文の文様帯が見られる以外は、回転ナデ調整が施される。



第9図 確認調査出土土器実測図

頸部径4.2cm、肩部径9.0cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N5/)を呈する。

71は土師器皿。底部を欠損。外方に広がる体部から、口縁部は屈曲して上方に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。口径13.6cm。色調は浅黄橙色(10YR8/6)を呈する。

② 遺構面I出土土器

SX1出土土器(第10図1~15)

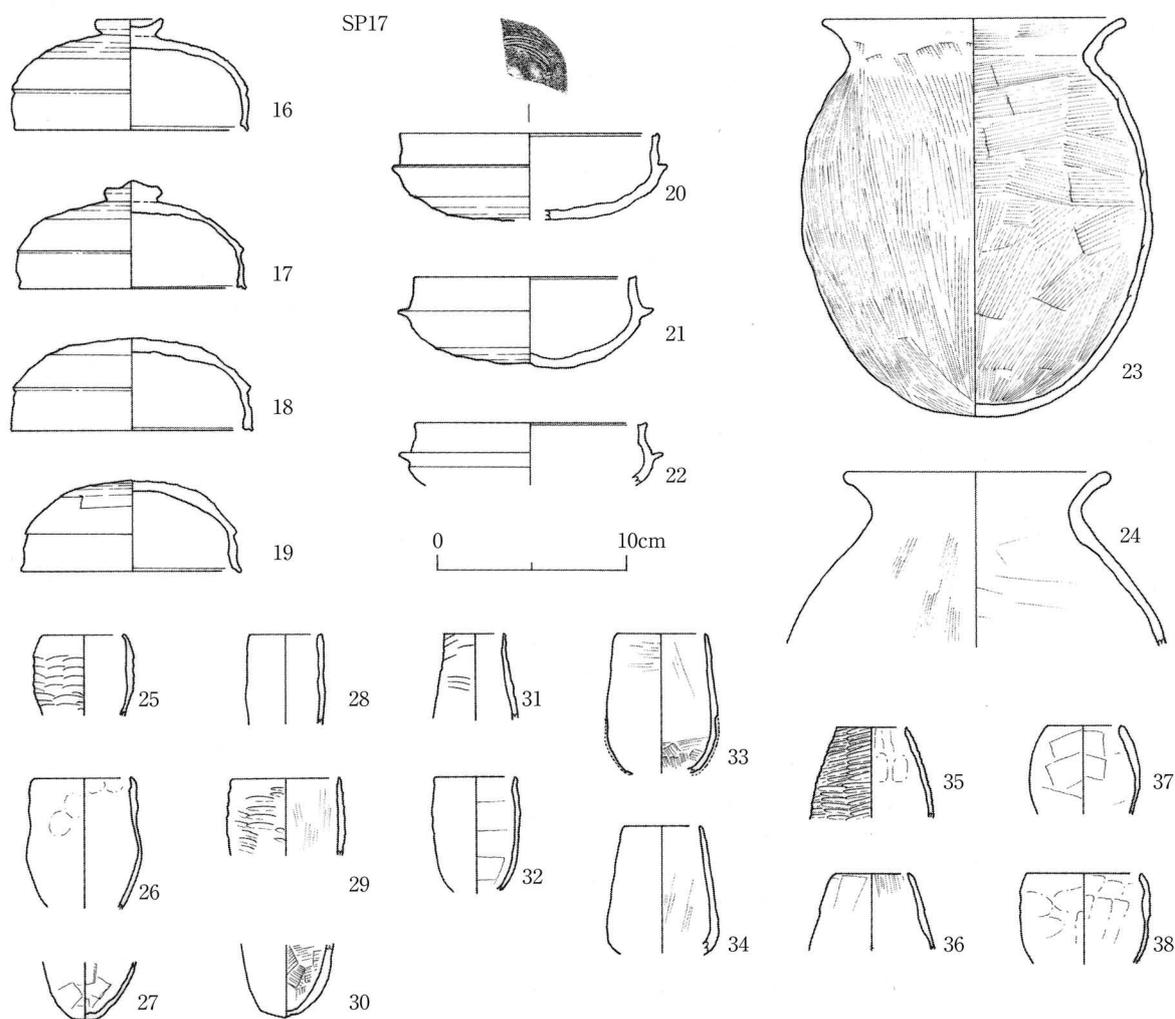
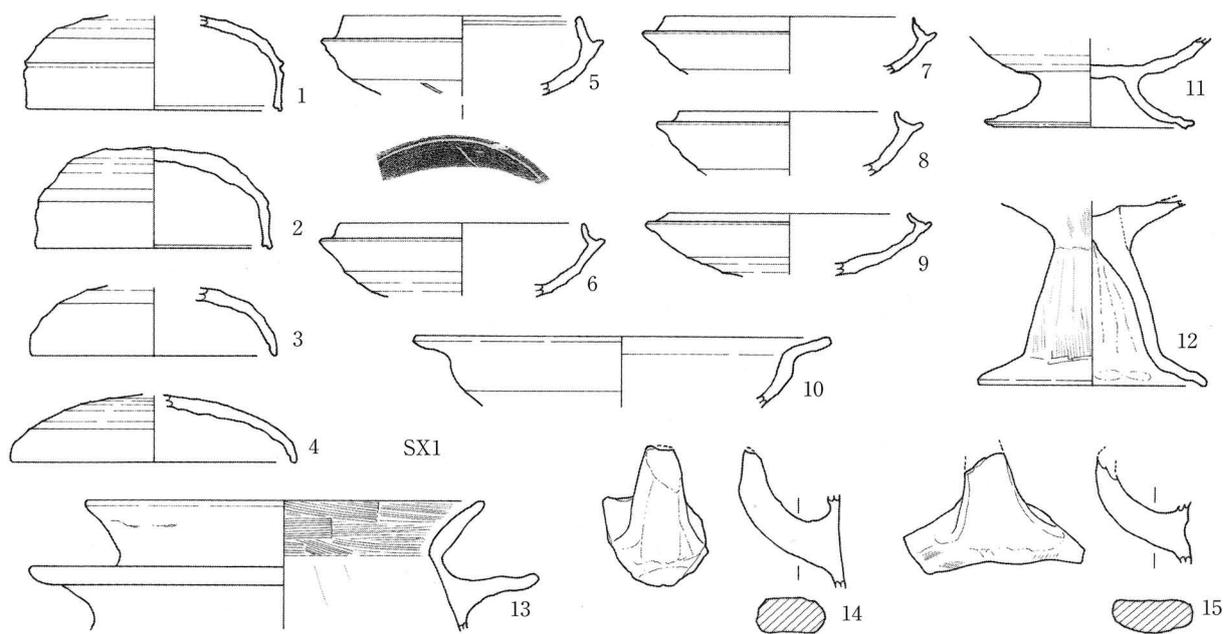
1~4は須恵器坏蓋。1は口縁端部が内傾する凹面をもち、稜は短く鋭さを欠く。外面天井部は丸味をもち、1/2に回転ヘラケズリが施される。口径13.1cm。色調は内面(灰白色N7/)、外面灰色(N5/)を呈する。2は口縁端部が凹面をもち、稜はわずかに見られる。外面天井部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径12.2cm、器高5.4cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰白色(N8/)を呈する。3は口縁端部がやや丸味をもち、稜の痕跡はみられず、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかな形態もち、1/2未満に回転ヘラケズリが施される。口径12.8cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰白色(N7/)を呈する。4は口縁端部が丸味をもち、わずかに立ち上がる口縁部がみられる。外面天井部は扁平で、回転ヘラケズリが施される。口径14.8cm。色調は灰色(N6/)を呈する。5~9は須恵器坏身。5は立ち上がりが短く内傾する口縁部、口縁端部内面には沈線が巡る。受け部は水平に付く。外面底部1/2に回転ヘラケズリと、一部に線刻痕が見られる。口径12.4cm。色調は内面灰色(N5/)、外面灰色(N6/)を呈する。6は立ち上がりが短く内傾する口縁部、口縁端部はやや丸くおさめる。受け部は水平に付く。外面底部2/3に回転ヘラケズリが施される。口径12.8cm。色調は内面灰白色(5Y7/1)、外面灰白色(5Y8/1)を呈する。7は立ち上がりが短く内傾する口縁部、口縁端部はやや尖り気味。受け部はやや上方に向く。外面底部に回転ヘラケズリが施される。口径13.0cm。色調は内面灰白色(5Y7/1)、外面灰色(7.5Y6/1)を呈する。8は立ち上がりが短く内傾する口縁部、口縁端部は丸味をもつ。受け部は水平に付く。外面底部に回転ヘラケズリが施される。口径11.4cm。色調は灰色(N6/)を呈する。9は立ち上がりが短く内折する口縁部、口縁端部は丸味をもつ。受け部はわずかに見られる。外面底部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径12.6cm。色調は灰色(N6/)を呈する。10は須恵器鉢。口縁部が大きく外折し、口縁端部は丸味をもっておわる。外面底部に回転ヘラケズリが施される。口径21.6cm。色調は灰色(N6/)を呈する。11は須恵器高坏。坏底部に回転ヘラケズリが見られる。脚部は短脚でラッパ状に外反し、裾端部に凹面をもつ。裾部径10.0cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰色(N5/)を呈する。

12は土師器高坏。坏部を欠損。ラッパ状に開く脚部、裾端部は丸くおさめる。調整は内面シボリメ、外面にはハケメが施される。裾部径11.8cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/3)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。13は土師器羽釜。「く」の字形に外折する口縁部に、水平な鏝が付く。調整は内面にハケメ(8/cm)が見られる。口径20.7cm。色調は内面明褐色(7.5YR5/6)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。14・15は把手。14は断面隅丸方形をもつ。調整は外面工具によるナデ、内面にはハケメ(8/cm)が施される。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)を呈する。15は断面隅丸長方形をもつ。調整は内外面共に工具によるナデが施される。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈する。

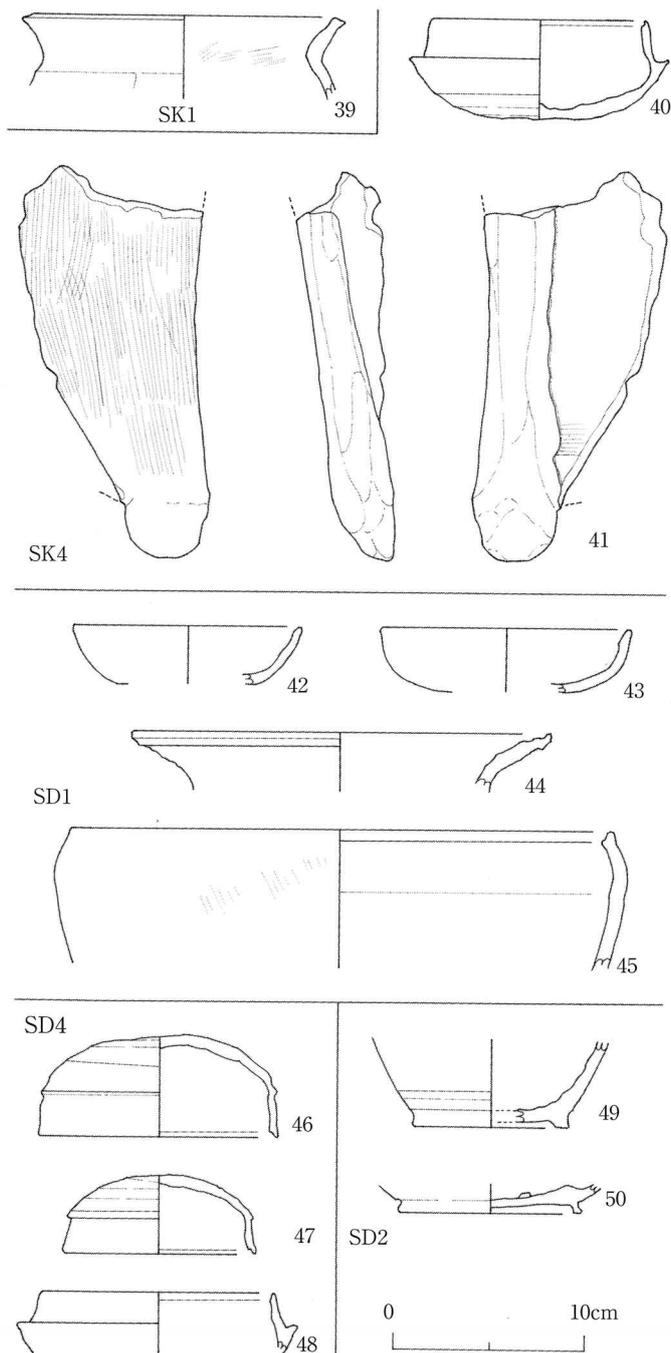
SD1出土土器(第11図42~45)

42は須恵器坏身。やや外弯しながら口縁部につづく。調整は外面底部に回転ヘラケズリが施される。口径12.0cm。色調は内面灰色(N5/)、外面灰色(N6/)を呈する。

43は土師器壺。丸底にちかい底部から、ほぼ直立気味の口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共に著しい風化のため詳細不明。口径12.9cm。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面橙色(2.5YR7/6)を呈する。45は土師器鉢。外傾しながら立ち上がる体部から、口縁部は内弯し、口縁端部に面をもつ。



第 10 图 SX1 · SP17 出土遺物実測図



第11図 SK1・SK4・SD1・SD2・SD4 出土遺物実測図

調整は内面ナデ、外面にはハケメが施される。口径28.4cm。色調は内面橙色(5YR6/6)外面(5YR7/6)を呈する。

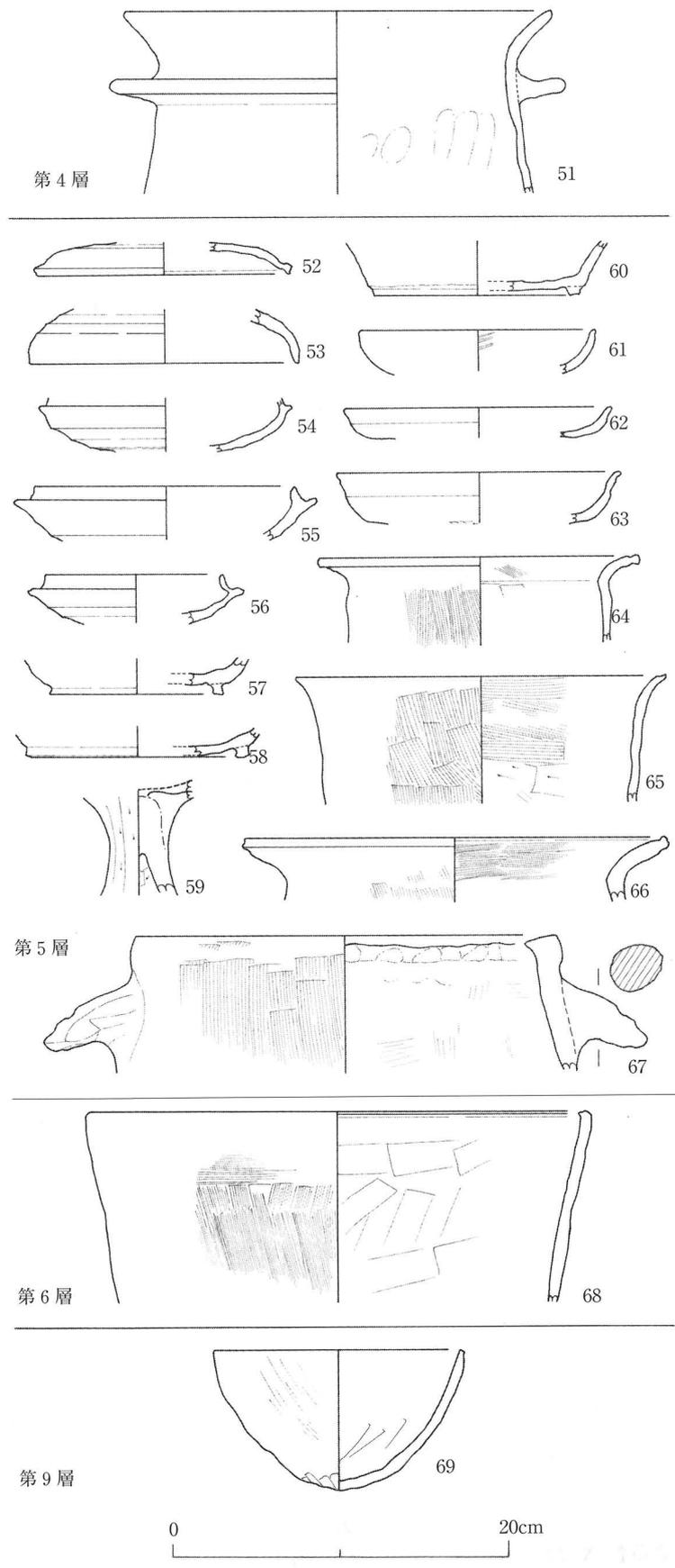
44は須恵器甕。大きくラップ状に広がる口縁部、口縁端部は外面に面をもつ。口径21.8cm。色調は内面灰色(N6/)、外面灰色(N5/)を呈する。

SD2 出土土器 (第11図49・50)

49は須恵器壺。「ハ」の字形に広がる高台が付く。高台の接地面は平らである。調整は回転ナデが施される。高台径8.0cm。色調は灰白色(7.5YR7/1)を呈する。50は須恵器坏身。「ハ」の字形広がる高台が付く。高台の接地面はほぼ平らである。調整は外面底部に回転ヘラケズリが施される。高台径9.4cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N6/)を呈する。

SP17出土土器 (第10図16~38)

16~19は須恵器坏蓋。16は器高の高い、中央が凹むつまみと、鈍い稜が付く。口縁端部は内傾する段をもち、外面天井部には回転ヘラケズリが施される。口径12.2cm、器高5.95cm、つまみ径3.2cm。色調は灰色(N5/)を呈する。17は器高の高い、中央部が凸形をなすつまみと、やや鋭い稜が付く。口縁端部は面をもち凹み、外面天井部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径11.9cm、器高5.7cm、つまみ径2.7cm。色調は内面灰色(N5/)、外面灰色(N4/)を呈する。18は丸味をもつ天井部、やや鋭い稜が付く。口縁端部は面をもち凹み、外面天井部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径12.6cm、器高4.9cm。色調は内面灰色(N5/)、外面灰色(N6/)を呈する。19は丸味をもつ天井部に、形骸化した稜が付く。口縁端部には内傾する段をもち、外面天井部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径11.5cm、器高4.8cm。色調は内面灰色(10Y6/1)、外面灰色(N6/)を呈する。20~22は須恵器坏身。20の立ち上がりは比較的lowく、直立気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する明瞭な段をなす。内面天井部に円弧タタキメ、外面底部2/3に回転ヘラケズリが施される。口径13.4cm。色調は灰色(N5/)を呈する。21の立ち上がりは比較的lowく、内傾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する明瞭な段をなす。外面底部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径11.0cm、器高4.8cm。色調は内面灰色(N5/)、外面灰色(N6/)を呈する。22の立ち上がりは比悪の高く、口縁端部は内傾する明瞭な段をなす。口径12.0cm。色調は灰白色(N5/)



第12図 第4・5・6・9層 出土遺物実測図

を呈する。

23・24は土師器甕。23は球形の体部に、「く」の字形に外反する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整はハケメ(7/cm)、内面一部にヘラミガキを施す。完形。口径15.6cm、器高21.2cm、体部最大径17.4cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/2)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。24はなで肩からゆるやかに外反する口縁部、口縁端部は丸くおさめる。調整は内面工具によるナデ、外面には著しい風化のため詳細不明。口径13.6cm。色調は内面明黄褐色(10YR7/6)、外面橙色(7.5YR7/6)を呈する。

25~38は製塩土器。口縁部が内弯するタイプ(25・26・37・38)、口縁部が直立気味のタイプ(28・29)、口縁端部が外弯気味のタイプ(31・32)、口体部が内傾するタイプ(35・36)がみられる。27・30は底部。25の調整は内面ナデ、外面にはタタキメが施される。口径4.2cm。色調は内面橙色(5YR7/6)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。26の調整は内外面共にナデが施される。口径5.0cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。27の調整は内外面共に工具によるナデが施される。色調は内面浅黄橙色(10YR8/3)、外面灰白色(10YR8/2)を呈する。28の調整は内外面共にナデが施される。口径3.8cm。色調は内面浅黄橙色(7.5YR8/4)、外面浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈する。29の調整は内面ハケメ(6/cm)、外面タタキメが施される。口径5.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。30

の調整は内面クシ状工具によるナデ、外面ナデが施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する。31の調整は内面ナデ、外面タタキメが施される。口径3.2cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面橙色(7.5YR6/6)を呈する。32の調整は内面板状工具によるナデ、外面ナデが施される。口径4.2cm。色調は内面浅黄橙色(7.5YR8/6)、外面浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。33の調整は内面ハケメ(8/cm)、外面タタキメ後ナデが施される。口径4.7cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。34の調整は内面工具によるナデ、外面ナデが施される。外面に煤付着。口径4.0cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。35の調整は内面ナデ・シボリメ、外面タタキメが施される。口径3.6cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。36の調整は内面ハケメ(7/cm)、外面板状工具によるナデが施される。口径3.8cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。37の調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径3.8cm。色調は内面灰白色(10YR8/2)、外面浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。38の調整は内外面共にナデが施される。口径6.0cm。色調は橙色(5YR7/6)を呈する。

② 遺構面Ⅱ出土土器

SD 4 出土土器 (第11図46~48)

46・47は須恵器坏蓋。46は丸味をもつ天井部、やや鋭い稜が付く。口縁端部は内傾する明瞭な段が付く、外面天井部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径12.6cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N6/)を呈する。48は須恵器坏身。比較的短く内傾しながら立ち上がる口縁部、口縁端部はわずかに内傾する段をもつ。外面に自然釉付着。口径10.2cm。色調は灰色(N6/)を呈する。

③ 遺構面Ⅲ出土土器

SK 4 出土土器 (第11図40・41)

40は須恵器坏身。立ち上がりは比較的高く、わずかに内傾し、口縁端部は内傾する段をもつ。外面底部1/2に回転ヘラケズリが施され、自然釉が付着。口径11.2cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰オリーブ(7.5Y6/2)を呈する。

41は土師器竈の炊き口。調整はハケメ(4/cm)・ナデが施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

④ SK1出土土器 (第11図39)

39は土師器甕。なだらかに「く」の字形に外反し、口縁端部は外方に面をもつ。調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。口径15.8cm。色調は内面灰黄色(2.5Y6/2)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。

⑤ 各遺物包含層ほか出土遺物

第4層出土土器 (第12図51)

51は土師器羽釜。なだらかに外弯する口縁部、口縁端部は丸くおさめ、平行に付く鏝が見られる。調整は内面著しい風化のため詳細不明、外面体部ナデが施される。口径25.0cm。色調は内面橙色(7.5YR6/6)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

第5層出土土器 (第12図52~67)

52・53は須恵器坏蓋。52は天井部に擬宝珠様つまみが付く形態と思われる。口縁部内端のかえりはみられず、面をもち終わる。外面天井部1/2に回転ヘラケズリが施される。口径14.9cm。色調は灰色(N6/)を呈する。53は天井部と口縁部境の稜は全くみられず、丸くなだらかな形態をもつ。外面には回転ヘラケズリが施される。口径15.8cm。色調は内面灰白色(N7/)、外面灰色(N6/)を呈する。54~58・60は須恵器坏身。54は口縁部立ち上がりを欠損する。受け部は水平につく。外面底部2/3

に回転ヘラケズリが施される。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/3)、外面灰褐色(5YR5/2)を呈する。55の立ち上がりは短く、やや内傾気味。外面に回転ヘラケズリが施される。口径15.4cm。色調は灰白色(N7/)を呈する。56の立ち上がりは短く内傾し、口縁端部は丸くおさめる。外面底部2/3に回転ヘラケズリが施される。口径10.4cm。色調は内面灰色(N4/)、外面灰色(N5/)を呈する。57は「ハ」の字形に広がる、断面方形の高台をもつ。高台径10.2cm。色調は灰白色(7.5Y7/1)を呈する。58は丸味をもつ底部に、断面方形の高台が付く。高台径12.6cm。色調は灰白色(5Y7/1)を呈する。60は底部端に直立気味で断面方形の高台が付く。高台径12.0cm。色調は灰色(10Y6/1)を呈する。

59は土師器高坏。脚柱部をヘラケズリによって面取りを施す。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。61～63は土師器坏身。61の口縁部は外湾しながら立ち上がる形態。内面に放射状暗文が見られる。口径13.8cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。62の口縁部は外湾しながら短く立ち上がる形態。調整は内外面共にナデが施される。口径15.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。63の口縁部は外湾しながら立ち上がり、口縁端部をわずかに外反する形態。調整は外面底部にヘラケズリが施される。口径16.6cm。色調は内面灰黄色(2.5Y6/2)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。64・66は土師器甕。共に外反する口縁部から、口縁端部はわずかに肥厚し面をもち終わる。64の調整は内外面共にハケメ(10/cm)が施される。口径18.8cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面橙色(2.5YR6/6)を呈する。66の調整は内外面共にハケメ(8/cm)が施される。口径24.8cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面灰白色(10YR8/2)を呈する。65は土師器甌。直線的に外方にのびる体部から、そのままならかに外反する口縁部、口縁端部はやや丸くおさめる。調整は内面ハケメ(7/cm)・ヘラケズリ、外面にはハケメ(同原体)が施される。口径21.8cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。67は土師器竈。直線的に内傾しながらのびる体部から口縁部につづく。口縁端部は上方に面をもつ。口縁部直下に断面円形の把手が付く。調整は内外面共にハケメ(5/cm)が施される。口縁部に煤付着。口径25.0cm。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/3)、外面橙色(5YR6/6)を呈する。

第6層出土土器 (第12図68)

68は土師器甌。直線的に外方に伸びる口体部、口縁端部は丸味をもち内側にわずかに肥厚する。調整は内面板状工具によるナデ、外面にはハケメ(10/cm)が施される。口径29.4cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。

第9層出土土器 (第12図69)

69は土師器鉢。半球体状の形態をもつ。口縁端部は面をもち終わる。調整は内面工具によるナデ、外面にはハケメが施される。内面に煤付着。口径14.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/2)、外面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。

5) まとめ

出土遺物の年代観から、各遺構面の所属時期を考えてみたい。遺構面Ⅰを覆う遺物包含層(第5層)内出土土器や遺構内出土土器から、遺構面Ⅰの遺構は飛鳥～奈良時代ごろに营造されたものと思われる。遺構面Ⅱ・遺構面Ⅲに属する遺構からの遺物は僅少であり、大まかな推定の域を出ないが、出土した須恵器の形態的特徴からいえば、遺構面Ⅱは古墳時代後期初頭～中葉、遺構面Ⅲは古墳時代中期末～後期初頭に想定が可能である。この点については周辺での調査進展に期待したい。また、遺構面Ⅰのピット群はその密集度から調査地の周辺に広がるものと考えられる。瓜生堂遺跡の範囲が北西方向に拡大することと思われる。確認調査では下層で弥生時代の文化層を検出していないことから、該期集落の範囲が今回の調査地までは及んでいないと考えられる。

遺構名	遺構面	地区	平面形態	柱掘形(cm)		柱痕跡 (cm)	深さ (cm)	柱痕跡 埋土		備考
				長軸	短軸					
SP1	I	A	円形	44	40	—	9	—	第6層に第5層ブロック混入	
SP2	I	C	円形	67	59	27	32	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP3	I	C	楕円形	36	31	26	28	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP4	I	C	長楕円形	68	40	—	3	—	第6層に第5層ブロック混入	
SP5	I	C	楕円形	34	26	17	32	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP6	I	C	円形	29	29	16	29	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP7	I	C	円形	38	36	22	34	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP8	I	C	方形	86	66+	—	30	—	第6層に第5層ブロック混入	土坑状
SP9	I	C	楕円形	67	49	—	13	—	第6層に第5層ブロック混入	土坑状
SP10	I	C	円形	34	28+	18	26	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP11	I	C	円形	30	24+	16	22	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP12	I	C	円形	88	69+	—	59	—	第6層に第5層ブロック混入	柱材が遺存
SP13	I	C	方形	38+	38+	17	29	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP14	I	C	長楕円形	35	28	17	32	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP15	I	C	方形	47	41	24	34	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP16	I	C	円形	24	21	16	21	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP17	I	A	円形	74	33+	—	90	(後記)	(後記)	
SP18	I	C	円形	32	32	17	51	第5層	第6層に第5層ブロック混入	
SP19	II	C	円形	30	28	—	15	—	第6層	
SP20	II	C	楕円形	34	26	—	5	—	第6層	
SP21	II	C	円形	57	49	—	17	—	第6層	
SP22	II	C	円形	27	27	—	16	—	第6層	
SP23	III	A	楕円形	27	20	—	33	—	第9層	
SP24	III	A	円形	24	24	—	24	—	第9層	
SP25	III	A	楕円形	39	25	24	31	—	第9層	
SP26	III	C	方形	35	26	—	4	—	第9層	

図版1 瓜生堂遺跡第51次調査 遺構



調査前の状況



第5層内遺物出土状況



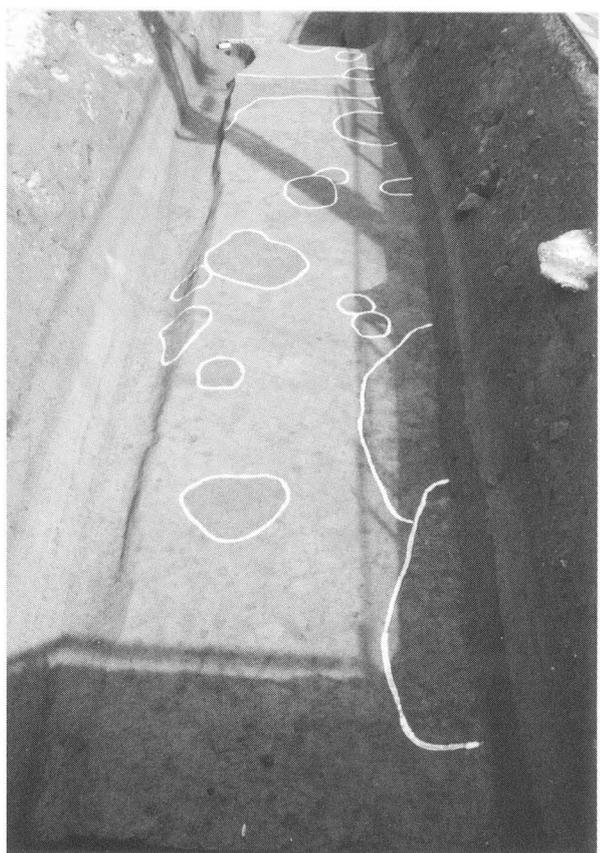
遺構面I遺構検出作業



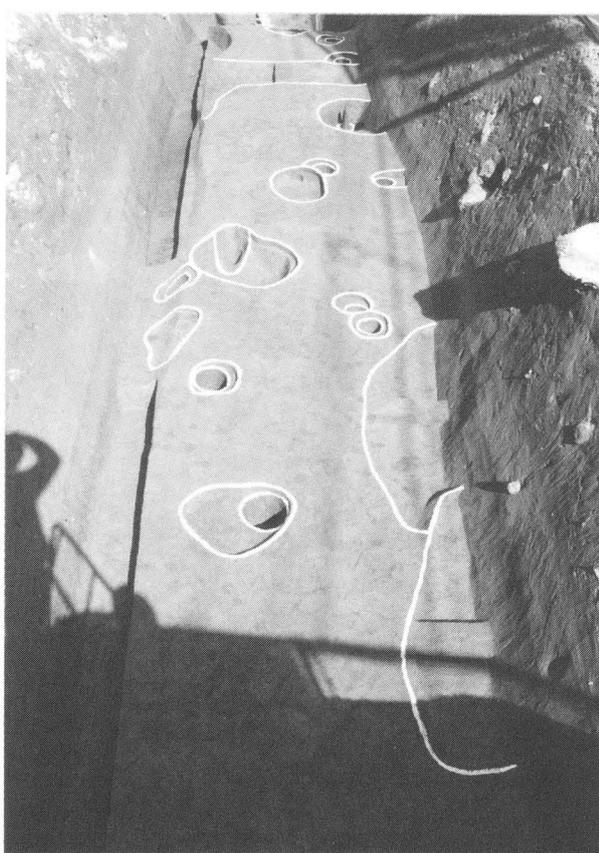
A区遺構面 I 掘削後状況 (北より)



A区遺構面 II 掘削後状況 (北より)



C区遺構面 I 検出状況 (南より)



C区遺構面 I 掘削後状況 (南より)

図版3 瓜生堂遺跡第51次調査 遺構



C区遺構面I 掘削後状況近景（西より）



C区SP12内柱痕出土状況（南より）



C区SD4内遺物出土状況（西より）



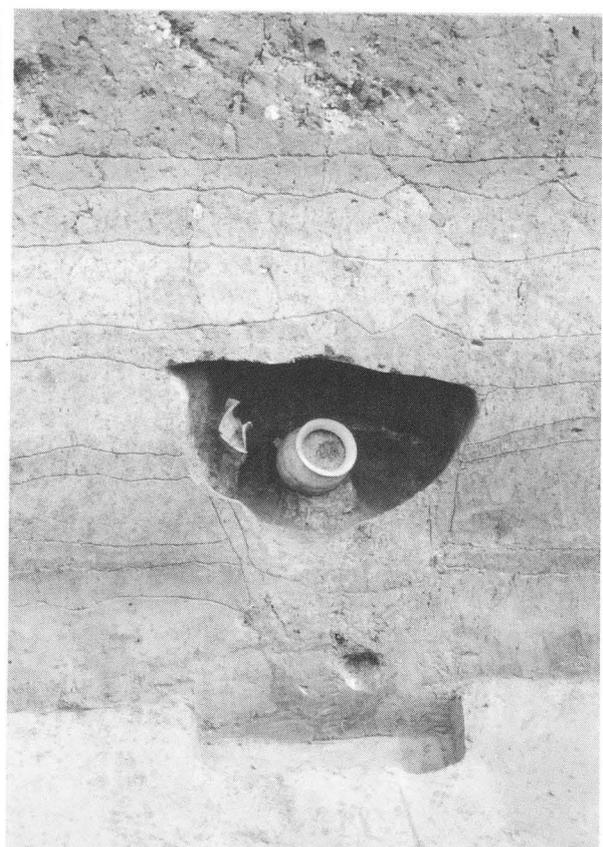
A区遺構面Ⅲ掘削後状況（北より）



調査地全景（南より）

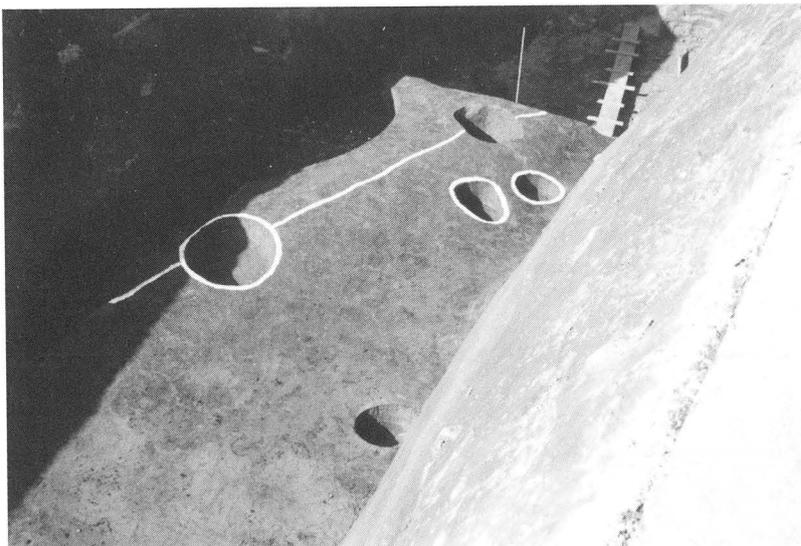


A区SP17断面



A区SP17上層内土師器甕出土状

図版5 瓜生堂遺跡第51次調査 遺構



C区遺構面Ⅱ掘削後状況（南より）



A区SK4掘削後状況（西より）



A区SX1・SD4・SK4断面

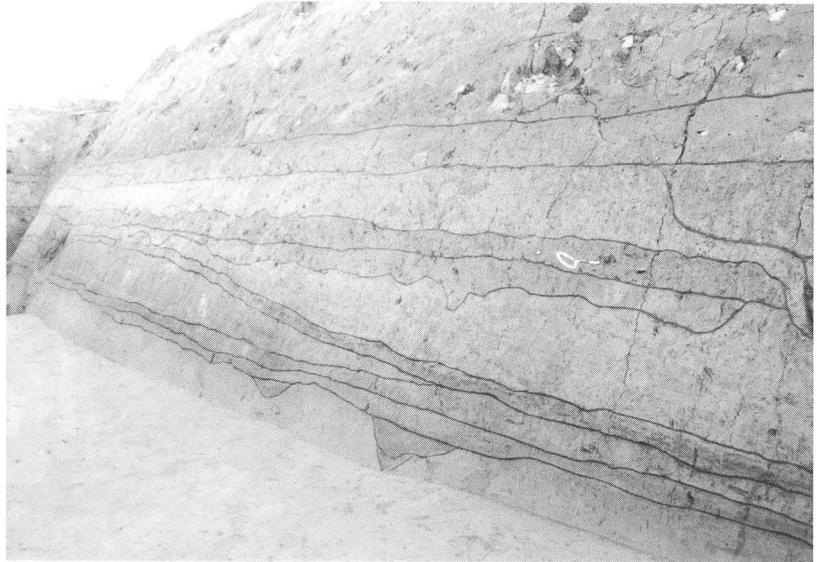
A区遺構面Ⅲピット群（西より）



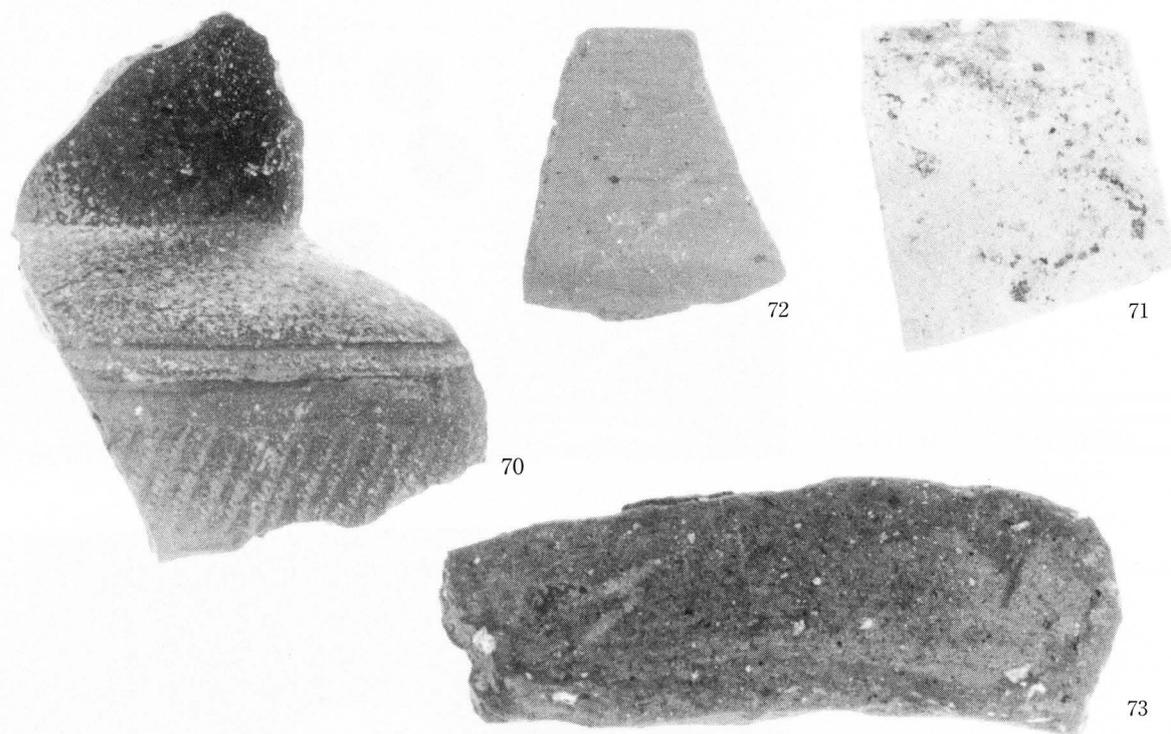
A区SP17上層出土土師器甕近景



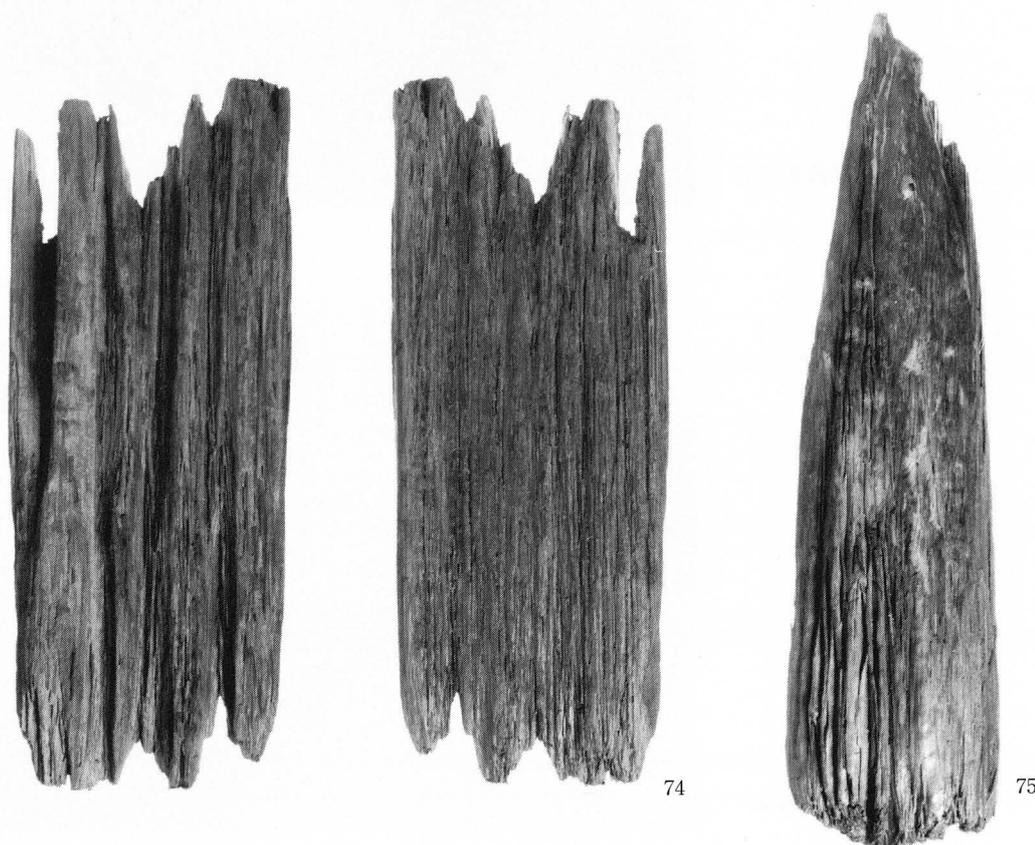
A区東壁断面



図版7
瓜生堂遺跡第51次調査
遺物



試掘調査出土土器



SD 4 凹部内出土板・SP1出土柱根

図版 8 瓜生堂遺跡第51次調査 遺物



2



16



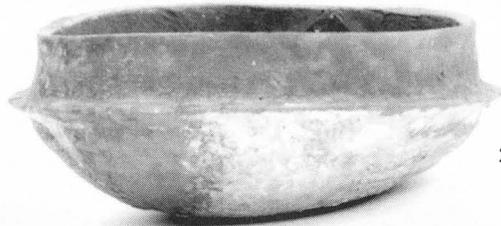
19



17



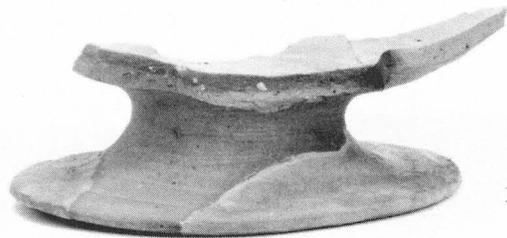
18



21



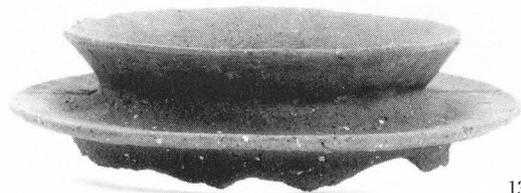
46



11



47



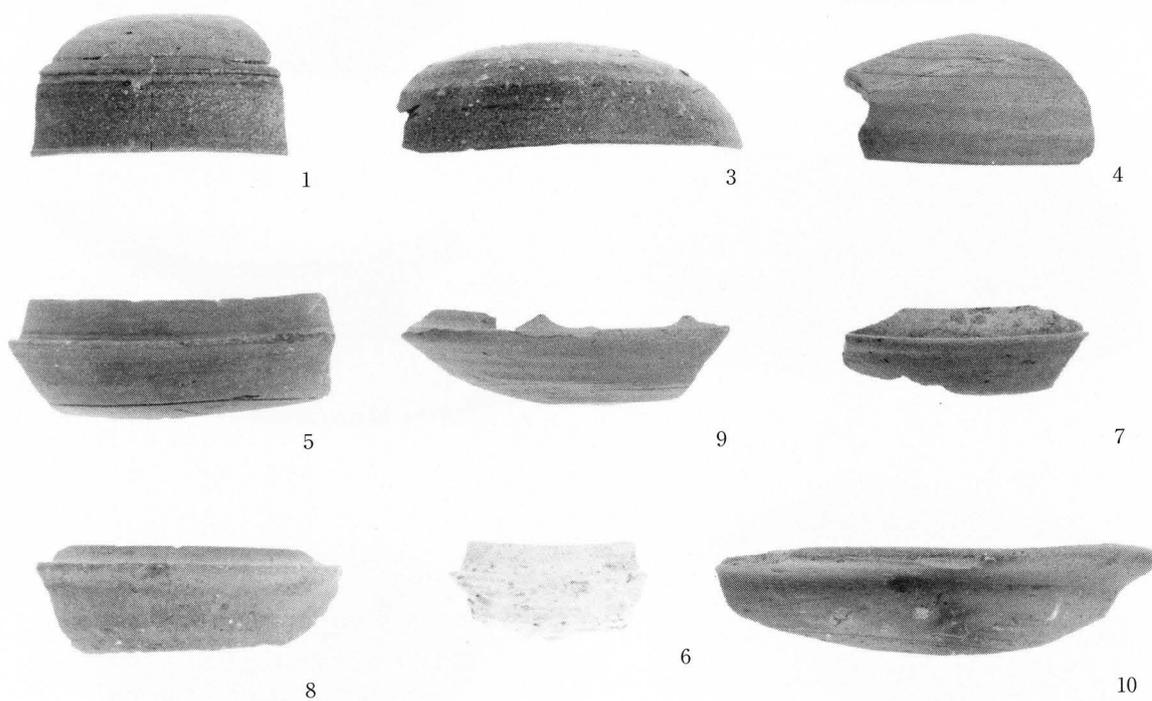
13

SX1出土須恵器杯蓋 (2)、高杯 (11)、土師器羽釜 (13) SP17出土須恵器杯蓋 (16~19) 杯身 (21)
SD4出土須恵器杯蓋 (46・47)

図版9 瓜生堂遺跡第51次調査 遺物



SP17出土土師器甕 (23) 第4層出土土師器羽釜 (51) 第9層出土土師器鉢 (69)



SX1出土須恵器坏蓋 (1・3・4)、坏身 (5~9) 鉢 (10)



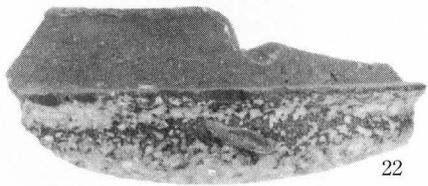
12



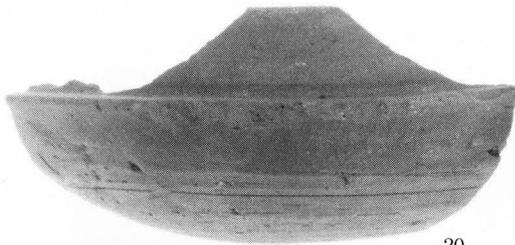
15

14

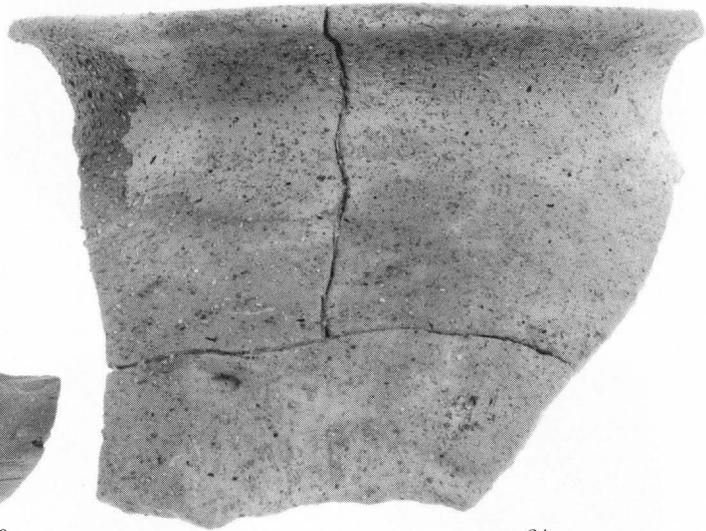
SX1出土土師器高坏 (12)、把手 (14・15)



22



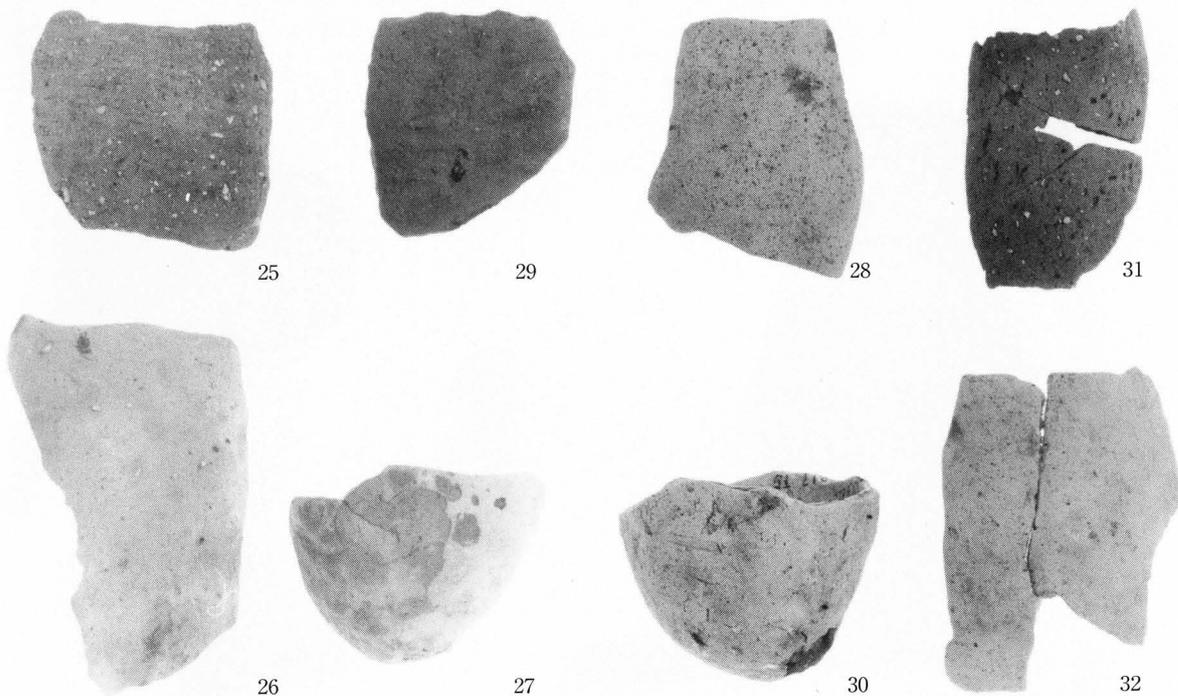
20



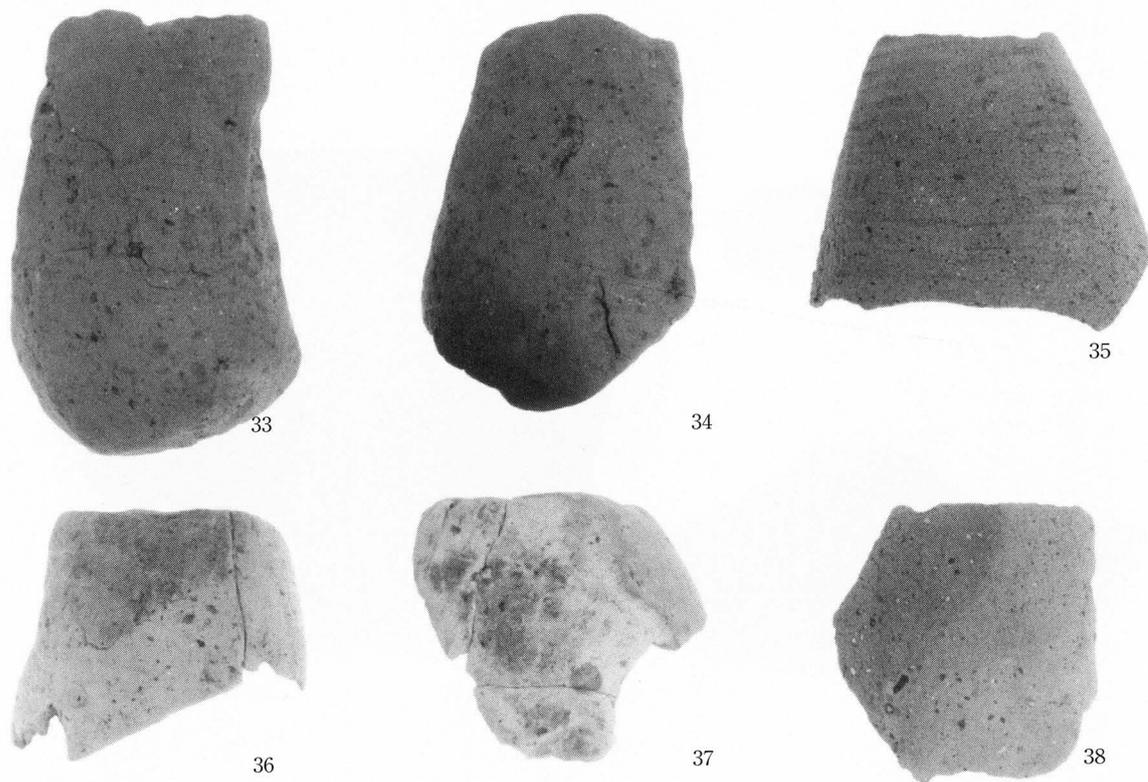
24

SP17出土須恵器坏身 (20・22)、土師器甕 (24)

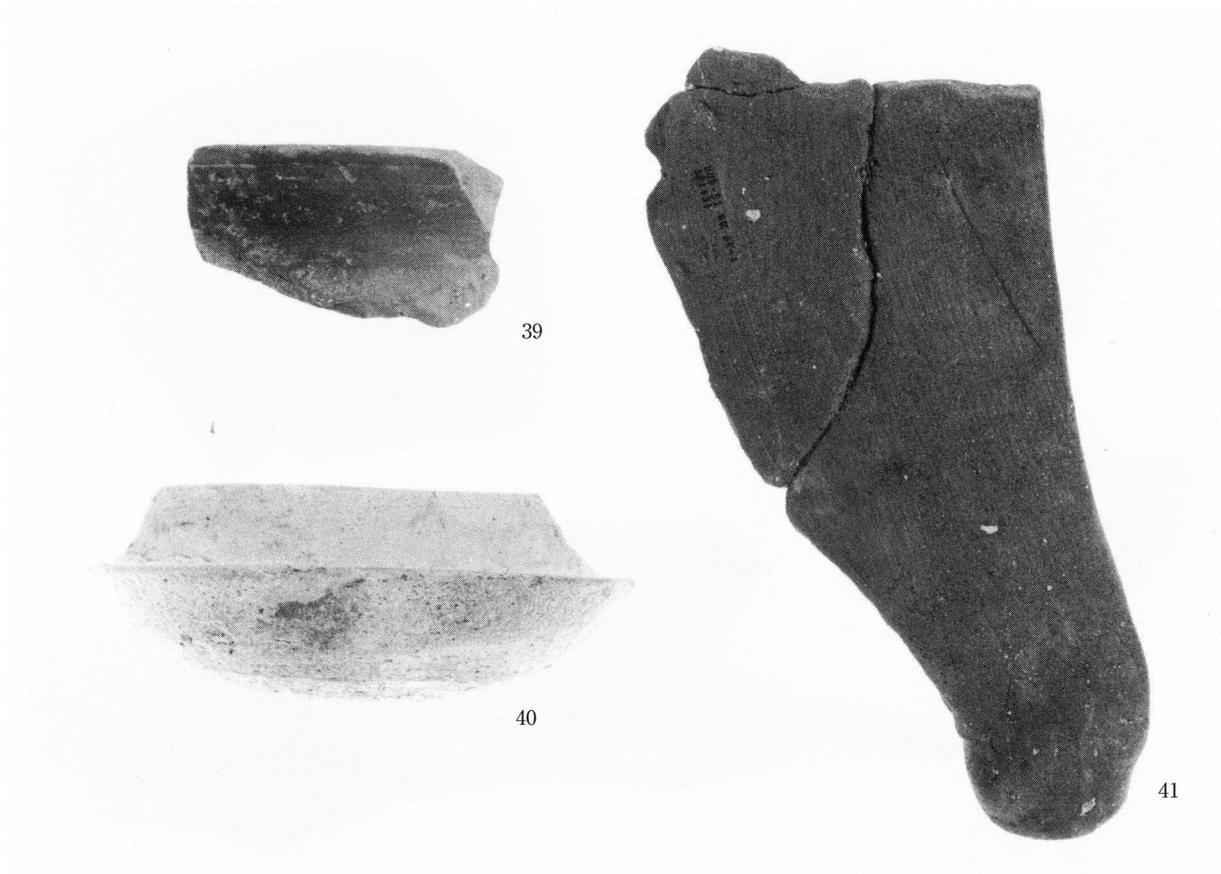
図版11
瓜生堂遺跡第51次調査
遺物



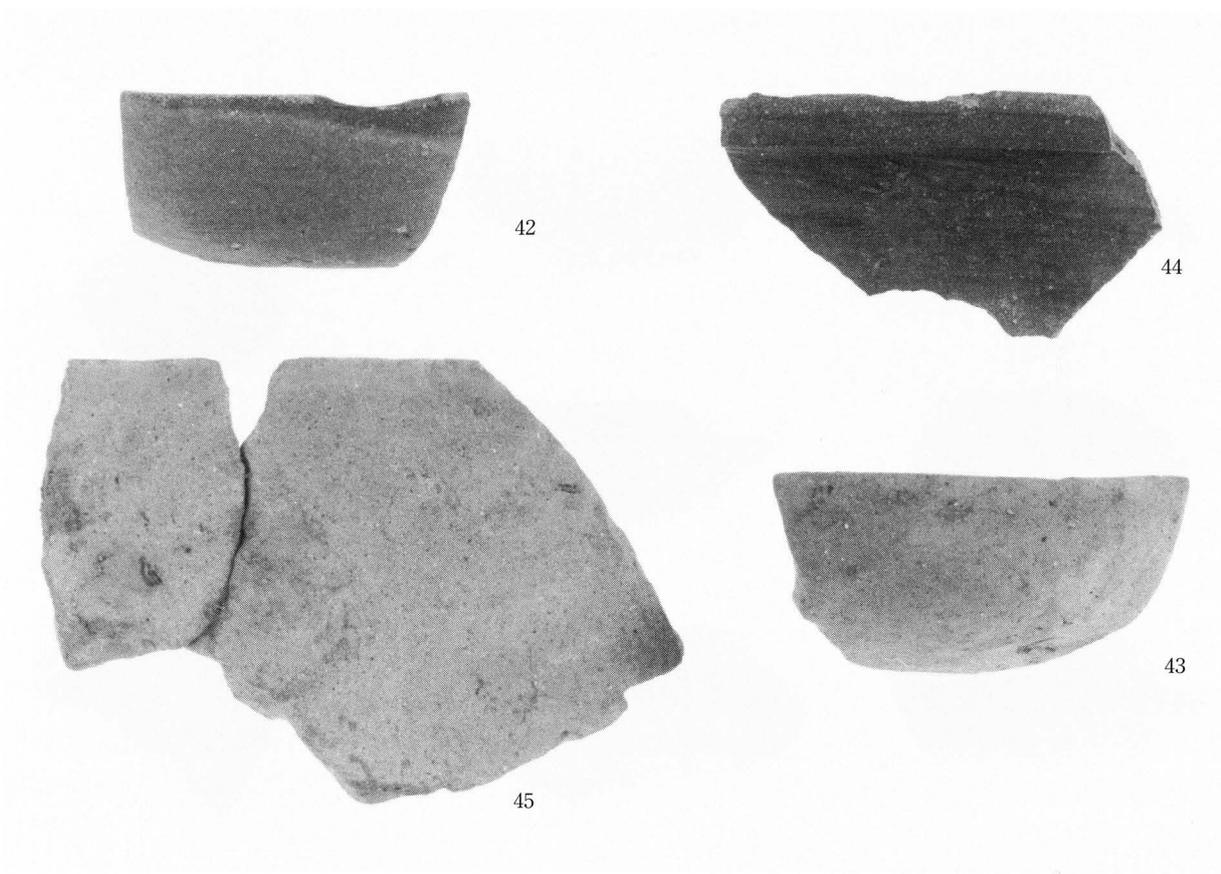
SP17出土製塩土器 (25~32)



SP17出土製塩土器 (33~38)

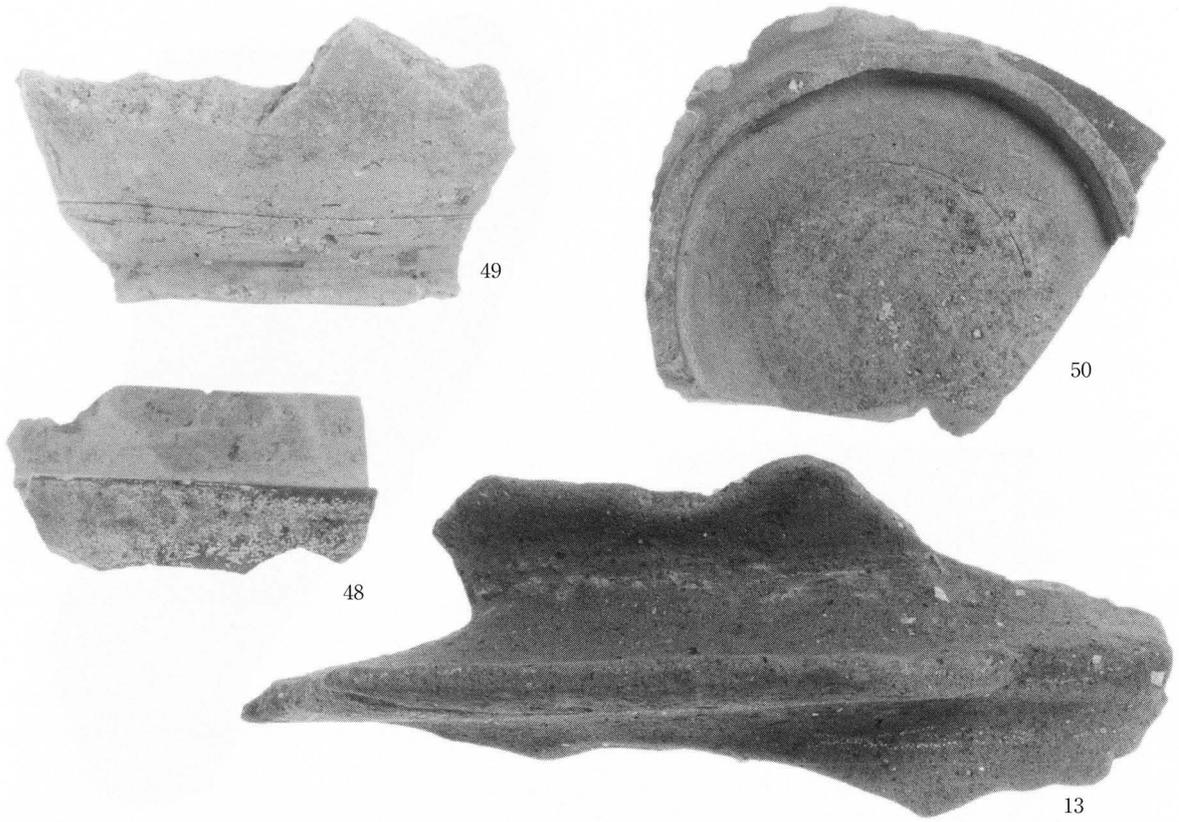


SK1出土土師器甕 (39) SK4出土須恵器坏身 (40) 土師器竈 (41)

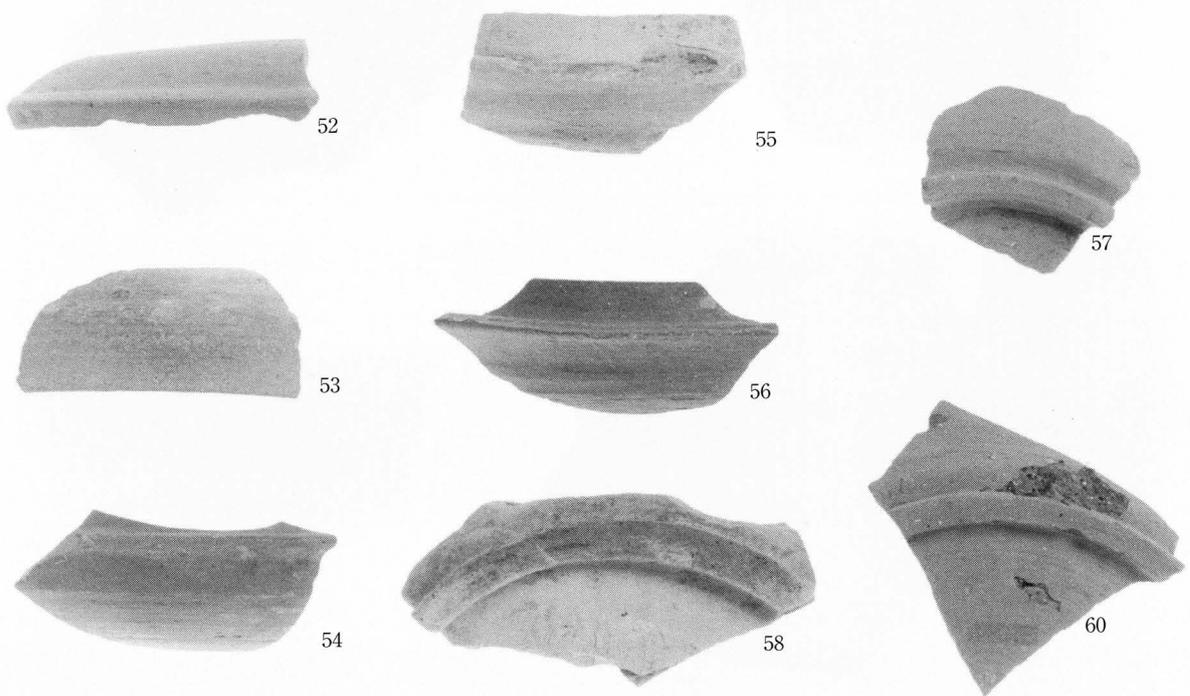


SD1出土須恵器坏身 (42) 甕 (44) 土師器碗 (43) 鉢 (45)

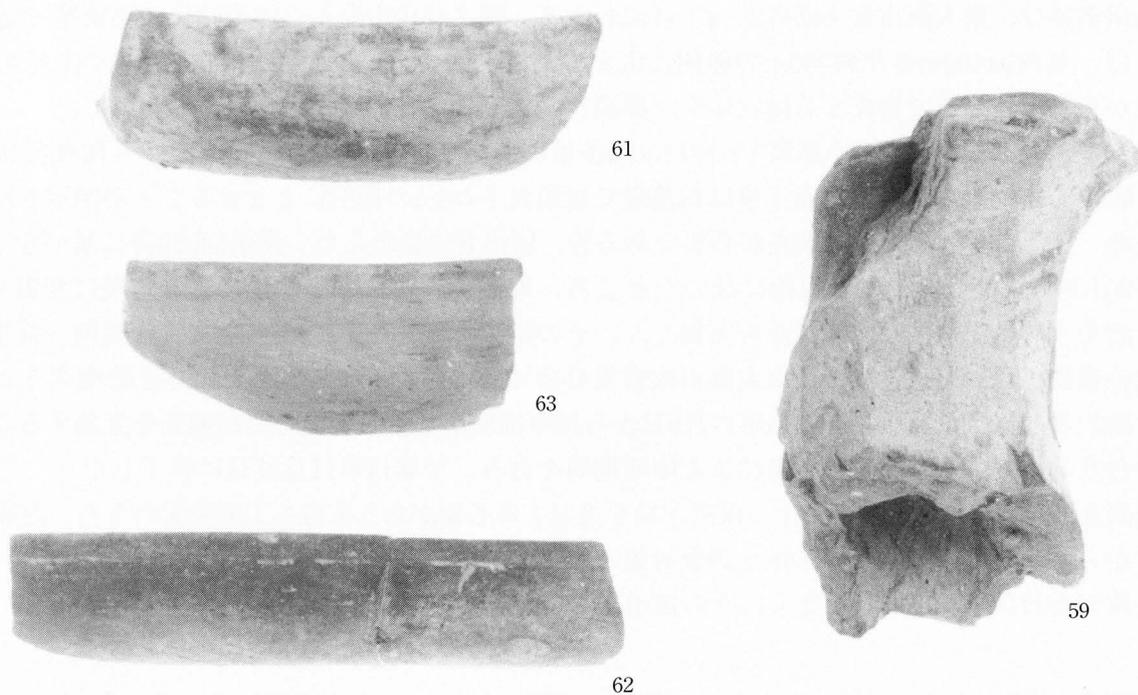
図版 13
瓜生堂遺跡第51次調査
遺物



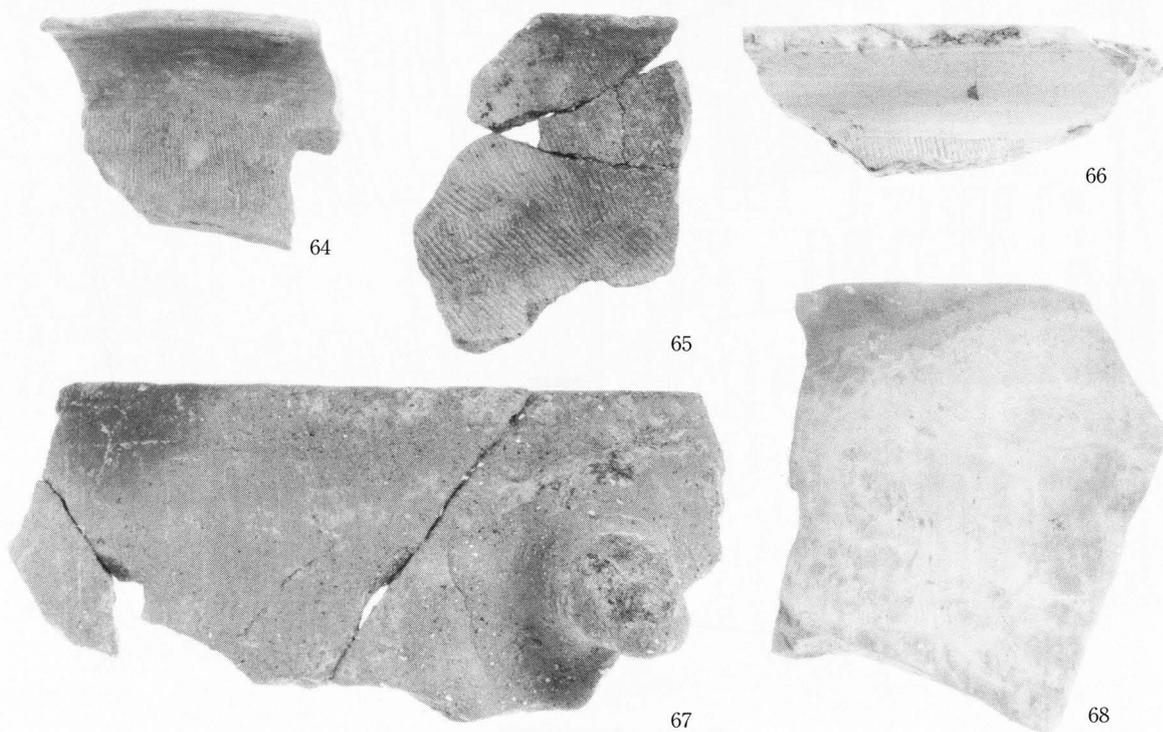
SD2出土須恵器坏身 (49・50) SD4出土須恵器坏身 (48) SX1出土土師器羽釜 (13)



第5層出土須恵器坏蓋 (52・53)、坏身 (54~58、60)



第5層出土須恵器杯蓋(59)、杯身(61~63)



第5層出土土師器甕(64・66)、甌(65)、竈(67) 第6層出土土師器甌(68)

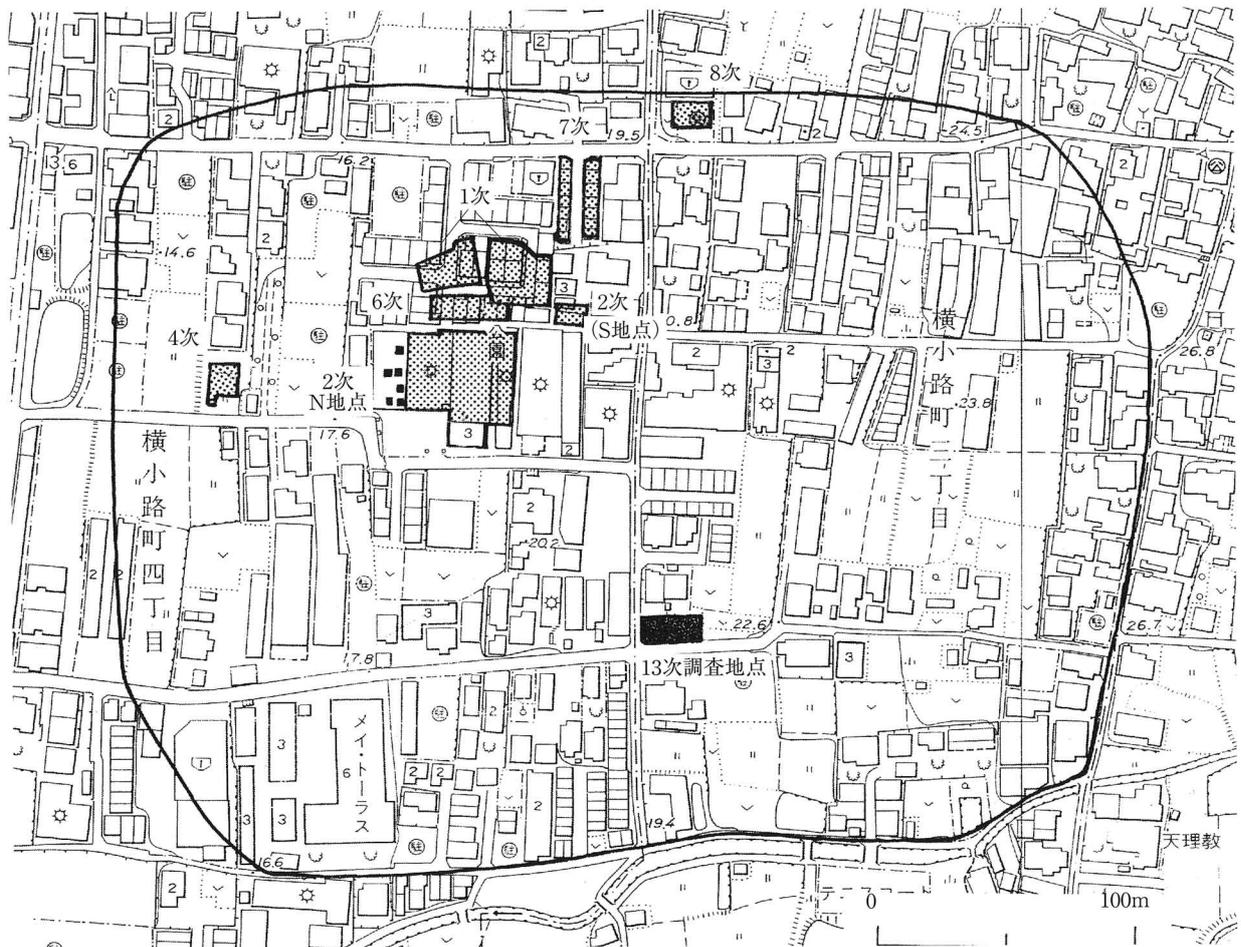
第5章 馬場川遺跡第13次発掘調査

1) はじめに

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町3～4丁目にわたる、縄文時代中期から古墳時代の集落跡である。本遺跡は、東西約400m南北約300mの範囲に広がると推定されている。遺跡は箕後川ないしその先行河川が生駒山地西麓で形成する扇状地上、標高14～26mに立地している。

平成14年8月、東大阪市横小路町3丁目1150-3番地において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設工事は布基礎で現地表下-0.4mの掘削にとどまることが図示されていたため、工事と併行して立会調査が必要である旨、届出者に指示した。指示(通知)書に基づき、平成14年9月30日、調査担当者が現地に赴いたところ、地盤調査の結果、柱状改良杭基礎に変更するとの打診をうけ、急遽同日確認調査を実施した。その結果、現地表下-1.4mで縄文時代晩期～弥生時代後期の遺物包含層を検出した。東大阪市教育委員会では杭打設により埋蔵文化財を破壊すると判断し、届出者と協議を重ね、平成14年11月6日から国庫補助事業として緊急発掘調査を実施することで双方合意した。調査は諸般の事情による中断期間を含み、平成14年11月27日に終了した。

発掘調査については、場内で排土の仮置き場を設定する必要があり杭打ち工事箇所のうち、南端の杭通りから南北3m×東西10m、30㎡を調査対象として実施した。調査対象の選択と方法については、大阪府教育委員会に具申するとともにその指示を仰いだ。



第1図 調査地位置図

2) 馬場川遺跡の調査

馬場川遺跡は、昭和42年6月、工場の新築工事の際に多数の石器やサヌカイト剥片が採集され、縄文時代の遺跡として知られるようになった。その後昭和44年度から継続して実施された発掘調査によって、近畿地方有数の縄文時代晩期の集落跡として著名となったが、調査の図面を掲出した報告書が未刊であって、遺跡の実態は不詳の点が多い。

既調査の成果概要は、財団法人東大阪市文化財協会『馬場川遺跡発掘調査報告書』(CD版、2000年)に詳細に述べられておりそれに委

ねたい。ここでは未報告であった第10次調査についてその概要を述べておきたい。調査は平成7年12月4日から12月7日まで4日間実施した。低層の共同住宅建設に伴う調査で、建物本体は遺物包含層に抵触しなかったが、工事掘削が深い浄化槽部分13.5㎡を対象として行なった。調査の結果、現地表下1.3mで弥生時代後期の遺物包含層を検出した。この遺物包含層は、灰色粗粒砂層をベースに堆積したもので、層内から完形品の甕のほか、壺や高坏などが多量に出土した。ただし、縄文時代晩期の土器は認められなかった。なお、平成11年度と平成13年度に行なわれた市下水道工事に伴う調査(第11次・第12次調査)の成果は、今回の調査結果と大きく関連するものであり、「まとめ」の項で触れることとする。

3) 調査方法と層位

第13次調査地は、集落遺構が稠密に分布する第1次調査地から東南約150mの地点にあたる。調査は盛土層・第1～2層を重機で除去し、第3層以下を人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。後述するように、第3層で多量の縄文土器が出土したため、東西方向を東区と西区に分けて、遺物の取り上げを行なった。層位は以下のとおりである。

第0層 盛土層。調査着前まで使用されていた駐車場の地上げ土で真砂土である。

第1層 旧耕土層。耕作面の相違から2層に区分できた。

第1A層 7.5GY3/1暗緑灰色細礫混じり粘質細粒砂。

第1B層 5BG4/1暗青灰色細礫混じり砂質シルト。

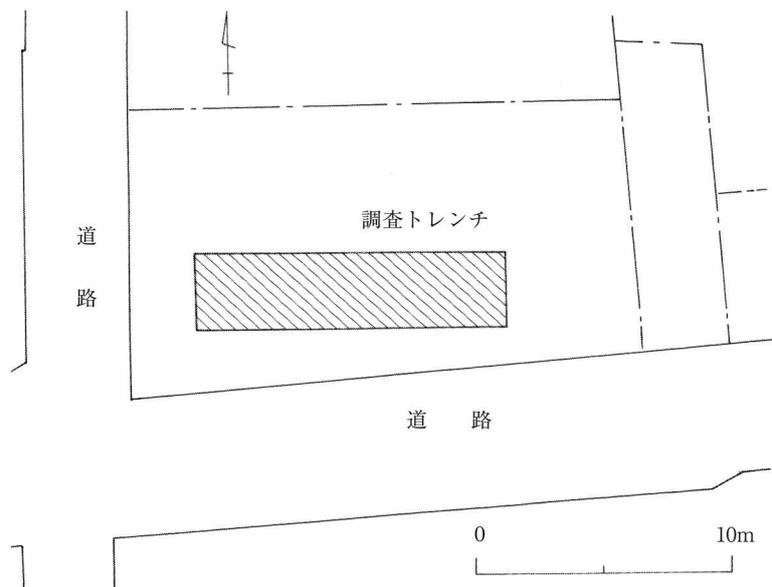
第2層 遺物包含層の上面を覆う砂礫層。色相や土質により4層に区分できた。わずかに古墳時代の土師器・須恵器がみられた。

第2A層 7.5YR4/6褐色中礫～細礫と7.5Y4/2灰オリーブ色細粒砂の混合土。最下部はSD1の堆積層である。

第2B層 5Y4/3暗オリーブ色中礫～細礫。

第2C層 10Y5/2オリーブ灰色粗粒砂～細礫。下部は色相が変化し、5B4/1暗青灰色となる。

第2D層 10BG6/1青灰色細粒砂～粗粒砂。下部は細粒砂のみで構成される。



第2図 調査トレンチ位置図

第3層 縄文時代晩期～古墳時代初頭(庄内式期)の遺物包含層。断面観察では上(U)層と下(L)層に区分できたが、掘り下げにおいては遺物の取り上げは第3層一括とした。

第3U層 N2/黒色細粒砂及び細礫混じり粘土。東端で層厚約30cm、西端で層厚約50cm。上面は東端T.P.約20.5m、西端でT.P.約19.8mで約0.7mの比高差を測り、古墳時代遺構面のベース層となる(遺構面I)。

第3L層 N3/暗灰色粘土混じり細粒砂。層厚10～30cm。トレンチの東側では明瞭に第3U層と分層できるが、西端付近では不明確となる。

第4層 縄文時代晩期遺構面(遺構面II)のベース層。N3/暗灰色細礫混じりシルト質細粒砂。『土色帳』に基づく土層観察では第3L層と大過ないが、肉眼では暗青黒色を呈する。下部ではほぼ細礫層のみに変化する。湧水が激しく調査の継続が危険なため次の土層までの掘削は断念した。上層は縄文時代晩期の遺物を少量含む。

今回の調査で鍵層となるのが、第3U層・第3L層である。多量の縄文(晩期)土器を含みながら、ごく微量の庄内式土器が混入する。試掘段階で第3層の層厚が大きいことが明らかであったので、上層・中層・下層に任意に区分したり、東区・西区で取り上げを替えたりしたが、混入は下層(第3L層)まで及んでおり、地区別の取り上げにも混入がみられた。したがって、第3層は東西で比高差を持つことにより、縄文時代晩期の遺物包含層が庄内式期の段階に流れ込み等により再堆積した層と考えられる。

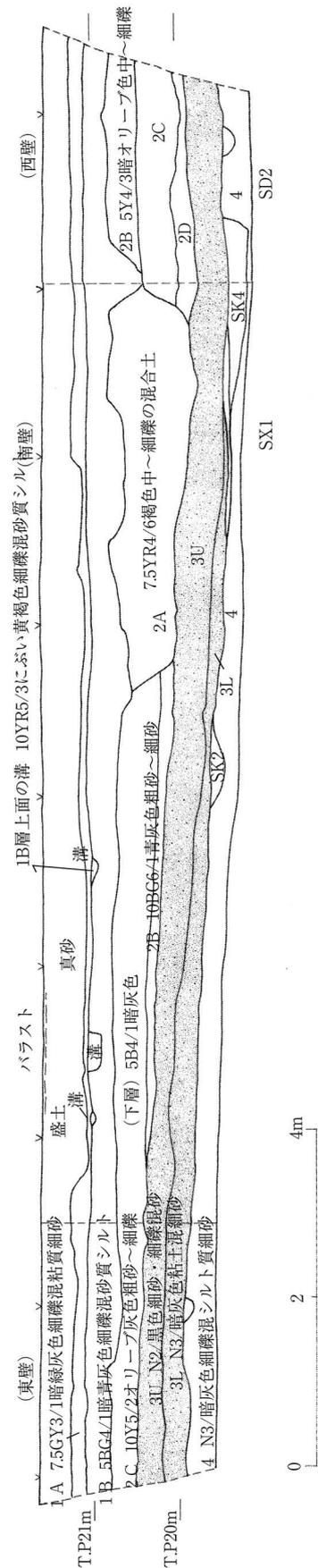
4) 検出した遺構

① 遺構面I(第4図) 溝1条と小土坑1基を検出した。出土土器から古墳時代以降の所産と考えられる。

SD1 南端で幅約0.65m、深さ10～12cmを測る溝。北東から南西へ流下する。溝内から古墳時代の土師器が出土した。埋土は第2A層である。

SK1 トレンチの東側で検出。平面は正円形で、径62cm、深さ30cmを測る。埋土は7.5Y6/3オリーブ黄色中粒砂。遺物は出土しなかった。

② 遺構面II(第5図) 溝1条、土坑1基、土墳墓2基、ピット2個、落込み1カ所を検出した。出土土器から縄文時代晩期の所産と考えられる。以下の記述については「縄文時代」を



第3図 調査地断面図

省略する。

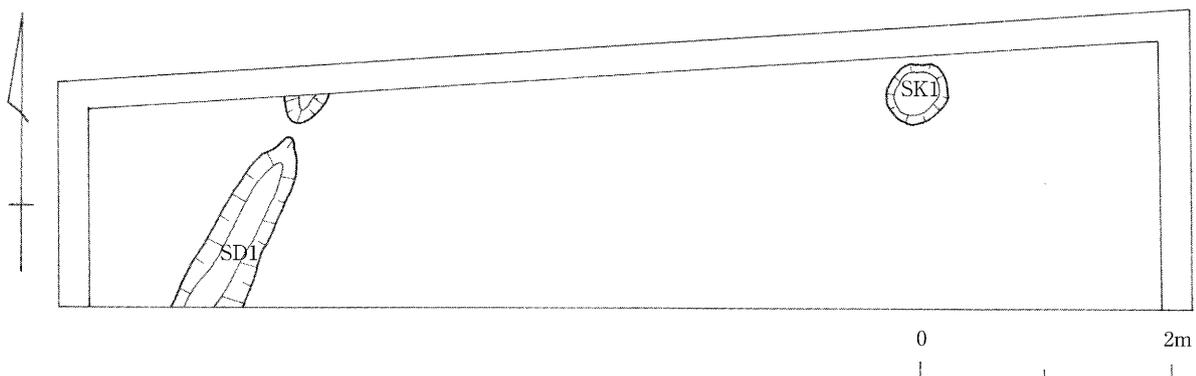
SD2 トレンチ東端から西端へ流下する溝。幅32~34cmと均一である。深さは9~17cmを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は第3層である。晩期の土器細片を含んでいたが、ほとんど図化に耐えなかった。

ピット トレンチの中央、SK2の東側と西側で2個検出した。いずれも平面は円形を呈する。東側がP1で径41~48cm、深さ11cm、西側がP2で径48cm、深さ11cmを測る。埋土は第4層を主体に第3層のブロックを含む層である。P2がSD2を切り込むことにより、先後関係があるが、出土遺物には晩期土器の細片のみであったことと埋土の観察から、ピットの構築はSD2の埋没後速やかに行なわれたことが窺われる。性格は不明だが、少なくとも竪穴住居址に伴うものとは考えられない。

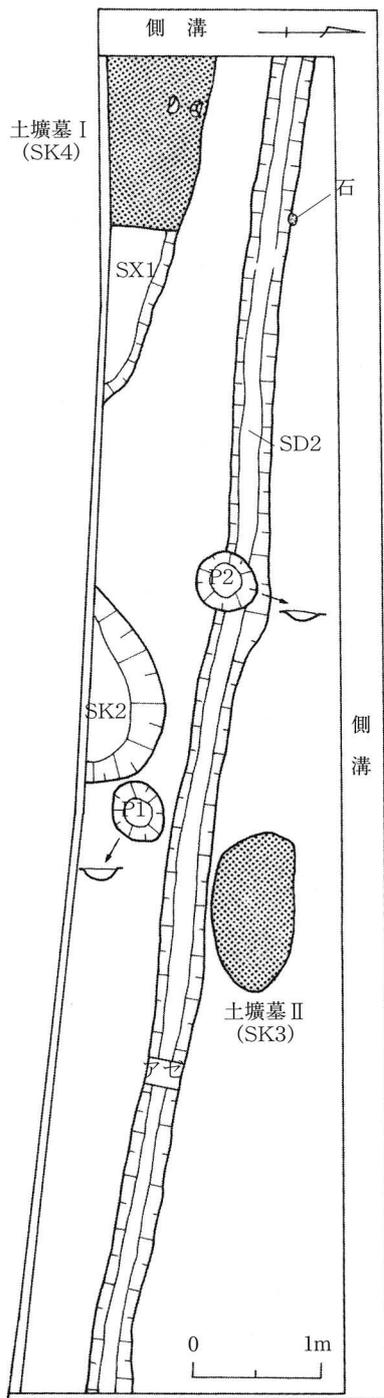
SX1 トレンチの西端で検出した。一部にとどまるが、落ち込みの北の肩は、直線状のラインを呈している。当初大きな落ち込みと捉えていた。その掘り下げ中に人骨が出土したため、人骨東側の凹部をSK4とし、SX1とは別個の扱いとした。直線状のラインはSK4を含めると約2.8m分確認した。現存で深さ12cmを測る。

SK2 トレンチの中央で検出。調査地外へ延びるが、平面は楕円形を呈すると推定される。現存長で、長径1.5m短径0.6m、深さ28cmを測る。断面形は緩やかな挿鉢形を呈する。埋土は第3層を主体とし、第4層を少量ブロック状に含む層である。晩期滋賀里Ⅲb式に属する土器が一括で出土した。土壙墓Ⅰ(SK4) トレンチ西端で検出。墓壙は現存長で長軸1.4m短軸0.8m深さ18cmを測る。当橈初SX1の一部として掘り下げたため、墓壙の平面形は不詳だが、人骨の残存形態から、土壙墓Ⅱと同じく平面形は長楕円形を呈するものと見ておきたい。墓壙上面、下肢部の直上に拳大の円礫を2個確認した。標石と考えられる。埋土は第4層を主体とし、第3層を中量ブロック状に含む層である。人骨の遺存状態は良好で、頭骨・左右上腕骨・右橈骨・右尺骨・左右大腿骨・脛骨・腓骨などを検出した。頭位は東を向く。仰臥屈位で、右腕部の上に大腿骨を重ねるため、下肢部の屈曲は大きい。顔面は当初南に向いていたものが身体の腐敗に伴い、頸椎が分離し墓壙の底面に埋もれていた。晩期滋賀里Ⅲb式の土器が出土した。

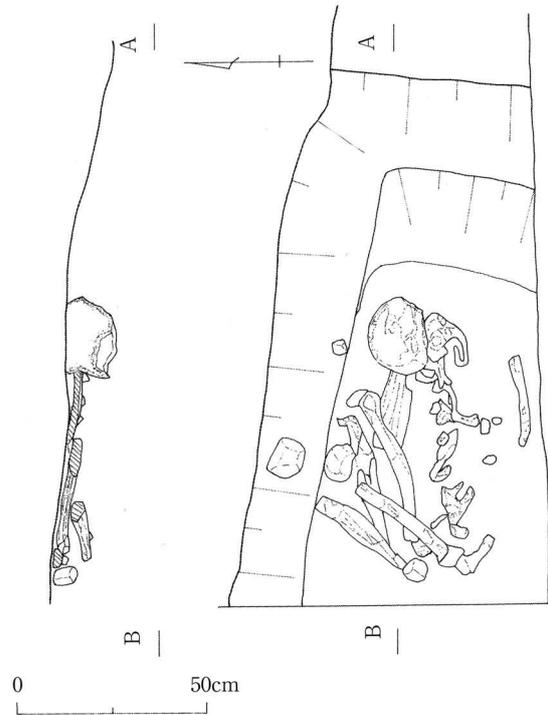
土壙墓Ⅱ(SK3) トレンチの中央、東寄りで検出。墓壙は長楕円形を呈し、長軸1.26m短軸0.6m深さ16cmを測る。埋土は第3層を主体とし、第4層のブロックを少量含む層である。人骨の遺存状態は良好で、頭骨・上腕骨・尺骨・橈骨・左右大腿骨・左脛骨・左腓骨・骨盤などを検出した。頭位は東を向く。横臥屈位で、下肢部を胸部に接するように屈曲させている。頭部は、土壙墓Ⅰと同じく腐敗後反転し上顎部が上方を向く。晩期滋賀里Ⅲb式の土器が出土した。



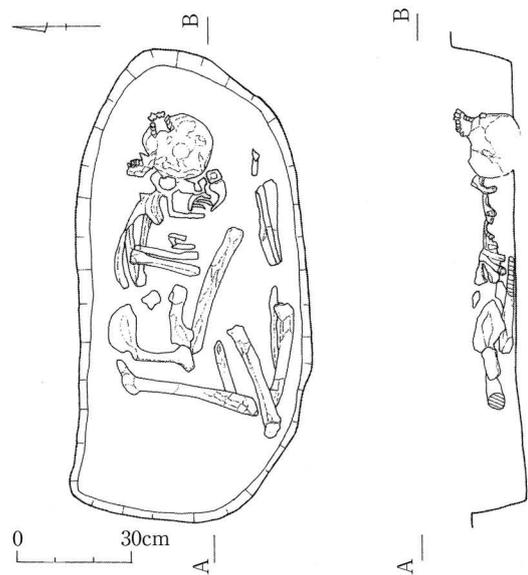
第4図 遺構面Ⅰ略測図



第5図 遺構面II平面図



第6図 土壙墓 I 実測図



第7図 土壙墓 II 実測図

5) 出土遺物

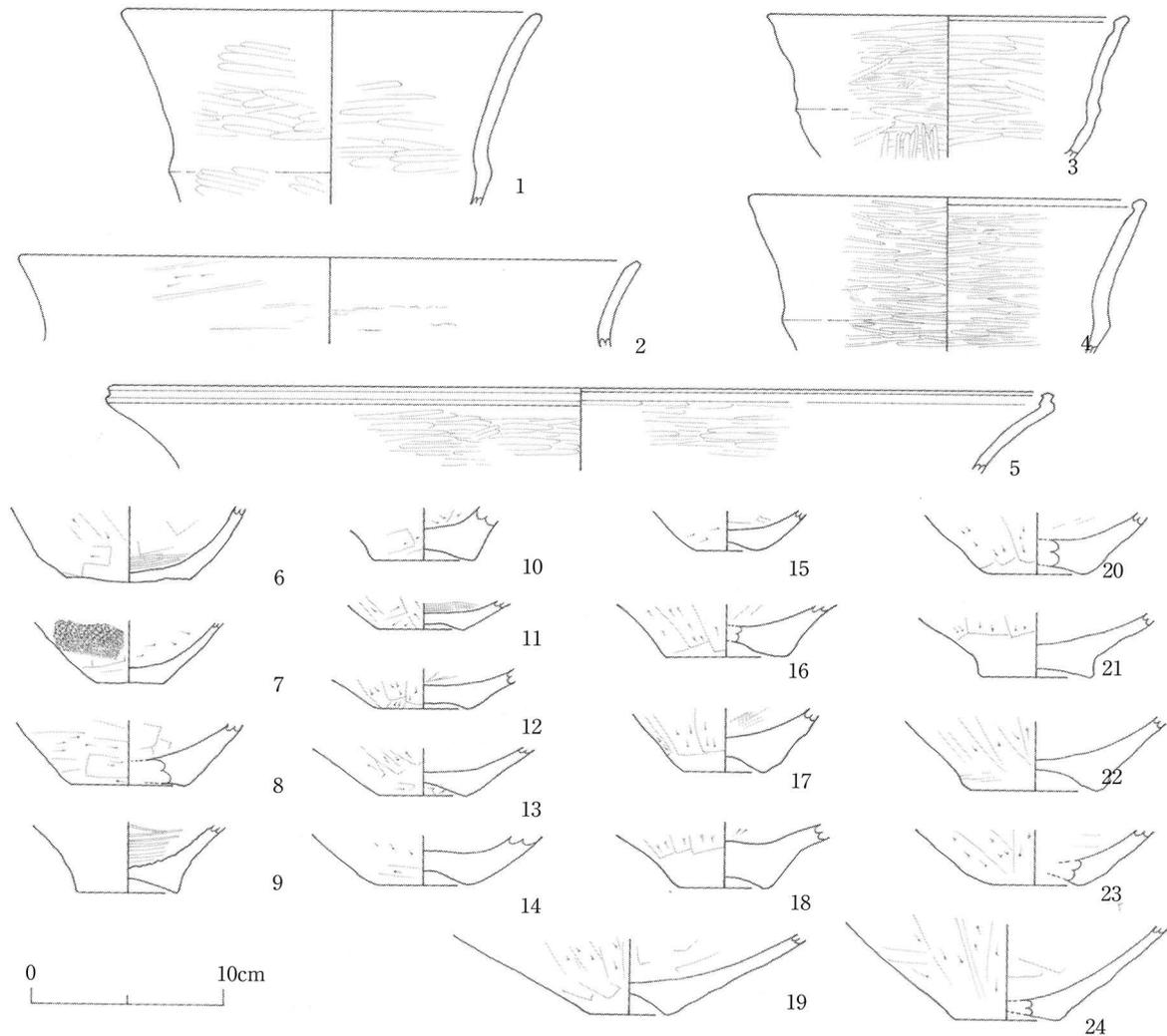
① 縄文土器

SK2出土縄文土器 (第8図5)

5は浅鉢に属す。外傾する口縁部から、口縁端部は上方に短く屈曲し、外面に沈線が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。内面に黒斑あり。口径48.8cm。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。

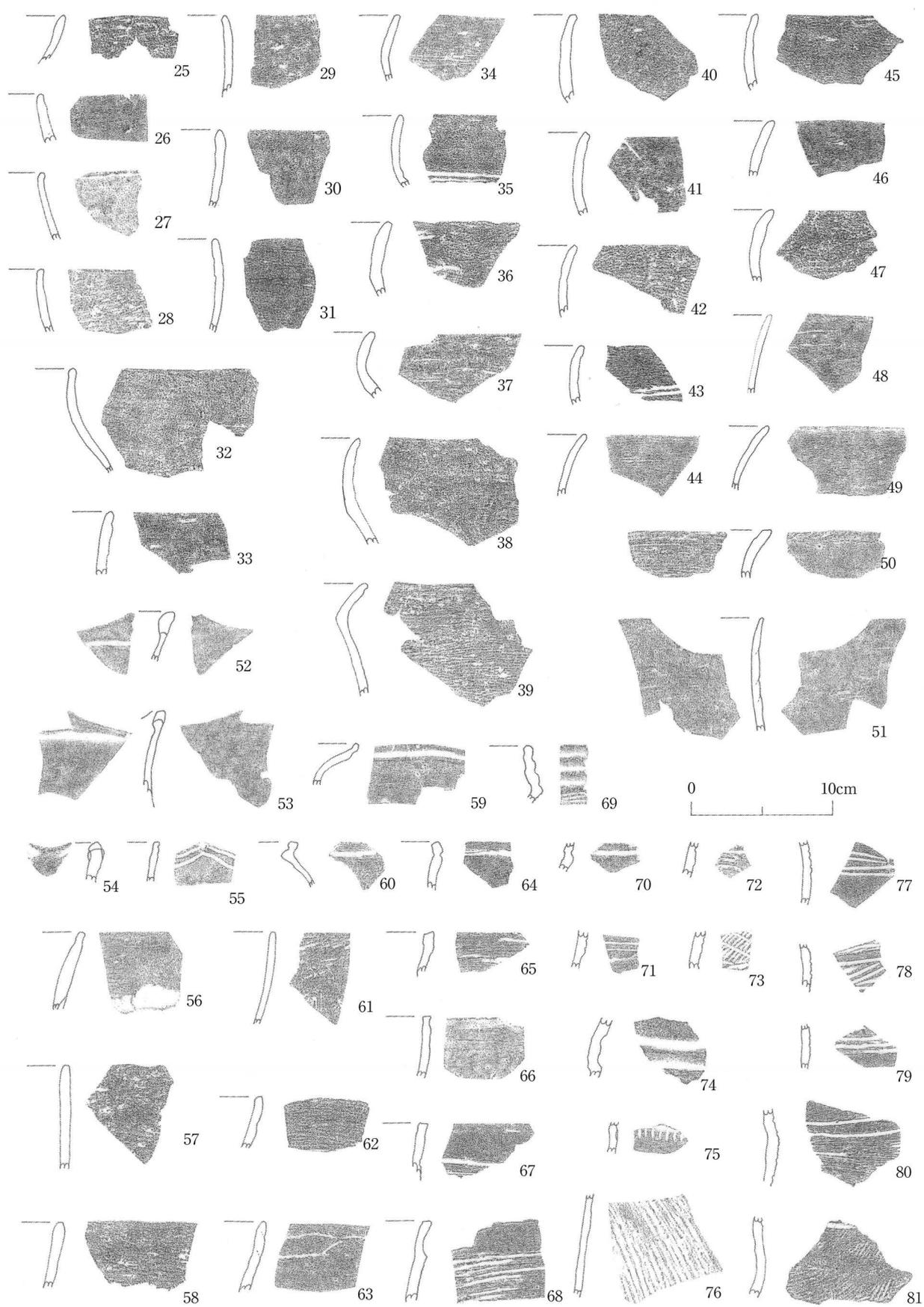
第3層出土縄文土器(第8・9図)

深鉢(2・6～16・18～20・22～30・32～49・51・58・65・69・76・81)は、口縁部(2・25～30・32～49・51・58・65・69)・体部(76・81)・底部(6～16・18～20・22～24)がある。口縁部の形態は外弯するもの(2・33・37・40～51)、外折するもの(34・36・38・39・69)、内弯するもの(25・29・30・58)、内傾するもの(26～28・32・35・65)が見られる。底部には平底(7・8)をもつもの以外は、凹む形態をもつ。以下個々の詳細を述べる。2の調整は内面ナデ、外面ヘラケズリが施される。口径32.0cm。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。6の底部は剥離していると思われる。篠原式(中～新)に属す。調整は内面工具によるナデ・ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施される。底径6.5cm。色調は内面黄褐色(2.5Y5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。7は外面に縄文が見られることから、他地域産(ここで言う篠原・滋賀里以外)に属すと思われる。調整は内外面ヘラケズリ、外面底部ヘラミガキが施される。底径3.8cm。色調は内面黒褐色(10YR3/2)、外面褐色(7.5YR4/3)を呈する。8の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径5.8cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。9の調整は内面二枚貝による条痕、外面ヘラケズリが施される。底径5.2cm。色調は内面黄褐色(2.5Y5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。10の調整は内外面共にヘラケズリが施される。底径5.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面褐色(7.5YR4/6)を呈する。11の調整は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施される。



第8図 縄文土器実測図

底径4.0cm。色調は内面明赤褐色(5YR4/6)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。12の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.6cm。色調は内面黄灰色(2.5Y4/1)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。13の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.6cm。色調は内面黒褐色(2.5Y3/1)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。14の調整は内面ナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.8cm。色調は内面灰褐色(7.5YR5/2)、外面にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。15の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径3.4cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR4/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。16の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径6.3cm。色調は内面黄灰色(2.5Y4/1)、外面灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。18の調整は内外面共にヘラケズリが施される。内面に黒斑あり。底径4.2cm。色調は内面灰黄色(2.5Y6/2)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。19の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.0cm。色調は内面黒褐色(10YR3/1)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。20の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.8cm。色調は内面黒褐色(2.5Y3/1)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。22の調整は内面ナデ、外面ヘラケズリが施される。底径6.6cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。23の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.6cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。24の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径5.2cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR4/3)、外面黒褐色(10YR3/2)を呈する。25の調整は内外面共にヘラケズリが施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。26の調整は内外面共にヘラミガキが施される。外面に煤付着。色調は内面灰黄褐色(10YR4/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。27の調整は著しい風化のため詳細不明。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。28の調整は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施される。色調は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する。29の調整は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施される。色調は内面にぶい橙色(7.5YR7/4)、外面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。30の調整は内面ヘラミガキ、外面著しい風化のため詳細不明。色調は内面黒色(N2/), 外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。32の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黒色(5Y2/1)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。33の調整は内面ヘラミガキ、外面には二枚貝による条痕が見られる。色調は内面黒色(7.5Y2/1)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。34の調整は内面ヘラミガキ・ケズリ、外面貝による条痕が見られる。色調は内面黒褐色(2.5Y3/1)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。35の調整は内外面共に著しい風化のため詳細不明。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。36の調整は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施される。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する。37の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面にぶい赤褐色(5YR5/4)、外面褐色(7.5YR4/4)を呈する。38の調整は内面風化のため詳細不明、外面ヘラケズリが施される。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。39の調整は内面ナデ、外面ハケメ(4/cm)が施される。色調は内面黒色(7.5Y2/1)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。40の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面オリーブ黒色(10Y3/1)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。41の調整は内外面共に著しい風化のため詳細不明。色調は内面橙色(5YR6/6)、外面明赤褐色(5YR5/6)を呈する。42の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面オリーブ黒色(5Y3/1)、外面黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。43の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面灰黄色(2.5YR6/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。44の調整は内面ヘラミガキ、外面条痕が見られる。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。45の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面



第9図 縄文土器実測図・拓影

灰黄褐色(10YR5/2)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。46の調整は内面ヘラミガキ、外面著しい風化のため詳細不明。色調は内面にぶい黄橙色(10YR7/3)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。47の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黒色(10Y2/1)、外面灰黄色(2.5Y6/2)を呈する。48の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面暗灰黄色(2.5Y5/2)、外面灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。49の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は褐色(10YR4/4)を呈する。51の調整は内面具による条痕、外面ヘラミガキが施される。色調は内面明赤褐色(2.5YR5/6)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。58は深鉢もしくは鉢に属す。調整は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。65は滋賀里Ⅰ～Ⅱ式に属す。調整は内面工具によるナデ、外面ハケメ(7/cm)が施される。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。69は口縁部外面に凹線が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。76は篠原式に属す。調整は内面ヘラケズリ、外面二枚貝による条痕が見られる。色調は内面黄褐色(10YR5/3)、外面灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。81は滋賀里Ⅱ式に属す。調整は内面ハケメ(4/cm)、外面沈線1条・巻貝による条痕が見られる。色調は内面灰白色(2.5Y7/1)、外面にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

浅鉢(1・3・4・31・52～57・59～64・66・67・70・73～75・77・78・80)は、口縁部(1・3・4・31・52～57・59～64・66・67)、体部(70・73～75・77・78・80)がある。口縁部の形態は、外弯するもの(1・3・4・56)、内弯するもの(31・61・62・63)、直立するもの(57・66・67)、突起をもつもの(52～55)、段をもつもの(59・60)が見られる。以下個々の詳細を述べる。1の調整は内外面共にヘラミガキが施される。口径21.4cm。色調は内面明赤褐色(5YR5/6)、外面にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。3の調整は内面ヘラミガキ、外面ハケメ・ヘラミガキが施される。内外面に煤附着。口径18.4cm。色調は内面黄褐色(2.5Y5/3)、外面暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する。4の調整は内面ヘラミガキ、外面ハケメ後ヘラミガキが施される。内面に煤附着。口径20.0cm。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。31の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面黒褐色(10YR3/2)を呈する。52の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黒褐色(10YR3/2)、外面灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。53の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黒褐色(10YR3/1)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。54の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。55の口縁部に2条からなる凹線状の文様が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。56の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黄褐色(2.5Y5/3)、外面オリーブ褐色(2.5Y4/3)を呈する。57の調整は内面風化のため詳細不明、外面ヘラケズリが施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。59の口縁部に1条の凹線状の文様が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黒褐色(2.5Y3/1)、外面暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈する。60の調整は内面ナデ、外面ヘラミガキが施される。色調は褐灰色(10YR4/1)を呈する。61の調整は内面ハケメ(6/cm)、外面ヘラケズリが施される。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面褐灰色(10YR4/1)を呈する。62の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面黒色(5Y2/1)、外面にぶい黄色(2.5Y6/3)を呈する。63は外面に明瞭な接合痕が見られる。調整は内面ヘラミガキ、外面ナデが施される。色調は内面黒色(10Y2/1)、外面灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。64は外面口縁部に沈線状の段が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。66の調整は内外面共に貝による条痕が見られる。色調は内面にぶい黄褐色(10YR4/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。67は外面に沈線が見

られる。調整は内面ヘラミガキ、外面ハケメが施される。色調は内面灰黄褐色(10YR5/2)、外面褐灰色(10YR4/1)を呈する。70調整は内外面共にナデが施される。色調は内面暗褐色(10YR3/3)、外面にぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する。73の外面にヘラによる文様が見られる。調整は内面ヘラミガキが施される。色調は内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面黒褐色(10YR3/1)を呈する。74は縄文後期（滋賀里以前）に属す。外面に2条の段が見られる。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。75の外面に小刻みなキザミメが見られる。調整は内面ヘラケズリが施される。色調は内面にぶい黄褐色(10YR4/3)、外面褐色(10YR4/6)を呈する。77・78は櫃原式土器の特徴となる七宝文風の文様が見られ、滋賀里Ⅱ～Ⅲa式に属す。77の色調は内面黒褐色(2.5Y 3 /1)、外面黒褐色(10YR3/1)を呈する。78の色調は内面黒色(7.5Y2/1)、外面黒褐色(2.5Y3/2)を呈する。80の外面に2条の沈線が見られる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調は内面灰黄色(2.5Y6/2)、外面黒褐色(2.5Y3/1)を呈する。不明（71・72・79）土器がある。体部が細片のために形態不明。71は外面に2条の沈線がみられる。調整は内面ヘラミガキが施される。色調は内面暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する。72は外面に1条の沈線が見られる。調整は内外面共に貝による条痕が施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。79は外面に3条の沈線が見られる。調整は内面ヘラミガキが施される。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。

第4層出土縄文土器（第8・9図）

深鉢（17・21・50・68）は、口縁部が外傾するもの(50・68)、底部が凹むもの(17・21)がある。17の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径4.0cm。色調は内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、外面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。21の調整は内面工具によるナデ、外面ヘラケズリが施される。底径5.6cm。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。50の調整は内外面共にヘラミガキが施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。68の調整は内面ヘラミガキ、外面貝による条痕が見られる。色調は内面にぶい橙色(7.5YR6/4)、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。

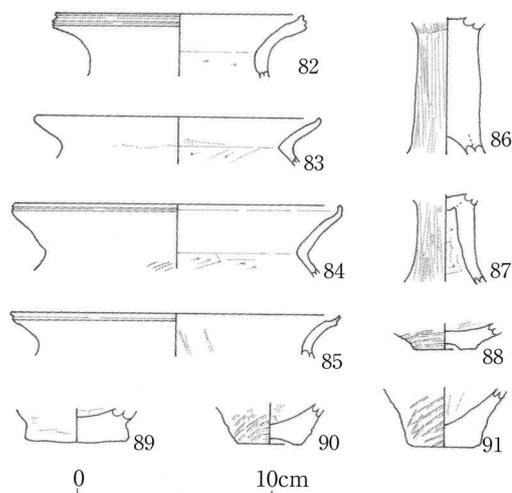
② 弥生土器

SK1出土弥生土器（第10図85）

85は弥生後期に属す、甕口縁部。外弯する口縁部から、口縁端部は屈曲して上方に向く。調整は内面工具によるナデ、外面ナデが施される。口径17.0cm。色調は内面にぶい黄橙色（10YR7/2）、外面にぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。

第3層出土弥生土器（第10図82～84・86～91）

弥生後期に属す。82は壺口縁部。口縁端部に2条の沈線が見られる。調整は内面ナデ・ヘラケズリ、外面ナデが施される。口径12.8cm。色調は内面にぶい黄褐色(10YR5/3)、外面にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。83・84は甕口縁部。83は「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は丸くおさめる。調整は内面ヘラケズリが施される。口径14.7cm。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。84は「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は屈曲し上方に向き丸くおさめる。調整は内面ヘラケズリ、外面タタキメ（4/cm）が施される。口径16.8cm。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。86・87は



第10図 弥生土器実測図

高坏脚柱部。86は中実の脚柱部をもつ。調整は外面ハケメ（10/cm）後ヘラミガキが施される。色調は内面にぶい黄橙色（10YR6/4）、外面にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。87は円盤充鎮法による接合痕が見られる。調整は坏部内面ヘラミガキ、脚柱部内面シボリメ、外面ハケメ後ヘラミガキが施される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する。88～91は甕底部。88の調整は内面ハケメ、外面タタキメ（5/cm）が施される。底径3.3cm。色調は内面にぶい黄褐色（10YR5/4）、外面赤褐色（5YR4/6）を呈する。89の調整は内外面共に板状工具によるナデが施される。底径5.0cm。色調は内面灰黄色（2.5Y6/2）、外面暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈する。90の調整は内面ハケメ（6/cm）、外面タタキメ（4/cm）が施される。底径3.4cm。色調は内面灰黄色（2.5Y6/2）、外面にぶい橙色（5YR6/4）を呈する。91の調整は内面工具によるナデ、外面タタキメ（3/cm）が施される。底径3.8cm。色調は内面にぶい黄褐色（10YR4/3）、外面明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

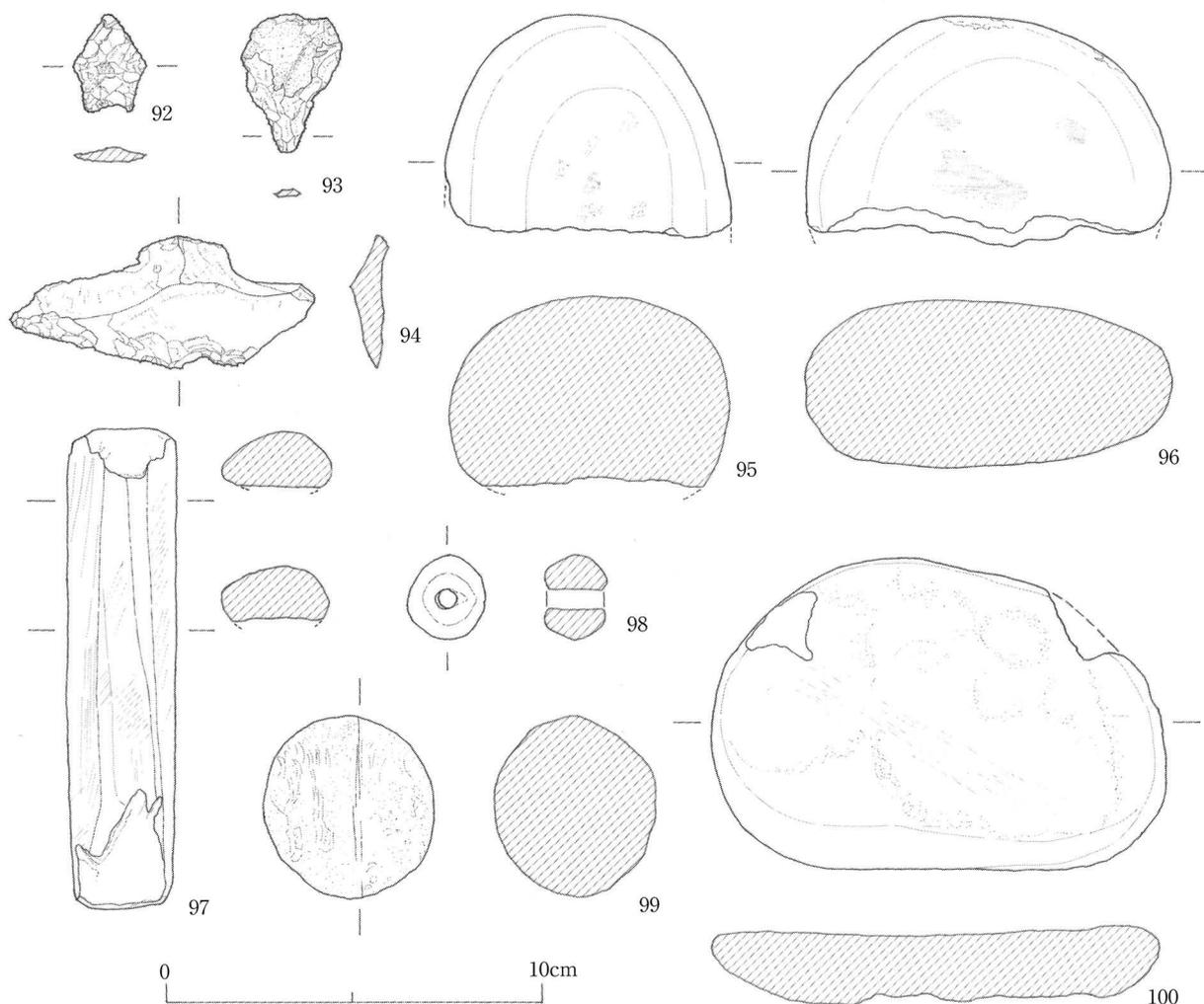
③ 石器・石製品

SD2出土石製品（第11図92）

92はサヌカイト製、石鏃。五角形をなし、基部形態がわずかに抉りの入る凹基。長さ3.1cm、幅1.9cm、厚さ0.35cm、重さ1.49g。

第3層出土石製品（第11図94～100）

94はサヌカイト製、石匙。基部に原面をもつ。長さ3.5cm、幅8.05cm、厚さ0.8cm、重さ16.31g。



第 11 図 石器・石製品・土製品実測図

95・96は磨石。共に表面に擦過痕が見られる。95は長さ(6.0)cm、幅(7.5)cm、厚さ(5.1)cm、重さ306.4g。96は長さ9.6cm、幅(6.2)cm、厚さ4.5cm、重さ397.21g。97は石刀。先端部は使用による折損から、二次的加工を施し転用品として使用されたと思われる。表面に無数の研磨痕が見られる。長さ(12.9)cm、幅3.1cm、厚さ(1.7)cm、重さ113.83g。98は土製玉製品。完形。長さ2.0cm、幅2.2cm、厚さ1.65cm。色調は灰色(7.5Y5/1)を呈する。99はサヌカイト製の石玉。円礫素材。長さ4.9cm、幅4.6cm、厚さ4.3cm、重さ132.72g。100は不明。石皿の形態をもつが、使用痕のような擦過痕がうかがわしいことから不明とした。長さ8.5cm、幅12.0cm、厚さ2.0cm、重さ331.45g。

第4層出土石製品 (第11図93)

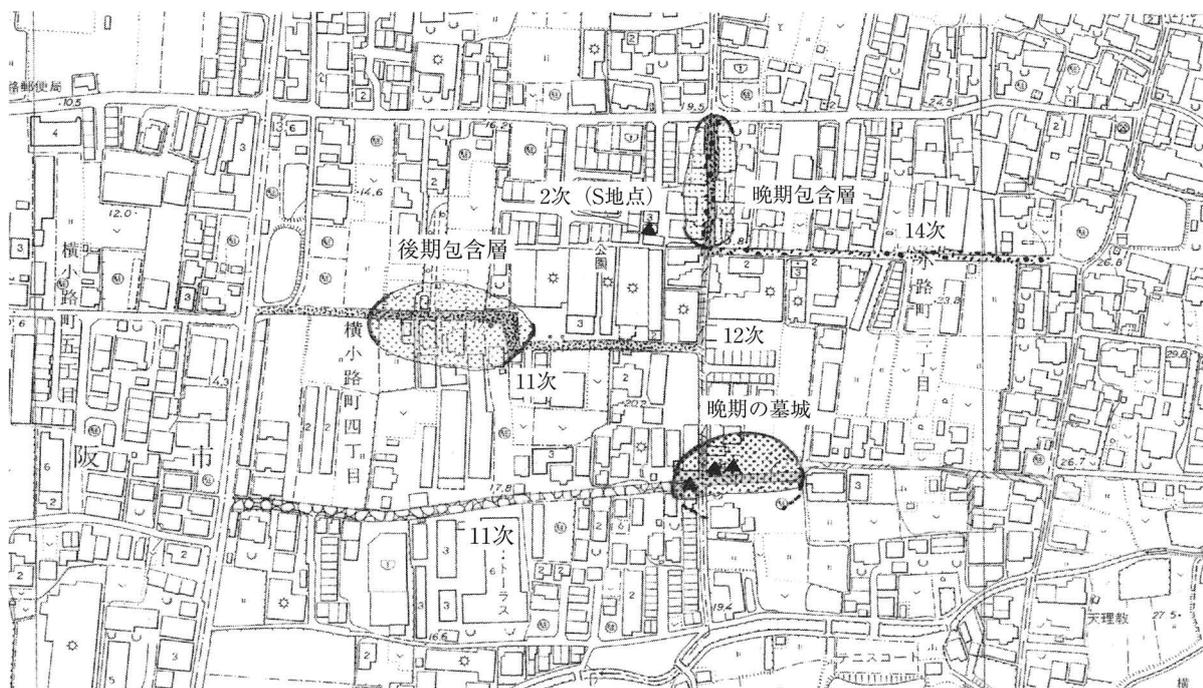
93はサヌカイト製、石錐。涙形をなし、表面に原面をもつ。製作途中品とも考えられる。長さ3.7cm、幅2.65cm、厚さ0.2cm、重さ5.47g。

6)まとめ

今回の調査地は約30㎡と狭隘であったが、縄文時代晩期前半の土壙墓2基を検出するなど、大きな成果を得た。ここでは箇条書きに調査成果をまとめておきたい。

(1) 最近今回の調査地付近では下水道工事が頻繁に行われており、それに伴う発掘調査も進展している。近年まで道路下の工事は活発でなかったため遺物包含層はよく遺存している。下図には下水道調査で縄文期の遺物包含層が検出された範囲を図示してみた。北側の晩期前半の文化層範囲には、S地点で検出された土壙墓が対応するものと考えられる。いっぽう、調査地のすぐ南側道路周辺では第11次調査で人骨が出土している。南側道路下の晩期前半文化層の範囲とを勘案すると、概ね網目で示した範囲にS地点とは別個の墓域が推定できる。

(2) 出土した土器は、深鉢・浅鉢の口縁部形態、底部の形態、調整法などから、一部後期に遡るものや滋賀里Ⅱ式に属するものがあるが、主体は滋賀里Ⅲb式、篠原式中～新段階が占める。今回図示しえなかったが、土壙墓の埋土から該期の土器が出土し、第3層出土土器の年代観からも該期の营造と考えられる。



第 12 図 縄文時代晩期の墓域推定図

第1表 打製石器一覧表

挿図番号	地区名	層位名	遺構名	出土年月日	種類	石材	重さ	備考
1	W区	第3層下面(石器)		021114	原石	サヌカイト	86.36	表面に原面。
2	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	1.43	
3	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	2.90	二辺に原面。
4	W区	第3層下面		021114	片面調整	サヌカイト	2.96	
5	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	8.47	
6	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	9.57	一辺に原面。
7	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	2.79	
8	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	14.69	
9	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	4.96	一部に原面。風化。
10	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	2.09	
11	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	6.35	
12	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	4.35	
13	W区	第3層下面		021114	削器	サヌカイト	14.05	一辺に原面。刃部摩滅。
14	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	1.74	風化。
15	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	3.87	表面に原面。
16	W区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	3.15	一辺に原面。
17	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.80	一辺に原面。
18	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.89	表面に原面。
19	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	4.11	
20	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.16	表面に原面。
21	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	1.98	表面に原面。
22	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.77	表面に原面。
23	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	1.08	
24	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.64	表面に原面。
25	W区	第3層(中～下層)		021113	削器	サヌカイト	3.43	破片。
26	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.96	表面に原面。
27	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	1.32	表面に原面。
28	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	1.55	一辺に原面。
29	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	3.92	一辺に原面。
30	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	6.87	
31	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.41	
32	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	13.49	一辺に原面。
33	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.48	風化。
34	W区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.46	
35	W区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	0.72	
36	(側溝)	第3層下面～第4層		021114	剥片	サヌカイト	19.29	表面に原面。
37	E区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	1.67	
38	E区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	12.01	風化。
39	E区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	1.69	
40	E区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	6.39	
41	E区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	2.24	
42	E区	第4層上面		021115	剥片	サヌカイト	2.83	一辺に原面。
43	E区	第4層上面		021115	原石	サヌカイト	49.06	表面に原面。
44	E区	第3層下面		021114	原石	サヌカイト	101.87	表面に原面。
45	E区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	1.25	表面に原面。
46	E区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	5.95	表面に原面。
47	E区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	3.08	一辺に原面。風化。
48	E区	第3層下面		021114	原石	サヌカイト	27.68	一辺に原面。
49	E区	第3層下面		021114	細部調整剥片	サヌカイト	3.48	
50	E区	第3層下面		021114	剥片	サヌカイト	7.08	一辺に原面。
51		第3層(黒色粘土)上層		021112	石槍	サヌカイト	11.01	製作途中の事故品。
52		第3層(黒色粘土)上層		021112	剥片	サヌカイト	6.71	一辺に原面。
53		第3層(黒色粘土)上層		021112	剥片	サヌカイト	1.48	
54		第3層(黒色粘土)上層		021112	剥片	サヌカイト	8.44	表面に原面。
55		第3層(黒色粘土)上層		021112	剥片	サヌカイト	5.56	表面に原面。
56		第3層(黒色粘土)上層		021112	剥片	サヌカイト	1.61	表面に原面。
57		第3層(黒色粘土)上層		021112	原石	サヌカイト	14.42	一部に摩滅。

58	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	0.18	
59	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	66.05	側面・表面に原面。
60	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.80	表面に原面。
61	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	156.93	側面・表面に原面。
62	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	8.79	一辺に原面。
63	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	5.69	一辺に原面。
64	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	8.04	表面に原面。
65	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	14.13	
66	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	6.64	一辺に原面。
67	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	12.12	表面に原面。
68	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	7.12	一辺に原面。
69	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	5.82	一辺に原面。
70	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	8.40	側面・表面に原面。
71	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	削器	サヌカイト	20.11	一辺に原面。
72	東(E)区	第3層(中～下層)		021113	削器	サヌカイト	20.93	一辺に原面。製作途中。
73	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	0.53	
74	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	0.33	一辺に原面。
75	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	削器	サヌカイト	3.25	破片。
76	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.07	
77	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	5.03	表面に原面。風化。
78	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	4.89	一辺に原面。
79	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.79	表面に原面。
80	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	細部調整剥片	サヌカイト	3.67	一辺に原面。風化。
81	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.96	風化。
82	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	3.34	
83	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.09	風化。
84	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	2.43	
85	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	原石	サヌカイト	11.95	一辺に原面。
86	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	11.05	一辺に原面。
87	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	5.80	一辺に原面。
88	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	3.45	一辺に原面。
89	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	6.89	
90	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	12.02	一辺に原面。
91	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	5.51	風化。
92	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	4.95	一辺に原面。
93	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	2.45	風化。
94	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.67	
95	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.53	
96	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	3.17	風化。
97	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	細部調整剥片	サヌカイト	3.96	風化。
98	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	2.23	表面に原面。
99	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	細部調整剥片	サヌカイト	1.71	
100	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.84	一辺に原面。
101	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.53	一辺に原面。
102	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	5.28	表面に原面。
103	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	削器	サヌカイト	17.36	一辺に原面。
104	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	1.83	一辺に原面。
105	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	削器	サヌカイト	8.68	刃部摩滅。風化。破片。
106	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	5.83	
107	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	3.82	
108	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	2.15	
109	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	原石	サヌカイト	25.99	一辺に原面。
110	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	片面調整	サヌカイト	7.54	
111	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	原石	サヌカイト	31.00	表面に原面。
112	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	原石	サヌカイト	11.50	表面に原面。
113	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	剥片	サヌカイト	9.21	一辺に原面。
114	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	原石	サヌカイト	6.77	表面に原面。
115	(西)W区	第3層(中～下位層)		021113	原石	サヌカイト	7.93	表面に原面。

116		E区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	11.35	表面に原面。
117		E区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	2.95	表面に原面。
118		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.01	一辺に原面。
119		E区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	42.16	一部に原面。
120		E区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	17.38	表面に原面。摩滅。
121		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.80	一辺に原面。
122		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	11.96	一辺に原面。
123		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	6.83	
124		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	3.65	
125		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	1.73	風化。
126		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.23	表面に原面。
127		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	28.73	一辺に原面。
128		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	19.17	
129		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.14	
130		E区	第3層(中～下層)		021113	剥片	サヌカイト	2.16	一辺に原面。
131		E区	第3層(中～下層)		021113	原石	サヌカイト	28.95	表面に原面。
132	94	E区	第3層(中～下層)		021113	石匙	サヌカイト	16.31	一辺に原面。
133		(側溝)	第3層内(黒粘土)		021112	剥片	サヌカイト	0.75	一辺に原面。
134		(側溝)	第3層内(黒粘土)		021112	剥片	サヌカイト	5.14	表面に原面。
135		(側溝)	第3層内(黒粘土)		021112	剥片	サヌカイト	14.62	表面に原面。風化。
136		(側溝)	第3層内(黒粘土)		021112	原石	サヌカイト	13.44	一辺に原面。
137		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	0.25	
138		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	0.25	
139		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	7.28	一辺に原面。
140		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	4.42	表面に原面。
141		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	3.32	表面に原面。
142		(排土)	第3層		021118	削器?	サヌカイト	2.59	一部に原面。破片。
143		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	8.30	
144		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	1.52	
145		(排土)	第3層		021118	剥片	サヌカイト	5.66	風化。
146		(排土)	第3層		021118	原石	サヌカイト	3.71	側面・表面に原面。
147		(排土)	第3層		021120	剥片	サヌカイト	1.73	
148		(排土)	第3層		021120	剥片	?	2.14	
149	92			SD2(全)	021118	石鏃	サヌカイト	1.49	完形。
150	93		第4層内		021122	石錐	サヌカイト	5.47	表面に原面。

第2表 磨製石器一覧表

挿図番号	地区名	層位名	出土年月日	種類	石材	重さ	備考
1	95	(側溝) 第3層～4層上面	021112	磨石		306.4	
2		東(E)区 第3層(中～下層)	021113	磨石		55.47	
3	96	東(E)区 第3層(中～下層)	021113	磨石		397.21	
4		東(E)区 第3層(中～下層)	021113	磨石		82.49	
5	97	W区 第3層下面(石刀)	021114	石棒		113.83	
6		(側溝) 第3層内(黒粘土)	021112	?		95.36	自然石?
7		W区 第3層下面	021114	磨石		10.76	破片。
8		全区 第3層内(中～下層) 獣骨	021114	?	長石	2.21	自然石?
9		(側溝) 第3層下面～第4層	021114	磨石		13.57	破片。
10		(側溝) 第3層下面～第4層	021114	?		6.50	自然石?
11		E区 第3層下面	021114	?	長石	4.90	自然石?
12		E区 第3層(中～下層)	021113	?		168.99	自然石?
13		E区 第3層(中～下層)	021113	?		6.75	自然石?
14		第3層(黒色粘土)	021112	磨石		7.51	破片。
15		第3層(黒色粘土)	021112	?	粘板岩	15.77	
16		第3層(黒色粘土)	021112	?	粘板岩	26.83	
17	100	西W区 第3層(中～下位層)	021113	皿		331.45	
18	99	西W区 第3層(中～下位層)	021113	磨石		132.72	
19		西W区 第3層(中～下位層)	021113			6.09	

馬場川遺跡第13次調査出土の人骨について

安部 みき子

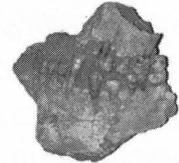
土壌墓Ⅰ(1号人骨) 縄文時代晩期

(大阪市立大学院医学研究科器官構築形態学講座)

出土状況：頭位は東で、頭骨は南を向き、右の上肢骨は上腕と前腕の骨が平行して出土していることから全屈していると推測されるが、左の上肢骨は保存状態が悪く観察できなかった。下肢骨は膝関節と足を揃えた状態で屈曲し、膝関節は北に倒れている。体幹は肋骨の一部を除いてほとんど喪失しているが、四肢骨の状況から、仰臥位に埋葬されたと推測される。



1号正面



1号顎骨

出土部位：脳頭蓋はほぼ完全に出土していたが顔面頭蓋の破損は大きく、遺存部位は上顎骨に釘植している右犬歯から第1大白歯までの歯とその歯槽部の骨組織で、下顎骨は左第1切歯から第2大白歯までの歯、右第1、2切歯と歯槽部の骨組織であるが、下顎左犬歯はすでに脱落しており、歯槽も閉鎖している。脳頭蓋は左上方から土圧を受けたと思われる変形が大きく骨計測はできなかったが、顎骨に釘植していた歯は保存状態が比較的良かったので咬耗程度の観察と計測を行った(表1)。左側の上肢骨で同定できたものは橈骨のみで、橈骨頭と茎状突起が破損している以外はほぼ完全な形で出土している。右側は上腕骨の上腕骨顆、尺骨の肘頭、橈骨の橈骨粗面から約5cm骨幹が遺存しているが、骨表面の風化が著しいため骨計測はできなかった。手の骨格は同定できる骨片が検出されなかった。下肢では寛骨の一部が遺存しているが大坐骨切痕は破損し、大腿骨、脛骨と腓骨の骨幹は破片で遺存し、骨端の損失が大きく大腿骨のみ左右の骨頭が出土している。発掘時に右大腿骨全長をコンベックスで計測した値は44cmで、計測誤差は大きいがこの値から身長を算出すると男性の場合は164cm、女性の場合は158.4cmであり、160cm前後と推定される。足の骨格は距骨が左右とも滑車の一部と左踵骨の踵骨隆起のみが遺存している。

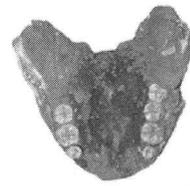
年齢と性の推定：年齢は第1大白歯の咬耗面から25才前後と推定される。性は眉上隆起が発達していることより男性の可能性が高いと推定される。

土壌墓Ⅱ(2号人骨) 縄文時代晩期

出土状況：頭位は東で、頭骨は外頭蓋底と下顎骨左側面を上にした状態で出土している。左の上肢骨は保存状態が悪かったが中手骨が頭骨の左横から出土しているため、上肢を体幹に添わせ肘関節は全屈していたと考えられる。右上肢骨は上腕骨が胸郭の下にあるが前腕は胸郭の上であり、後方から腹部に位置していることから、肘関節はゆるく屈曲していたと思われる。骨盤は左右の大腿骨と関節した状態で土壌の北壁に寄り、左下肢骨は腹部に添うように股関節も膝関節も強屈しているが、右側では股関節が直角に膝関節は上に向かって屈曲している。これらの出土状態から、体幹は南向きの半横臥で下肢は胡座をかいた状態で埋葬されたと推定される。また、埋葬されていた土壌の西側の約1/4からは人骨および遺物が出土していないため、この領域に関する検討が必要である。



2号正面



2号下顎骨

出土部位：頭骨はほぼ完全な状態で出土しているが保存状態が悪く骨計測はできなかったが、顎骨に釘植している歯は良く保存され咬耗の観察と計測を行った(表1)。上顎の歯は左右の犬歯と右第3

大臼歯以外はすべて釘植している。また、左第3大臼歯は萌出が完了していない。下顎は左右ともに第1切歯から第1小臼歯までの歯槽が破損しているため歯槽の観察はできなかった。釘植している歯は左が第2小臼歯から第3大臼歯まで、右が第2小臼歯から第2大臼歯までであり、右第3大臼歯は損失している。上顎犬歯は左右共に脱落し歯槽も閉鎖していることより抜歯の可能性が考えられる。体幹は肋骨が破片で出土している。上肢は、左側の上腕骨、尺骨、橈骨は破片であり復元できなかった。右側の上腕骨は両骨端の破損が大きく骨幹も保存状態は悪い。尺骨は肘頭と遠位部が破損した以外は比較的良く保存され、橈骨は橈骨粗面より下部約10cmの骨幹が遺存していた。手の骨格は左右不明の中手骨が1点出土している。下肢は、寛骨の一部が遺存しているが大坐骨切痕は破損していて性の判定はできない。左右ともに長骨は骨端の損失が大きいが、比較的骨幹の保存が良かった右大腿骨と脛骨について骨表面の観察と骨計測を行った(表2)。大腿骨の殿筋粗面と粗線、脛骨のヒラメ筋線と鉛直線(vertical line)の発達程度は平均的である。大腿骨の骨幹中央の中央横断面示数(柱状示数)は106.8で、骨体上断面示数(扁平示数)は83.8で扁平大腿骨である。脛骨の中央横断面示数は74.20で正脛となり扁平度は低い。計測誤差は大きいが発掘時に右大腿骨全長と右脛骨全長をコンベックスで計測した値は前者が37cmで、後者30cmである。男性の場合、大腿骨で推定すると150.9cm、脛骨では149.94cmとなり、女性の場合大腿骨では144.8cm、脛骨では145.33cmであった。足の骨格は同定できる骨片がなかった。

年齢と性の推定：年齢は第1大臼歯の咬耗面から30才前後と推定される。性の判定は寛骨の復元ができなかったため確定はできないが、眉上隆起の発達が悪く女性の可能性が高いと推定される。

表 1 歯の計測値

	1号人骨		2号人骨	
	左	右	左	右
上顎				
I1	類舌径		6.72	7.97
	近遠心径		8.31	8.93
I2	類舌径		6.58	7.01
	近遠心径		7.81	6.51
C	類舌径	7.40		
	近遠心径	7.60		
Pm1	類舌径	9.40	8.60	8.71
	近遠心径	7.48	6.62	6.93
Pm2	類舌径	9.06	8.42	8.54
	近遠心径	7.10	7.83	6.71
M1	類舌径	12.39	10.89	
	近遠心径	10.96	10.58	
M2	類舌径		10.30	
	近遠心径		8.35	
M3	類舌径		9.50	
	近遠心径		8.32	
下顎				
I1	類舌径	4.90 4.82		
	近遠心径	5.84 6.18		
I2	類舌径	4.03 4.82		
	近遠心径	6.42 6.44		
Pm1	類舌径	8.12		
	近遠心径	7.06		
Pm2	類舌径	8.69	6.96	7.82
	近遠心径	7.61	6.96	7.96
M1	類舌径	11.62	10.78	11.70
	近遠心径	12.59	12.22	11.15
M2	類舌径	8.94	8.52	9.87
	近遠心径	10.78	10.52	10.13
M3	類舌径		1.16	
	近遠心径		10.52	

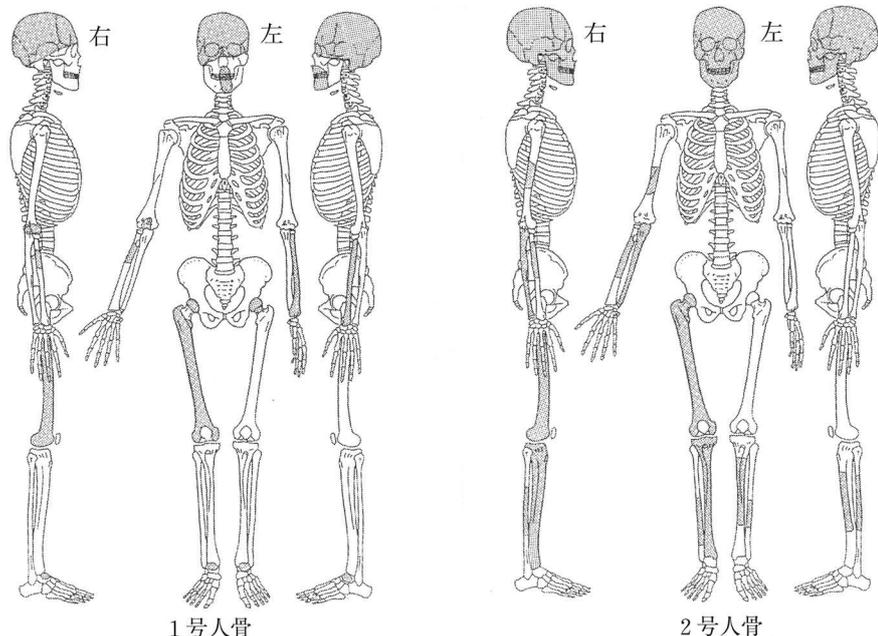
単位はmm

表 2 2号人骨の下肢の計測値

		左	右
		大腿骨	骨体中央矢状径
	骨体中央横径	26.04	
	骨体上部横径	30.73	
	骨体上部矢状径	25.75	
脛骨	骨体中央矢状径	28.45	
	骨体中央横径	21.11	

単位はmm

人骨の出土部位→
(アミ目部分)





調査前の状況（東より）

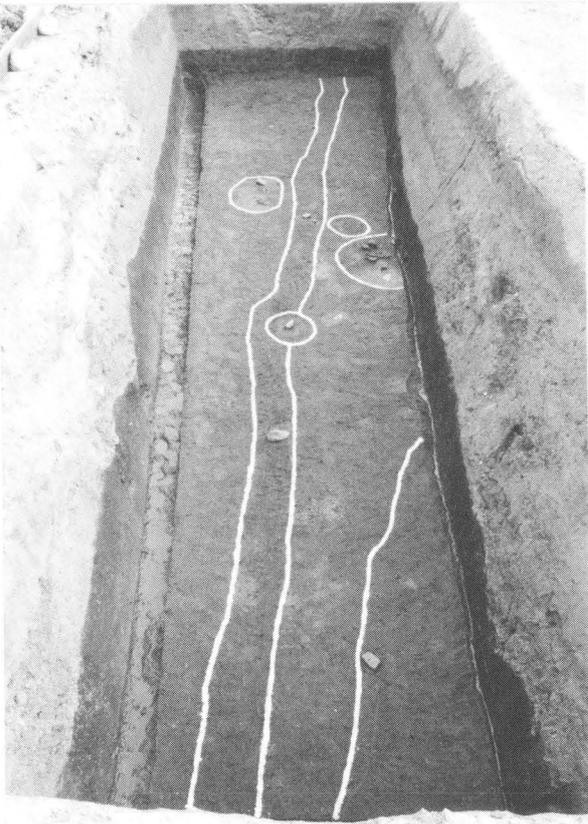


遺構面Ⅰ掘削後状況（西より）

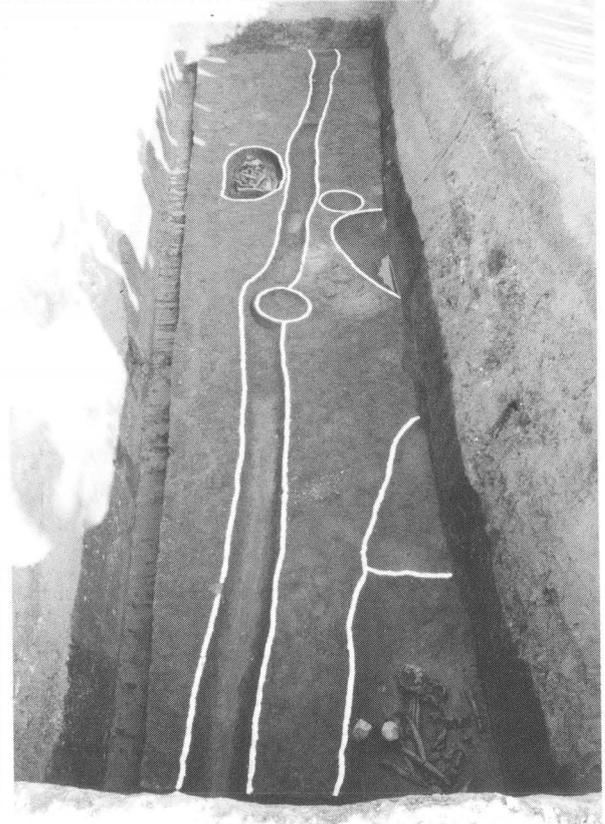


第3層内土器ほか検出作業

図版2 馬場川遺跡第13次調査 遺構



遺構面II 検出状況 (西より)



遺構面II 検出後状況 (西より)



土壙墓I (SK4)



土壙墓II (SK3)



第3層内遺物出土状況（西より）



第3層内遺物出土状況近景

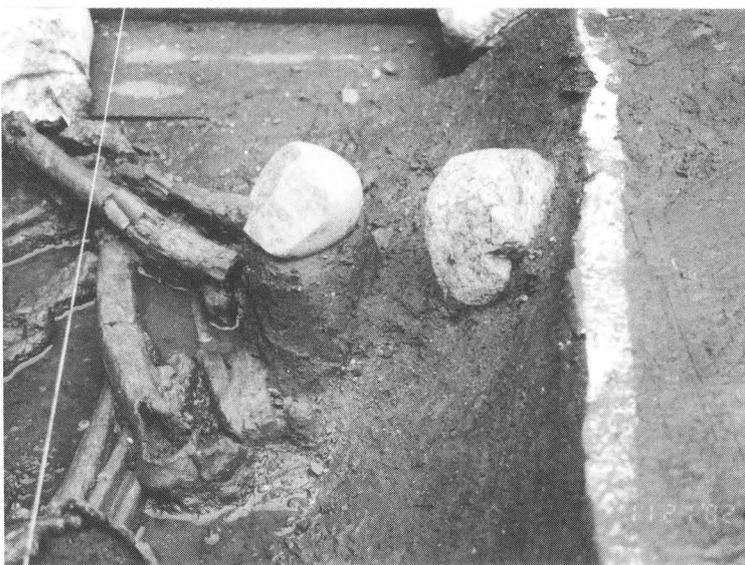


第3層内石刀出土状況

図版4 馬場川遺跡第13次調査 遺構



土壙墓Ⅰ内人骨検出作業



土壙墓Ⅰ内標石検出状況



土壙墓Ⅱ頭骨検出状況



SK2内遺物出土状況（西より）

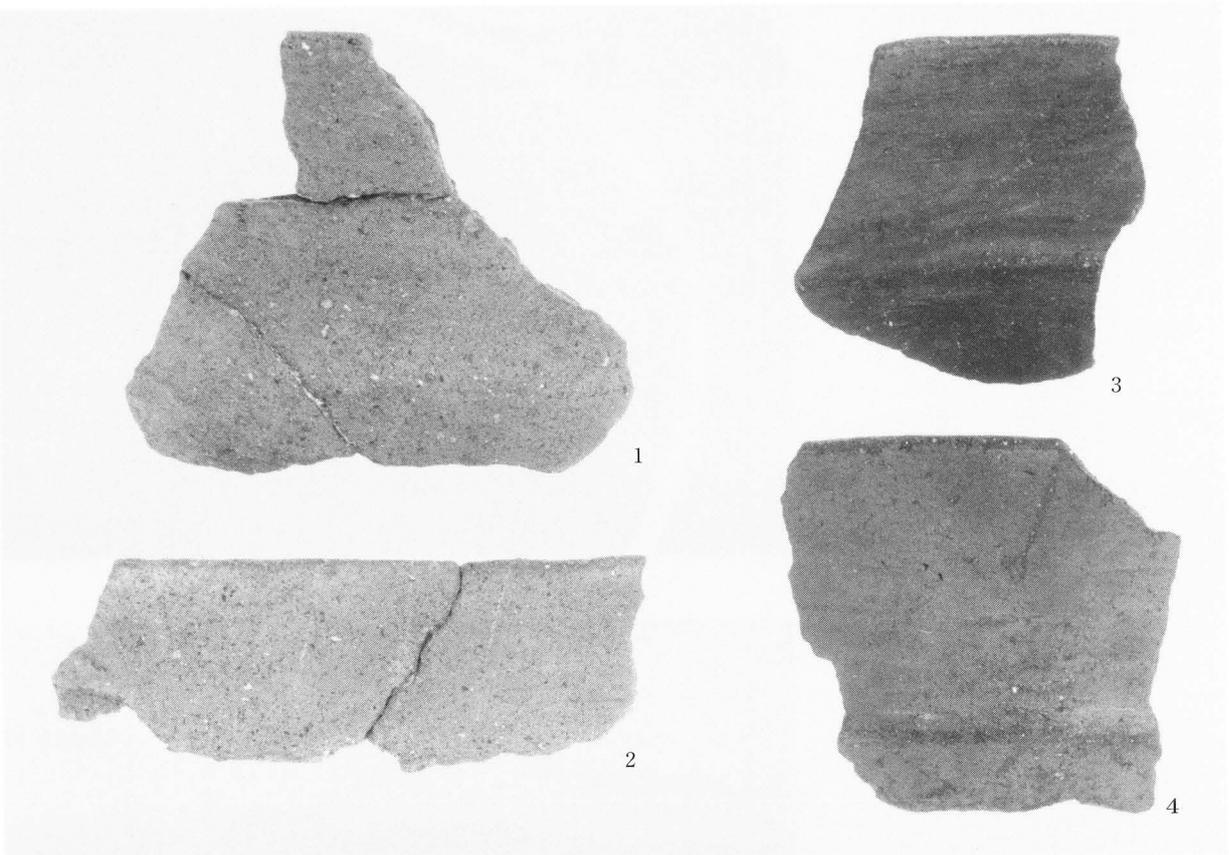


調査地南壁断面（黒色土が第3層）



市立縄手南中学校生徒現場見学

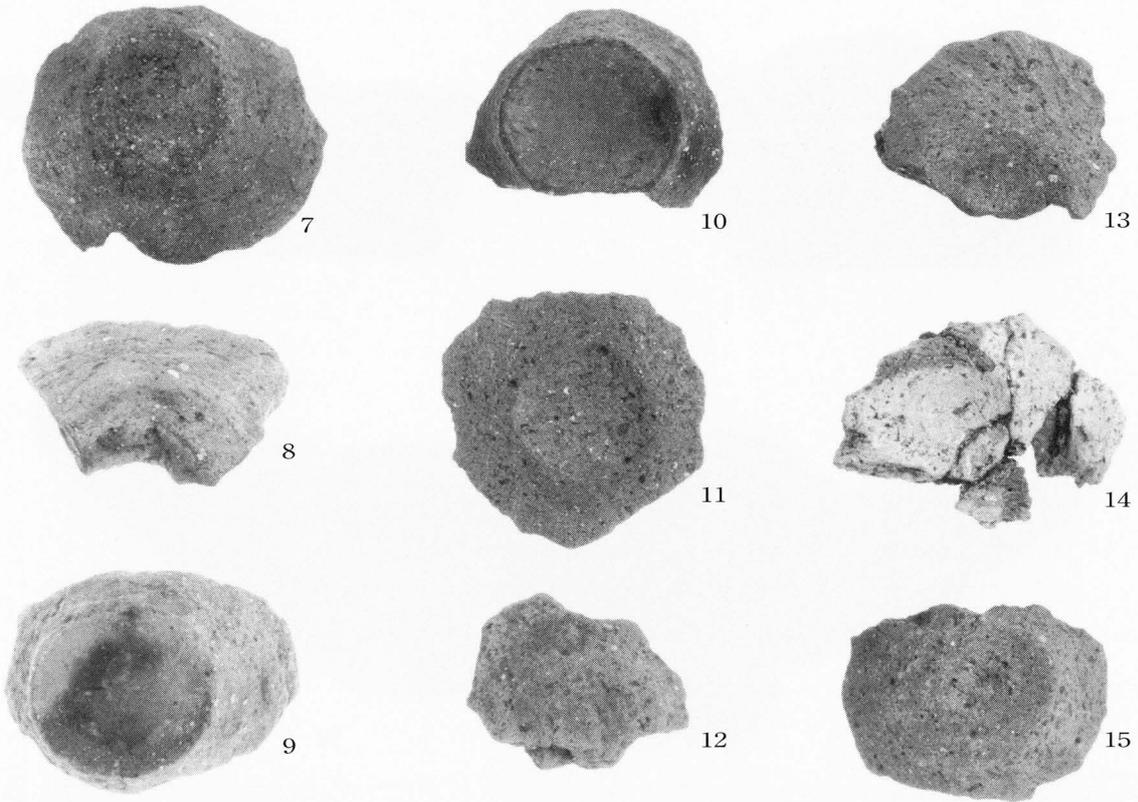
図版 6
馬場川遺跡第13次調査
遺物



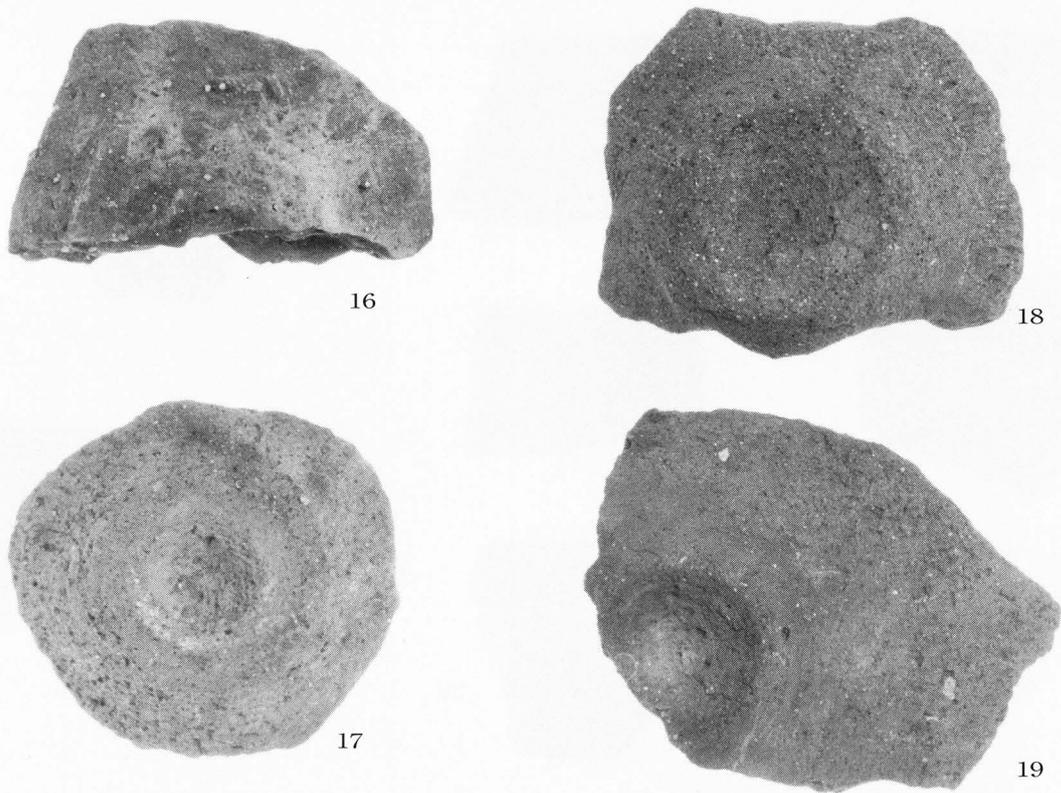
第3層出土浅鉢（1・3・4）深鉢（2）



SK2出土浅鉢（5）第3層出土深鉢底部（6）

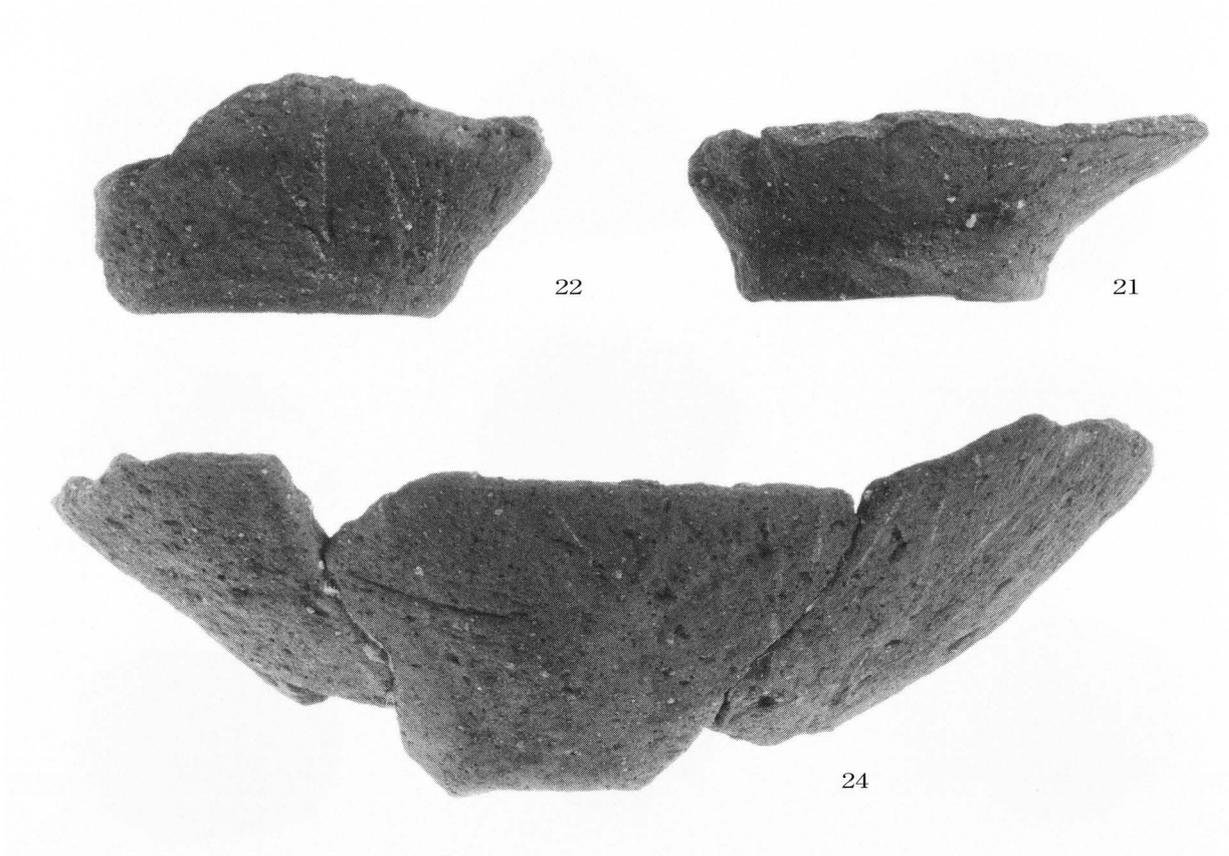


第3層出土深鉢底部 (7~15)

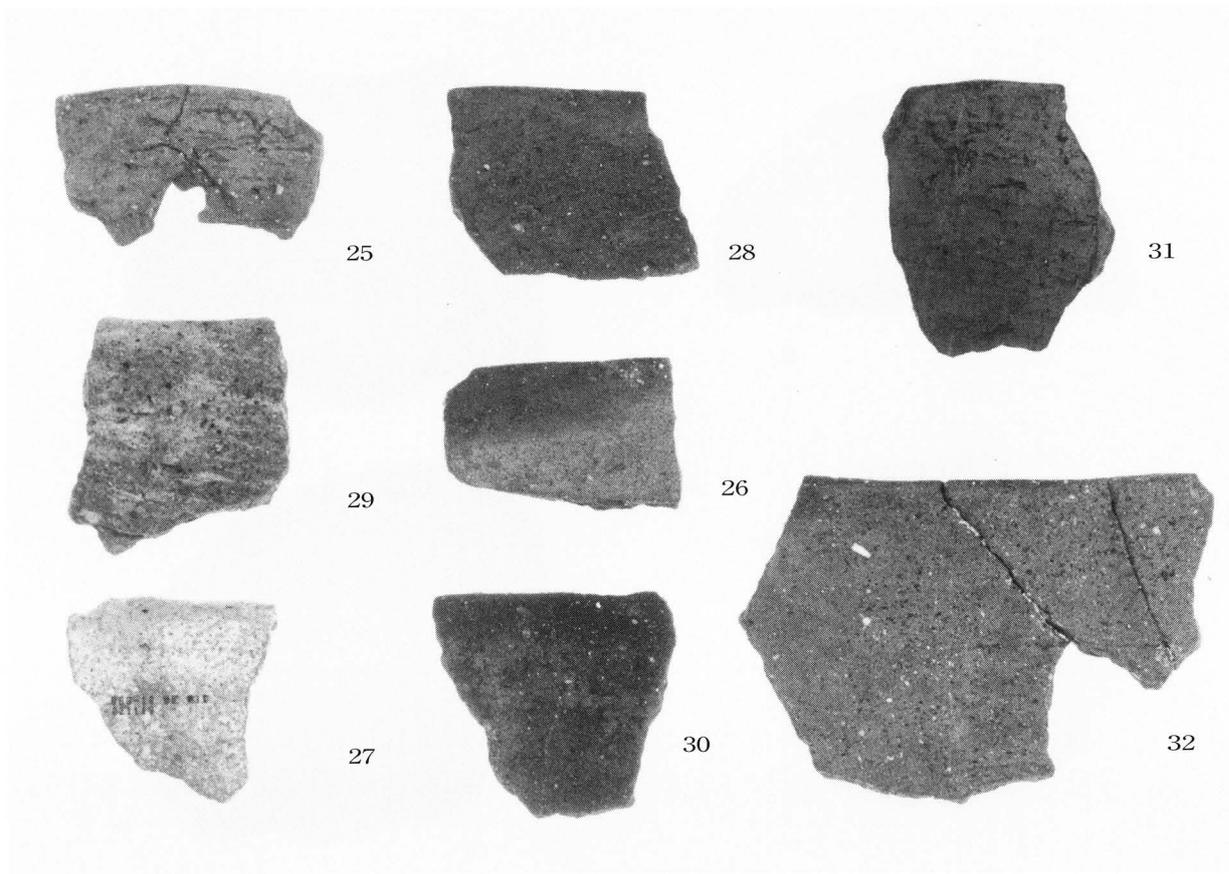


第3層出土深鉢底部 (16・18・9) 第4層出土深鉢底部 (17)

図版8 馬場川遺跡第13次調査 遺物

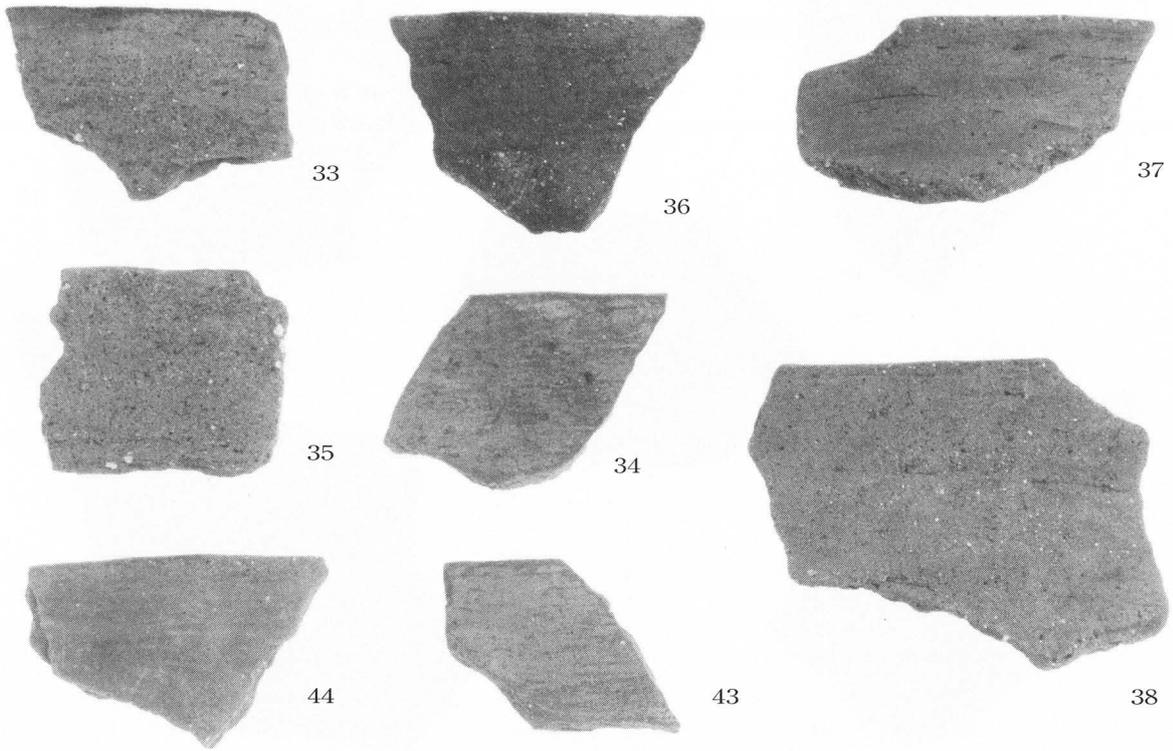


第3層出土深鉢底部 (22・24) 第4層出土深鉢底部 (21)

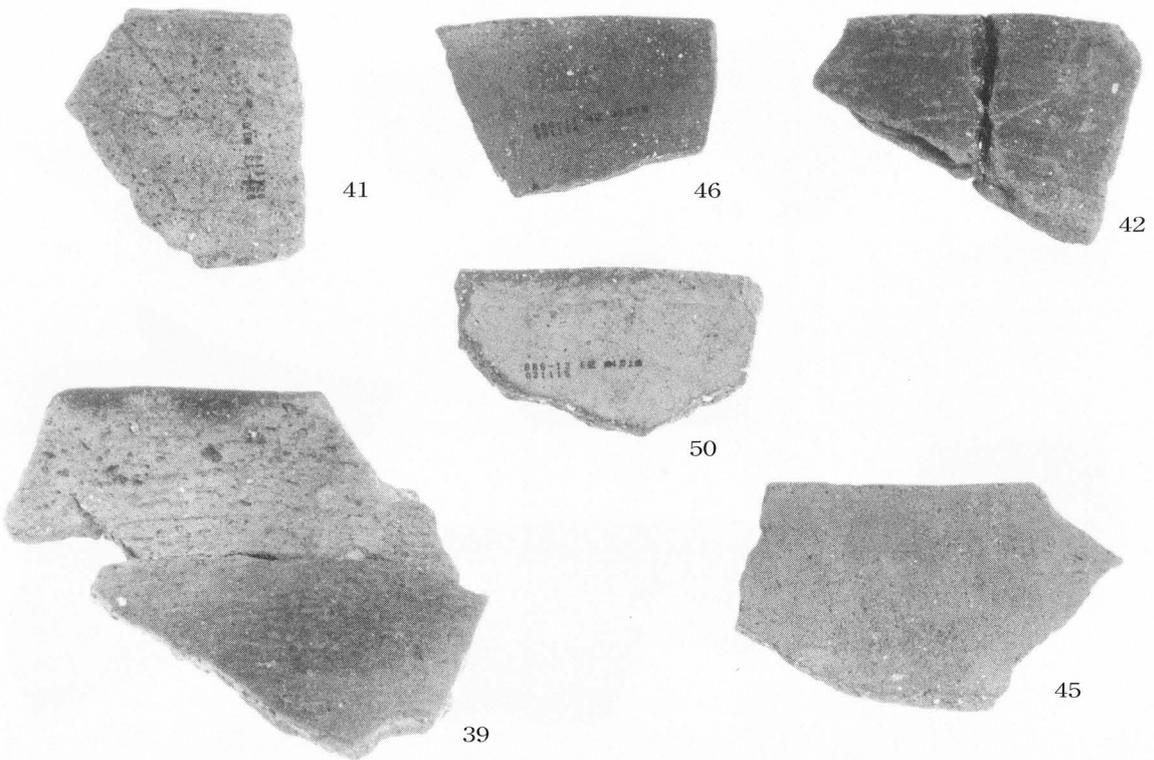


第3層出土深鉢 (25~30・32)、浅鉢 (31)

図版9 馬場川遺跡第13次調査 遺物



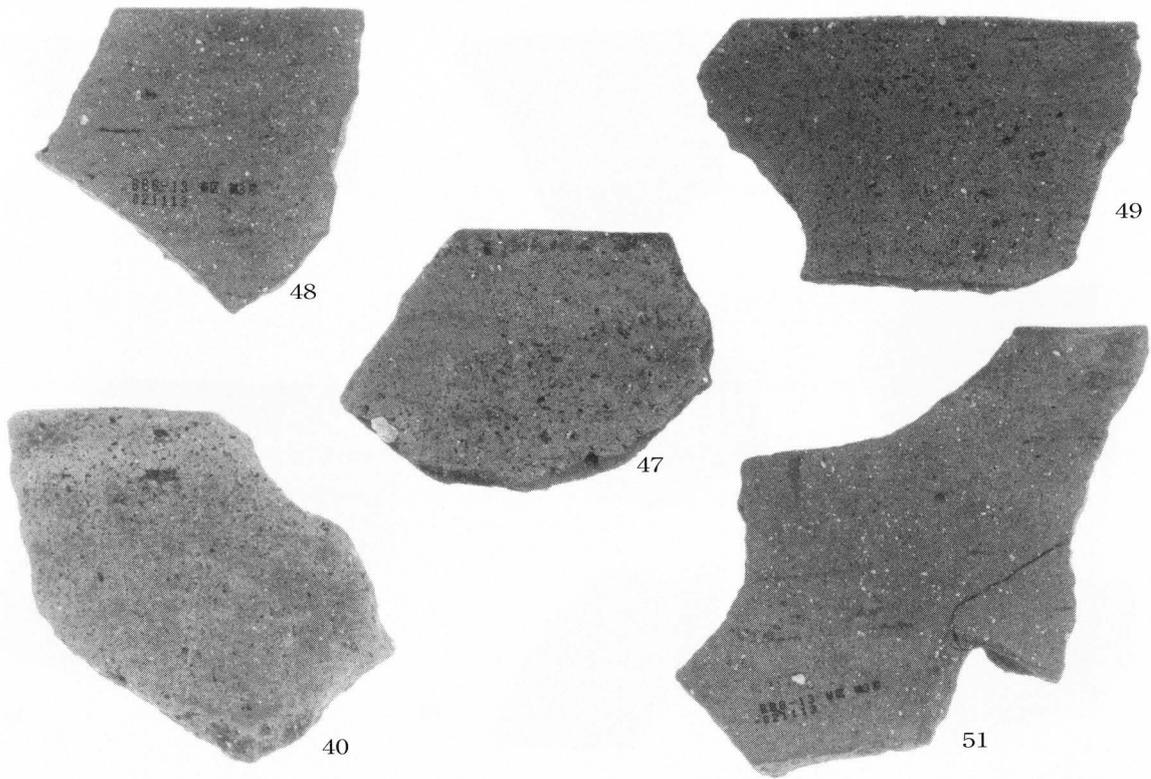
第3層出土深鉢 (33~38・43・44)



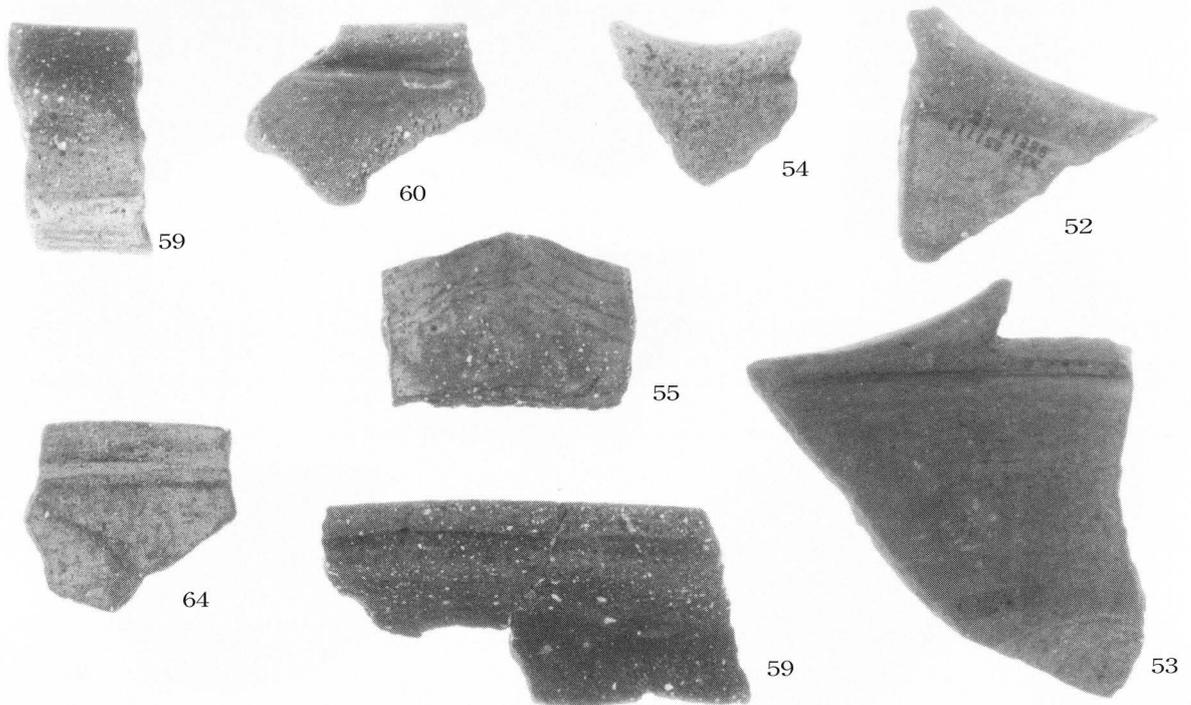
第3層出土深鉢 (39・41・42・45・46) 第4層出土深鉢 (50)

図版10

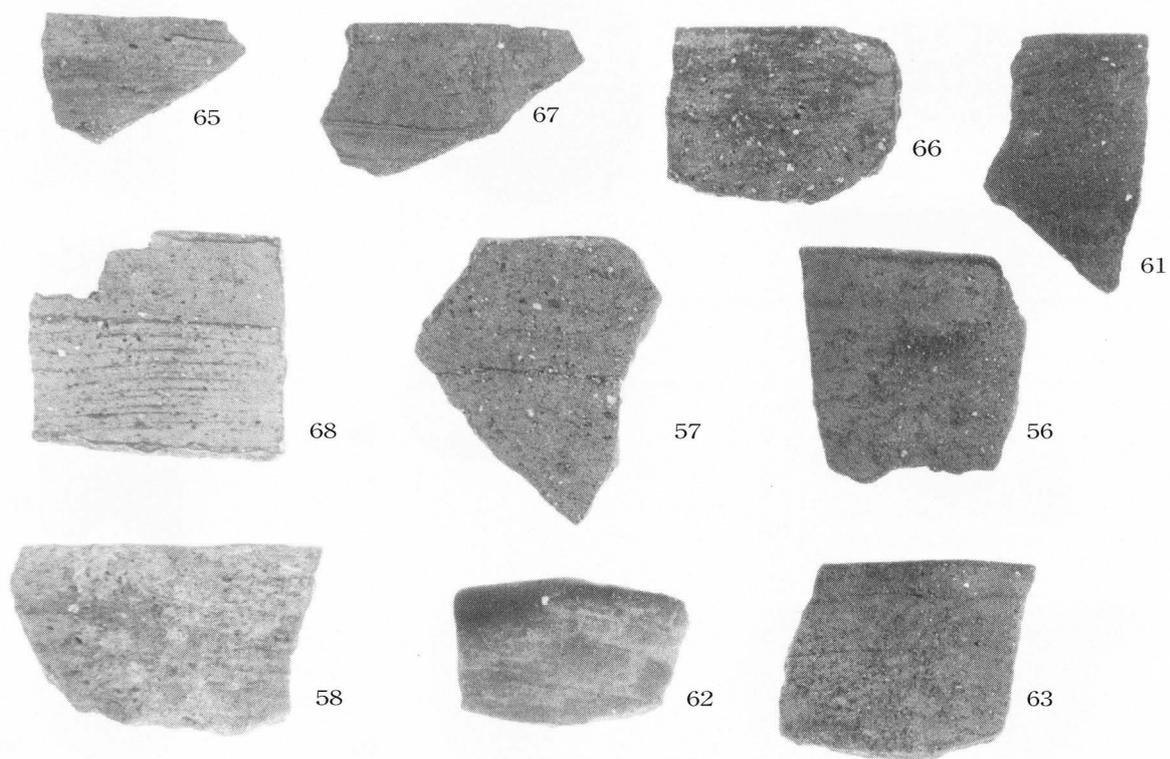
馬場川遺跡第13次調査
遺物



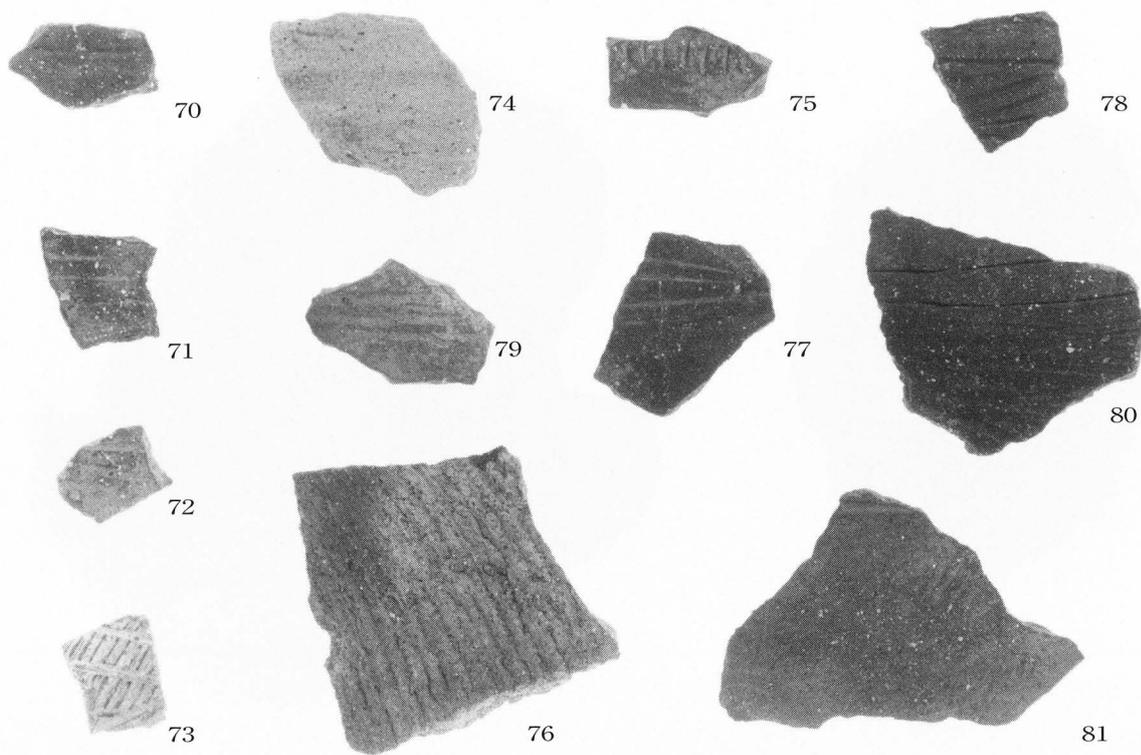
第3層出土深鉢 (40・47~49・51)



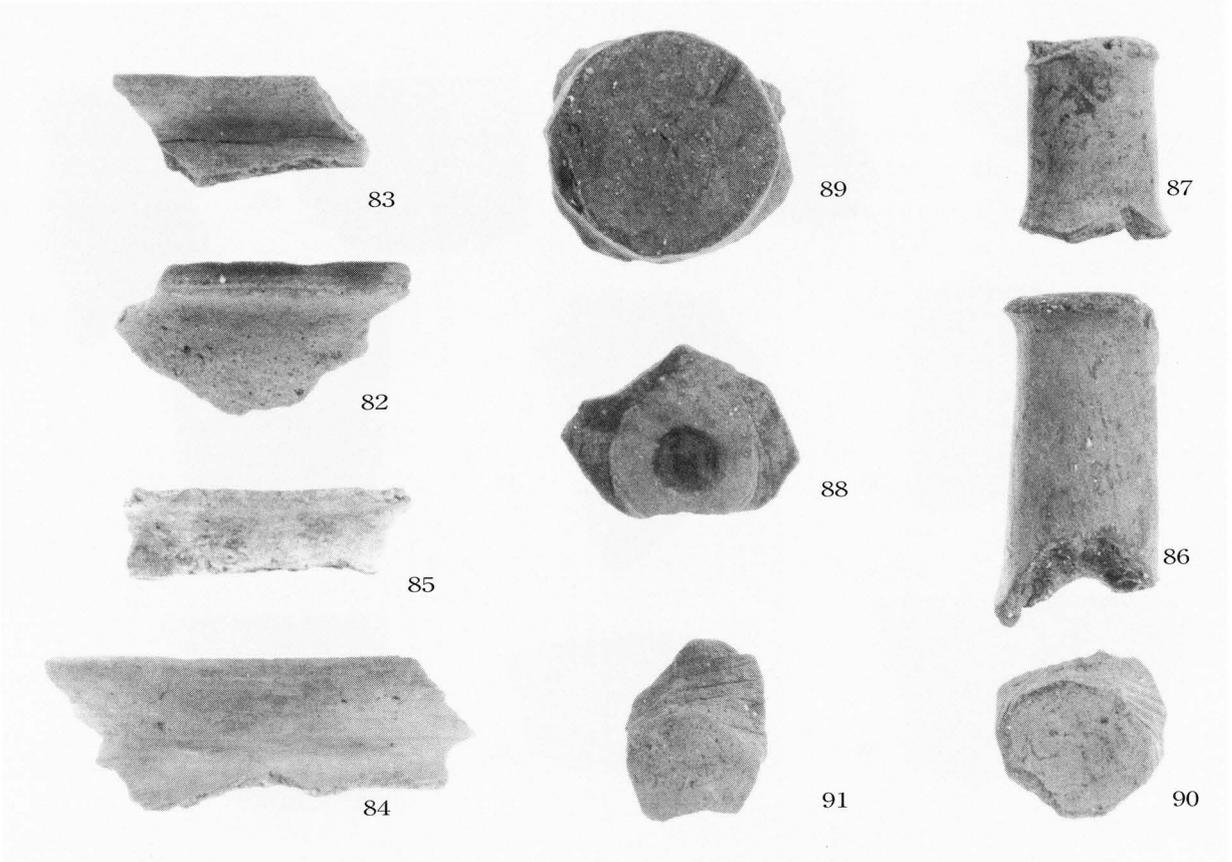
第3層出土浅鉢 (52~55・59・60・64)、深鉢 (69)



第3層出土浅鉢 (56・57・61~63・66・67) 深鉢 (58・65) 第4層出土深鉢 (68)



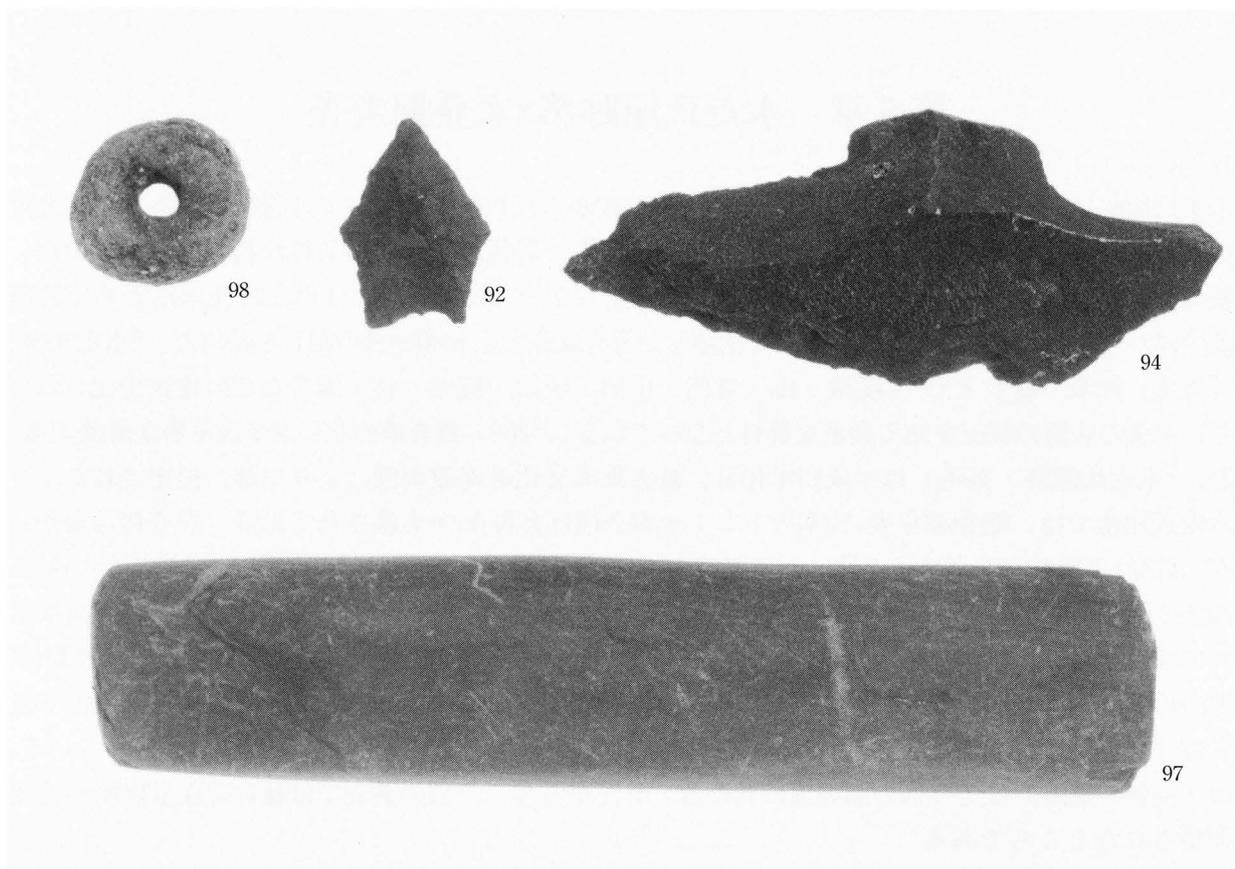
第3層出土浅鉢 (70・73~75・77・78・80) 深鉢 (76・81)



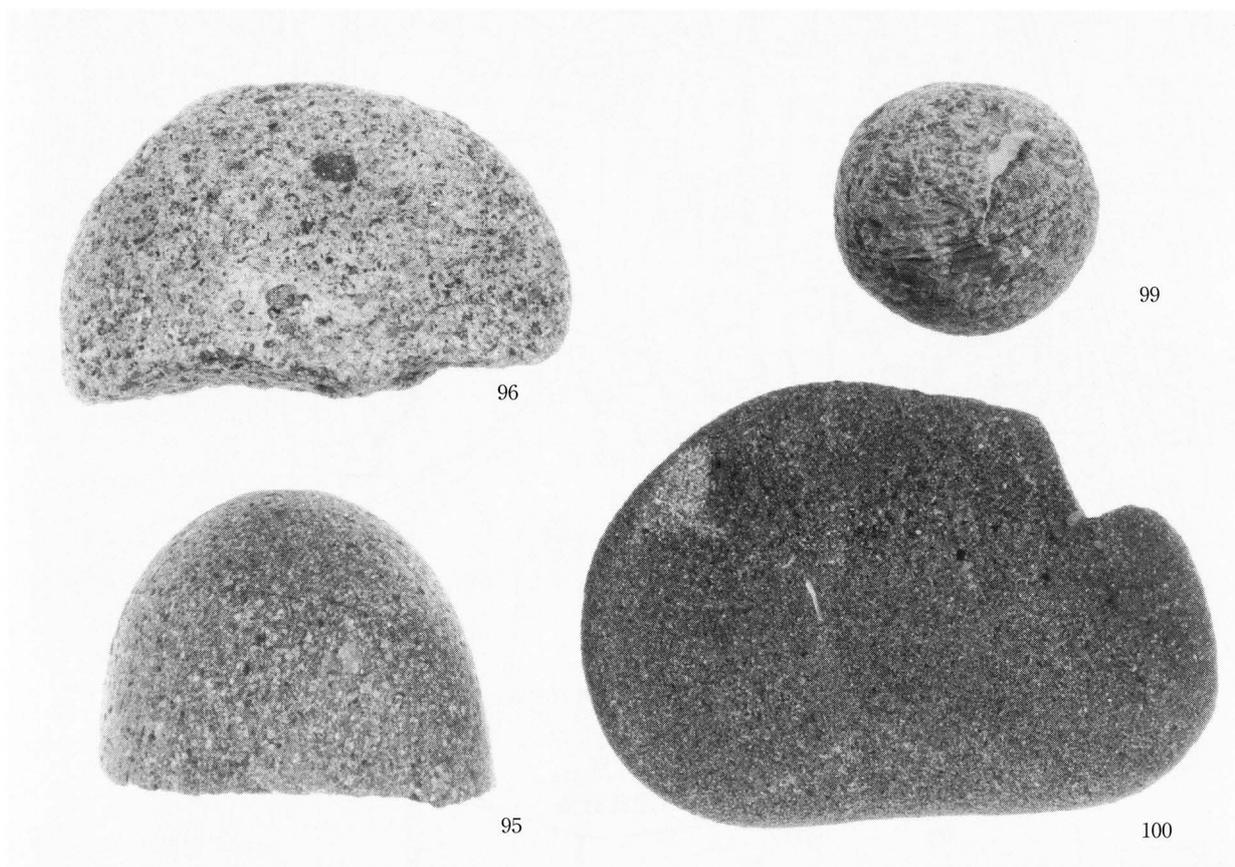
第3層出土弥生土器壺(82)、甕(83・84)高坏(86・87)甕底部(90・91)SK1出土甕(85)



第3層出土焼土塊



第3層出土石匙(94)、石刀(97)、土玉(98) SD2出土石鏃(92)



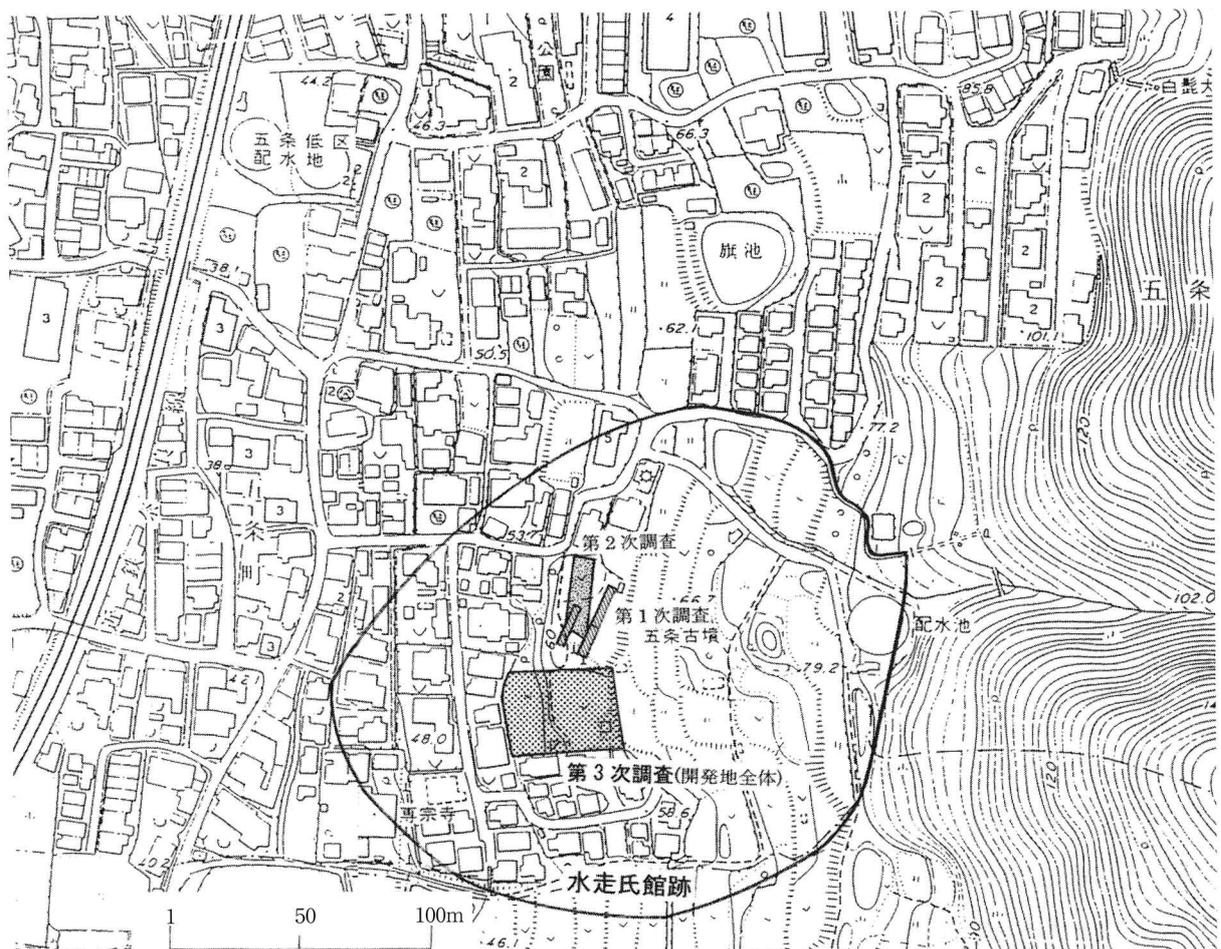
第3層出土磨石(95・96・99)、石皿(100)

第6章 水走氏館跡第3次発掘調査

1) はじめに

水走氏館跡は、東大阪市五条町に所在する平安時代から江戸時代にかけての居館跡である。東大阪市内では128ヶ所の埋蔵文化財包蔵地があるが、その中で居住した氏族の名称が判明しているのは、善根寺町6丁目の足立氏館跡と、水走氏館跡の2ヶ所に過ぎない。水走氏は平安時代末期から室町時代前半にかけて東大阪・八尾・大東にまで活躍した有力豪族で、枚岡神社の祠官を勤めた。『水走文書』に「五条 屋敷一所」として(寝)殿・廊・惣門・中門・土屋・厩屋・倉・雑舎などの建物が記されており、土豪の居館の状況を知る貴重な資料となっている。今回の調査地の北に水走氏墓塔が隣接する。なお、「水走氏館跡・墓塔」は平成13年10月、東大阪市文化財保護条例により史跡に指定された。

水走氏館跡では、昭和48年度に2本のトレンチ調査(第1次調査)が実施されて以降、調査例はなかったが、昨年(平成13年)1月から2月にかけて今回開発地の北側に位置する共同住宅建設に伴い第2次調査が実施された。第1次・第2次調査の結果、室町時代後半以降の遺構は確認されたが、文献諸資料に頻出する鎌倉期の遺構は確認されていない。むしろ、調査地の西側で近世期に大規模な整地(屋敷地の再編)が行われた結果、鎌倉期の遺構が滅失した可能性が考えられている。第2次調査報告で報告者は「中世期の館の中心部については南側の畑地など近隣の場所に求められる」と指摘している。この「南側の畑地」こそ今回の調査地にあたる。したがって、今回の調査では鎌倉時代遺構面の追究が期待されたところである。



第1図 調査地位置図

平成14年3月、東大阪市五条町1320-2番地ほか5筆において、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人開発主から提出された。宅地造成工事終了後の建築工事については、開発地一帯に大規模な盛土工事を施し、地下の埋蔵文化財には支障ないと考えられた。いっぽう、開発地は大きな傾斜面があり擁壁工事を隣地境界に施工する内容となっていた。東大阪市教育委員会では、擁壁工事箇所での埋蔵文化財の状況を把握するため確認調査が必要な旨、届出者に通知した。確認調査は平成14年3月26日と4月18日に実施した。調査の詳細は別記のとおりで、鎌倉時代の土坑状遺構を検出するなど大きな成果を得たが、遺構検出箇所は幅1m以下の下水管理設部であり、遺物包含層は隣地境界にいたる崖面に堆積した二次堆積層であったため、工事の実施を了承しつつ、宅地造成工事の期間中全てに立会調査を実施することで双方合意した。

2) 確認調査の概要

3月26日に、下記の段Ⅰを対象に1.5m×4.0mの東西トレンチを2ヶ所設定して調査を実施した。東トレンチでは、地山層の傾斜崖面に中世期の遺物包含層を検出した。崖面のラインに沿って遺物包含層が堆積し、また遺物包含層自体がシルト質土層ないし細粒砂層で構成されるため東側上面からの流れ込みによる堆積層と考えられた。西トレンチでは、中央部地表面下0.5mで黄灰色粘土質シルトないしシルト質細粒砂を埋土とする土坑状遺構を検出した。土坑内の埋土は炭化物を多量に含み、中世期の土師器皿が3枚重なった状態で出土した。

4月18日に、段Ⅰ・Ⅲを対象に1.5m×2.5mのトレンチを4ヶ所隣地境界の崖面(擁壁工事箇所)に設定した。1回目の確認調査とは時日を要しているのは、当該段Ⅲには花卉が植わっており、調査ができなかったことによる。段Ⅲ南端崖面のトレンチ以外では、すべて地山層の傾斜面に沿って中世期の遺物包含層を検出した。遺物包含層はいずれも中礫ないし中礫混じりの粘砂層で上記と同様、上部からの流れ込みによるものと思われた。なお、確認調査の結果に伴い、遺物包含層が検出されなかった段Ⅲ南端崖面の擁壁工事は慎重実施とし、立会調査は実施していない。

3) 立会調査の概要

① 擁壁工事

擁壁築造に伴い、現況の畑地崖面の掘削作業に立会した。出来得る限り遺物の採集につとめたほか、壁面地層の略測を行なった。崖面下部は近現代の開墾・耕作作業のため大きく攪乱されているため遺物採集や壁面略測は平坦地側に近い壁面を中心に実施した。掘削工事の箇所ごとにA～D地区と仮称する。また、開発地には3段の畑地がある。中央の段地を「段Ⅰ」、段Ⅰの東側段地を「段Ⅱ」、段Ⅰの西側段地を「段Ⅲ」と便宜的に呼称する。擁壁工事の立会調査は、平成14年4月10日・15日・23日・26日・5月27日・28日の6日間実施した。

A地区 水走氏の墓塔すぐ南側の東西トレンチを呈する。段Ⅰの北端部。東端のB地区境から西へ掘り進めた。工事掘削深度は約1m。A地区のほとんどは表土直下に地山層が露出していた。西端部で鎌倉時代の土坑状遺構を検出した。遺構内から瓦器?と土師器皿が一括出土した。壁面観察から、土坑状遺構は一辺約2.6m、深さ0.5mを確認している。断面形はW字形をなし、大土坑と小土坑が切り合うことが考えられるが、切り合いは不明である。遺物は南側の大土坑から出土したものが多い。

B地区 A地区東端から段Ⅱの西側にかけての南北トレンチを呈する。工事掘削深度は約4m。A地区東端境から掘削を行なう。B地区の北東角では表土層と地山層の間に灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質細粒砂が介在し、そこから微量の後期弥生土器、多量の古墳時代の土師器・須恵器が出土した。ただ近世期の染付碗片も含むことから、江戸期に包含層ごと再堆積した層、すなわち客土層であることが判明した。客土層はごく一部に分布するにとどまり、以南部では約30～40cmの表土(現耕土)

いたため、立会調査の対象から除いた。C地区北側から掘削を開始した。北側から中央付近までは表土直下地山層で遺物の出土は目立たなかったが、中央やや南側から、古墳時代の遺物が集中して出土した。とくに円筒埴輪が含まれており注目される。遺物集中箇所は、

- 第1層 表土(現耕土) 第2層 床土 第3層 5Y3/2オリーブ黒色粘質砂
 第4層 5Y3/2オリーブ黒色砂混粘土 第5層 10YR3/2黒褐色シルト質粘土 であった。

壁面観察の結果、第5層には中量の炭化物が含まれ、そこから古墳時代遺物が出土している。工事の掘削深度が第5層の下部に及ばないため詳らかにしないが、この層はプライマリーな遺物包含層の可能性があり、また遺構の埋土とも考えられる。

D地区 段Ⅰの南部にわたる東西トレンチである。工事の掘削深度は約2.7mに及ぶ。段Ⅰの平坦地に近い側、北壁断面の精査を中心に調査を行なった。精査の結果、段Ⅰの造成は少なくとも2時期にわたり、各時期の石垣が検出された。古段階(近世期を遡らないと考えられる)の石垣造成に伴う地山の傾斜ラインで中世期の平瓦をはじめ羽釜など中世土器が出土した。古墳時代の遺物も混在するようである。地山の傾斜ラインは東に行くに従い急激に上昇し、遺物の出土もほとんど見られなくなった。このため東側は慎重工事とした。

② 位置指定道路下の下水管理設工事

雨水管と污水管の2本があり、雨水管は平成14年9月21日に、污水管は9月27日に立会調査を実施した。やや離れた箇所でも断面観察を適宜行なった。

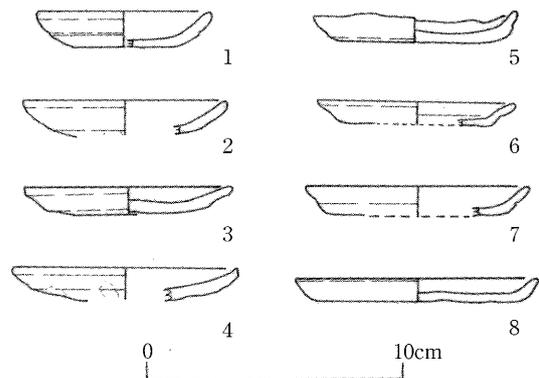
雨水管 工事の掘削幅は0.7m、深度は地表面下1.3m～1.6mであった。北側の箇所で、地表面下0.55mで中世期の遺物包含層を検出した(断面h)。この地点は前記の3月26日確認調査の土坑状遺構検出箇所に近接し、かつ検出の層準もほぼ同一である。このことから、付近一帯には中世期の遺構面が広がることが予測される。いっぽう、南側では地表面直下の耕作土の下部に別の耕作土が続き、その下は地山層となり、遺物包含層は見られなかった。

污水管 工事の掘削深度は0.7m、深度は1.3m～1.6mであった。L字状に屈曲する東端部では地表面下0.3mで地山層が露出する。その後地山層のラインは西側に大きく傾斜し、屈曲部で円筒埴輪多数のほか、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土した。

4) 出土遺物

① 確認調査土坑状遺構出土遺物

実測可能な土師器皿が8点出土した。器形は、底部から曲線的に立ち上がる器形のもの(1～5)、底部と体部の境で屈曲するもの(6～8)とがある。口縁端部を面取りし、外面は口縁部をヨコナデ、底部はユビオサエまたはナデている。内面は口縁部ヨコナデ、底部はナデによって仕上げている。色調は基本的に全て黄橙色である。口径は8.0～9.4cm、器高は1.0～1.5cmである。12世紀後半に位置付けられる。

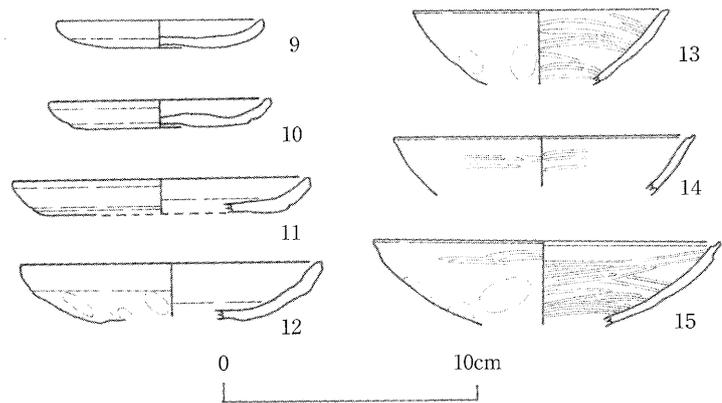


第3図 確認調査土坑状遺構出土遺物実測図

② A地区土坑状遺構出土遺物

実測可能な土師器皿4点、瓦器碗3点が出土した。土師器皿(9～12)上記遺構と同様、土師器皿は底部から曲線的に立ち上がる器形のもの(9・12)、底部と体部の境で屈曲するもの(10・11)とがある。口縁端部を面取りし、外面は体部をヨコナデ、底部はユ

ビオサエまたはナデ仕上げである。内面は口縁部ヨコナデ、底部ナデによって仕上げている。色調は全て黄橙色である。9は、口径は8.0cm、器高1.1cm。10は口径8.4cm、器高1.1cm。11は口径11.4cm、器高1.4cm。12は口径11.6cm、器高2.2cmを測る。結果、口径は8.2cm前後、器高1.1cmと口径11.5cm前後で器高1.7cm前後の2規格に分けられる。12世紀後半に位置付けられる。



第4図 A地区土坑状遺構出土遺物実測図

瓦器碗(13~15) 和泉型(13)と大和型(14・15)がある。13はハの字形を呈す。外面にユビオサエが残り、内面はまばらに渦巻状暗文が施される。口径10.0cm。14もハの字形を呈し、口縁部内面に段を持つ。内外面ともに暗文が施される。口径11.6cm。15は、浅い碗形を呈し口縁部に段をもつ。外面は体部上半に暗文を施し、下半はユビオサエが残存する。内面は比較的密な渦巻状の暗文が施される。口径13.6cm。3点とも13世紀に位置付けられる。

③ 各遺物包含層出土遺物 (第5図)

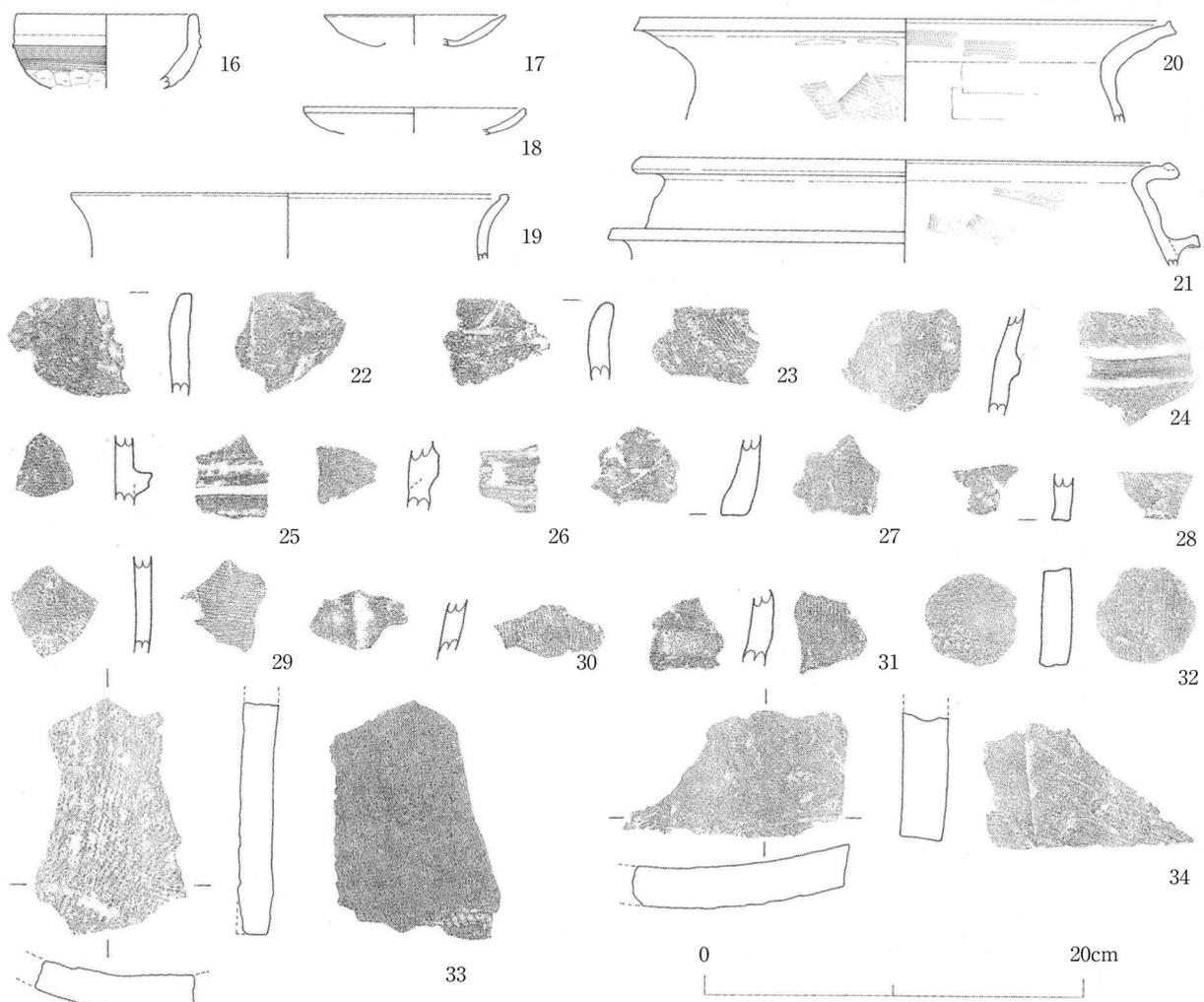
確認調査や擁壁工事立会調査で出土した遺物で、遺構に伴わない遺物を一括して下記に報告する。須恵器(16) 丸い器形で口縁端部に面をもつ碗である。口縁部は回転ナデ、体部にカキメを施した後、体部下半を手持ちでケズリを行っている。5世紀後半に属する。4月18日の確認調査で出土。

瓦器(17) ゆるやかに立ち上がる小皿。口径9.4cm、器高1.7cm。内外面ともナデ調整である。3月26日確認調査東トレンチ内出土。

土師器(18~21) 18は口縁端部を強くナデることによって面をもつ皿である。外面はナデ、内面もヨコナデによって仕上げている。口径11.6cm。3月26日確認調査西トレンチ内出土。19・20は甕である。19はやや外反して口縁部が立ち上がる。内外面ともにナデ調整である。口径が23.0cm。C地区出土である。A地区出土。20は頸部から緩やかな屈曲を持って外反する。口縁端部に面をもつ。体部外面上半は斜め方向のハケメ(10条/cm)、口縁部内面はユビオサエが残るが横方向のハケメ(8条/cm)、体部内面は横方向のイタナデを施す。口径28.0cm。C地区出土である。21は羽釜で口径28.0cm。口縁端部を内側に折り返す。大和型である。外面はナデ、内面はハケを施す。外面に煤が付着する。13世紀後半~14世紀初頭に属する。3月26日確認調査西トレンチ内出土。

埴輪(22~31) 埴輪はA地区(22・27・29)、C地区(24・25・28・30・31)、D地区(23・26)で出土した。色調は橙色、浅黄橙色を呈する。22は口縁部で、内外面ともにヨコハケ(8条/cm)を施す。23は口縁部で、外面に斜め方向のハケ(6条/cm)、内面にイタナデを施す。24は幅の広い低いタガをめぐる。外面は斜め方向のハケ(10条/cm)、内面はナデを施す。25は円形の透かし孔の下にタガをめぐる。内面は横方向のナデ仕上げである。26は低いやや幅の広いタガをめぐる。内面は横方向のナデ仕上げである。27は内外面とも摩滅のため調整不明である。28は外面に10条/cmの斜め方向のハケを施す。内面は摩滅のため不明である。30は外面をタテハケ(8条/cm)で、内面に縦方向のユビナデを施す。31は外面にタテハケを内面にナデを施す。

土製品(32) 陶器を再加工したと考えられる土製円盤である。外面をハケ(11条/cm)、内面を



第5図 各遺物包含層出土遺物実測図

ナデで仕上げている。C地区で出土。

瓦(33・34) とともに平瓦で33は凸面にタタキのちイタナデを施し、凹面に(4本/cm)の布目の圧痕を残す。凸面はよくいぶされているのに反して、凹面は荒れている。布目の密度からは古い様相を示すが、胎土的には新しい様相を示す。34は凸面、凹面ともにイタナデを施す。一部に煤が付着しており、2次焼成を受けている。ともにD地区出土である。

④ 下水管理設工事出土遺物(第6図)

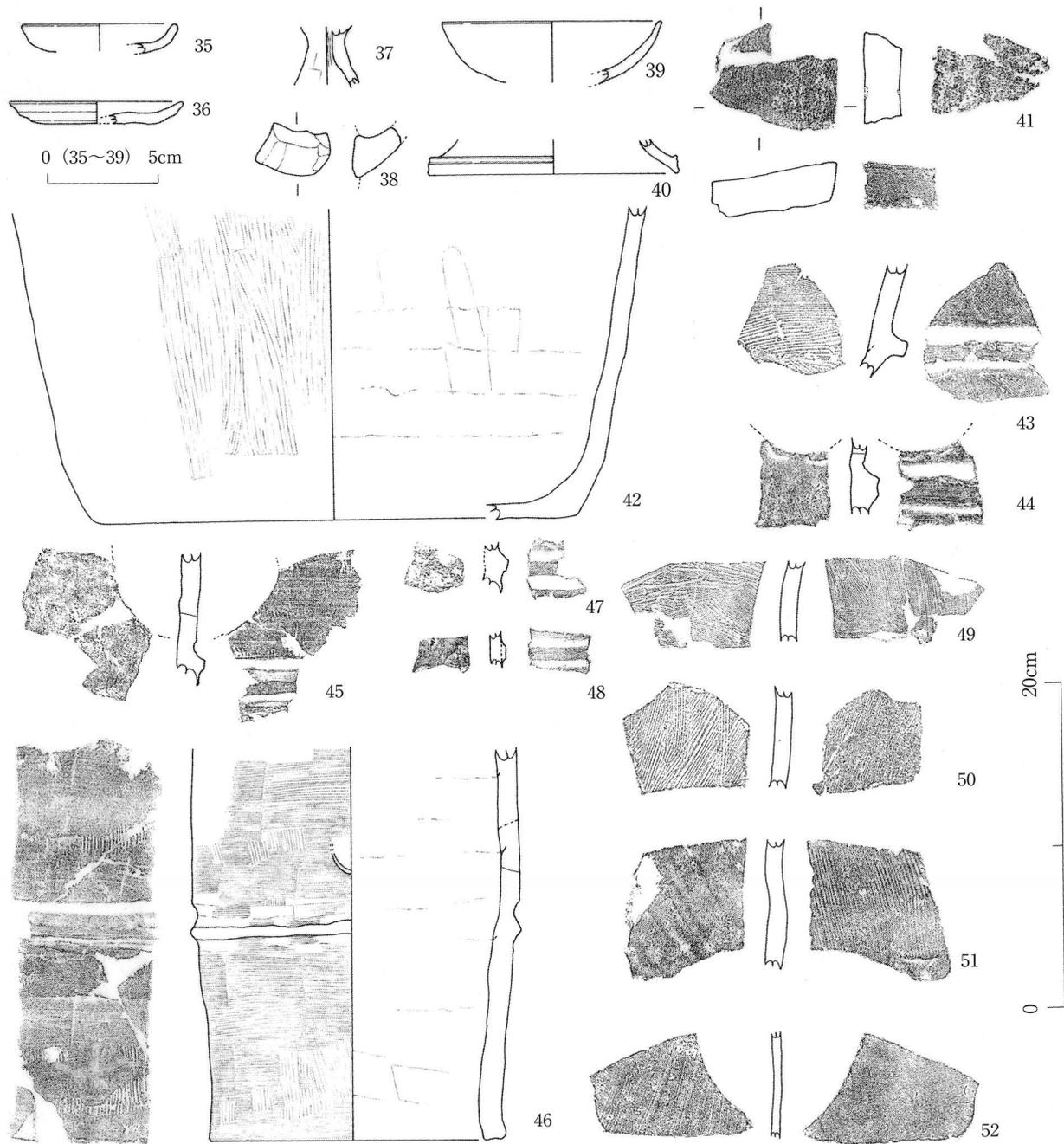
雨水管・污水管の工事で出土した遺物を下記に報告する。

土師器 皿(35・36) 35は内外面とも口縁部ヨコナデ、底部ナデで仕上げる。口径6.8cm。36は外面を2段ナデ、内面を口縁部ヨコナデ、底部をナデにより仕上げる。口径7.6cm、器高1.0cm。35・36とも污水管工事出土。高杯(37・39) 37は脚部で内外面ともナデ、内面にしぼり痕が残る。39は碗形の杯部で口縁端部を丸く仕上げる。口径13.0cm。2点とも橙色を呈する。ともに雨水管工事出土。把手(38) 鍋の把手で、先端が欠けている。橙色を呈する。

須恵器(40) 高杯の脚部で段を持ち、段上部に凹線をめぐらす。底径14.8cm。雨水管工事出土。

平瓦(41) 凸面は工具によるナデ、凹面はナデ。厚さ2.4cm。污水管工事出土。

陶器(42) 甕の底部。外面に縦方向の粗いハケを施し、底部付近はヨコナデで仕上げる。内面に輪積み痕が残る。底径は約29.4cm。



第6図 下水管理設工事出土遺物

埴輪 (43~52) 43は朝顔形埴輪、それ以外は円筒埴輪である。43は朝顔形埴輪の頸部である。44は円形の透かし穴をもつ。外面に縦方向のハケ (9条/cm)、内面に横方向のハケ (7条/cm) を施す。46は底部径9.1cm。上下を指で強くなでることによって作り出した低いタガが1段めぐり。その上に形態は不明だが透かし穴を外側から内側に穿つ。縦方向のハケ (6条/cm) のち横方向のハケ (18条/cm) である。工具を強く当てたためできた縦の条線が多く残る。48は浅いタガをもつ。49は外面縦方向のハケ (11条/cm)、内面横、斜め方向のハケ (9条/cm)、を施す。50は外面斜め方向のハケ (9条/cm)、内面縦、斜め方向のハケ (7条/cm) を施す。橙色を呈す。51は外面縦方向のハケ (6条/cm)、内面は板状工具によるナデで仕上げる。52は外面をハケ、内面を板状工具によるナデで仕上げる。43・44・48~50・52は雨水管工事出土。45~47・51は污水管工事出土。

5) まとめ

今回の調査では、宅地造成工事期間中の立会調査の中で、多くの制約を伴ったが、段Ⅰを中心とした平坦面の状況を類推できる資料を得ることができた。今回の新たな知見をまとめておきたい。

(1) 鎌倉時代の土坑状遺構を確認調査と擁壁工事A地区の西端の2ヶ所で確認した。これらの位置関係から段Ⅰ平坦面の中央やや西寄りに該期の遺構面が広がることが推定される。ただし、D地区の土層の状況から、南側への広がりとは不明である。

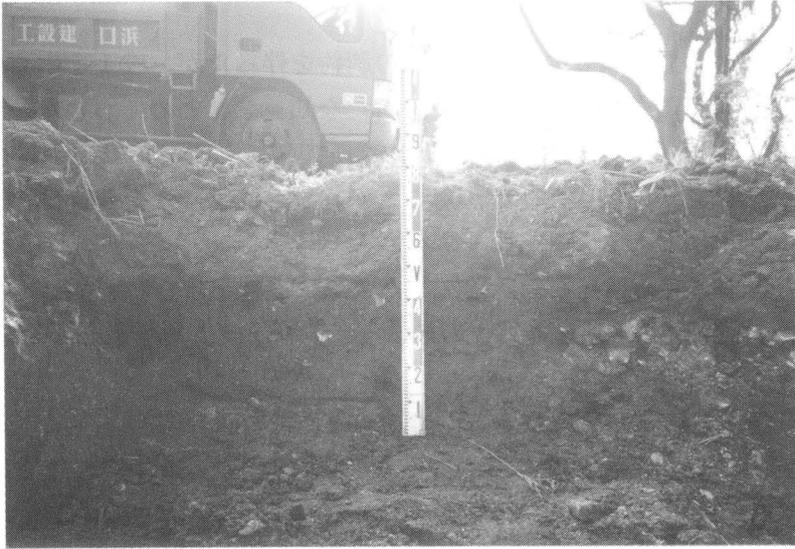
(2) C地区段Ⅱの中央西側で遺物集中箇所を検出した。前記したように遺物を含む層がプライマリーな状態を示すものかどうかは不詳である。B地区の客土層のように包含層ごと再堆積した可能性も否定できず、周辺の調査例を俟って考えていきたい。

(3) B地区の客土層は現況の里道ないし以前の里道の築造に伴うものと推定されるが、逆にいえば築造以前において当該地が凹地になっていたことを示唆する。またD地区崖面の地山層の急激な傾斜は自然地形の反映とも見られ、C地区の遺物集中箇所と併せ、北東から南西へ流下する小規模な溺れ谷が存在した可能性がある。

(4) 下水管工事箇所で、円筒埴輪が集中して出土する地点を確認した。第2次調査においても盛土層や近世前半整地土層から円筒埴輪が出土している。またC地区にも同様の遺物集中箇所があり、今回の調査地付近に古墳が築造されていたと推定される。古墳は水走氏の居館築造時に破壊を受けたことが示唆される。

【参考文献】・東大阪市教育委員会「第2章 水走氏館跡第2次発掘調査」(『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報-平成13年度-』2002年。)

図版1 水走氏館跡第3次調査 遺構



A地区西壁 (断面d)



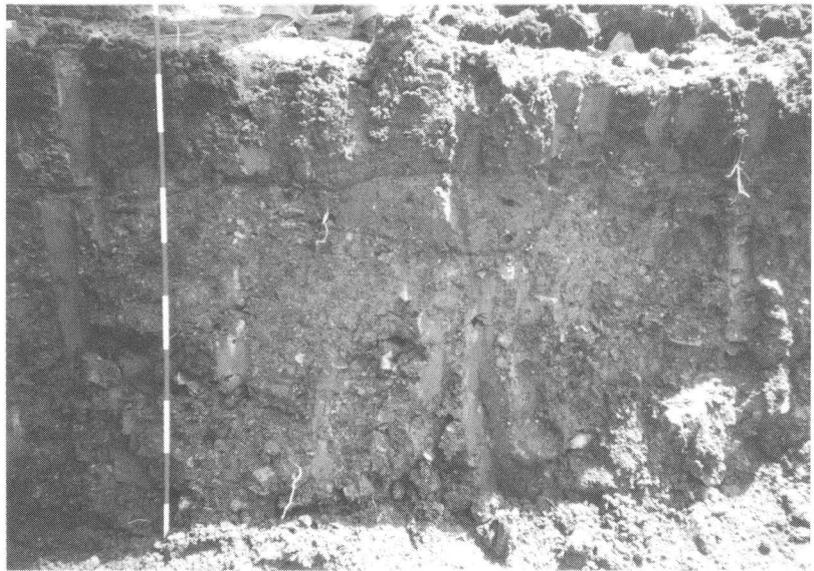
A地区南壁



B地区掘削状況 (西より)



B地区北壁 (断面b)

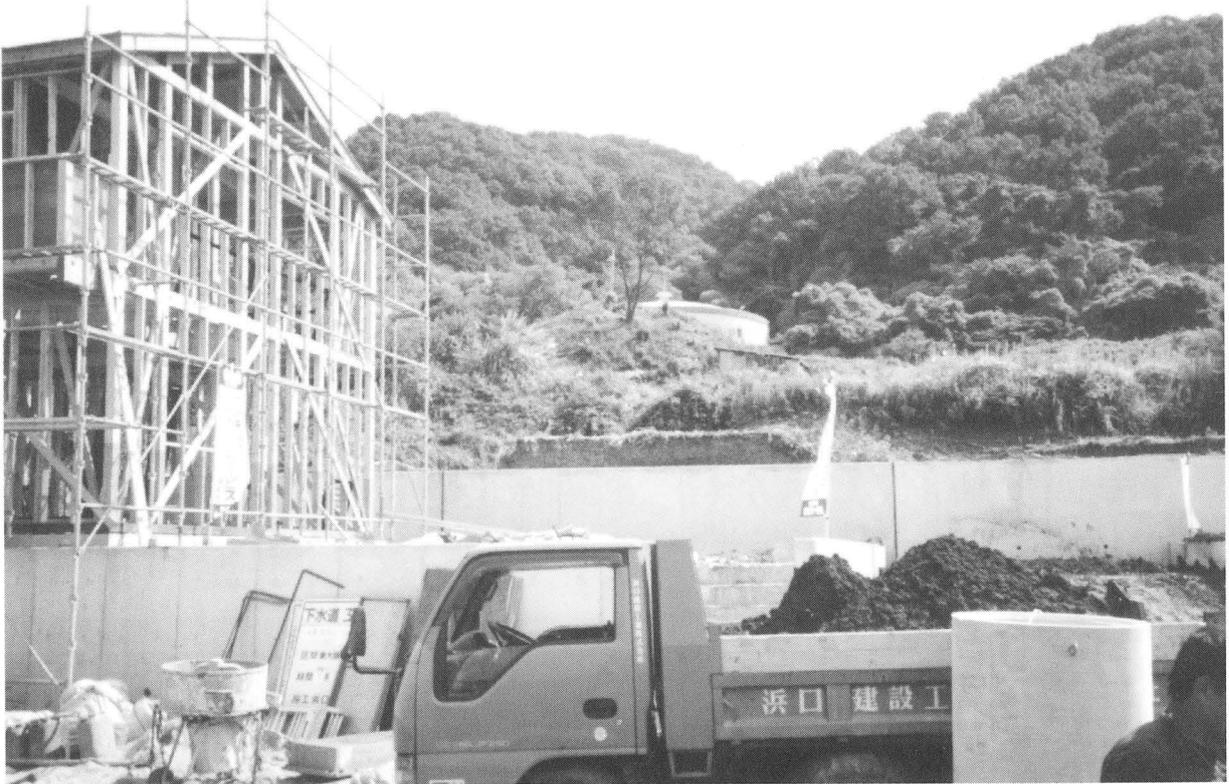


C地区東壁 (断面e)

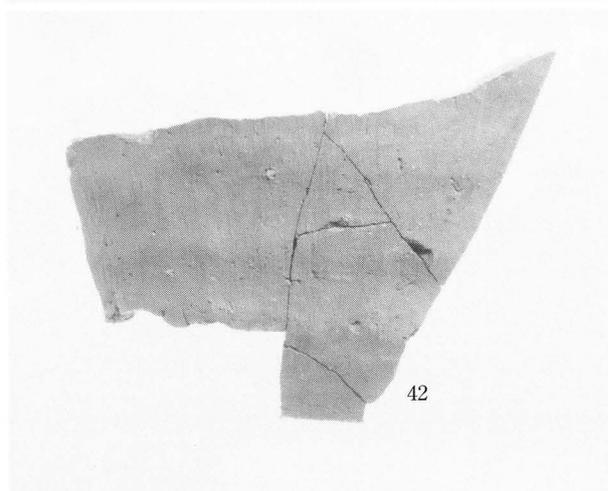
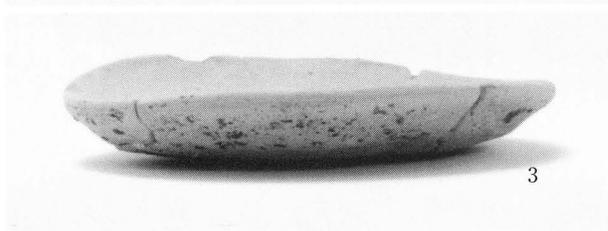
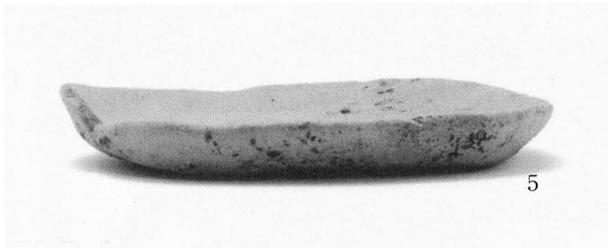


D地区東壁

図版3 水走氏館跡第3次調査 遺構・遺物



工事地より東の五条古墳を臨む

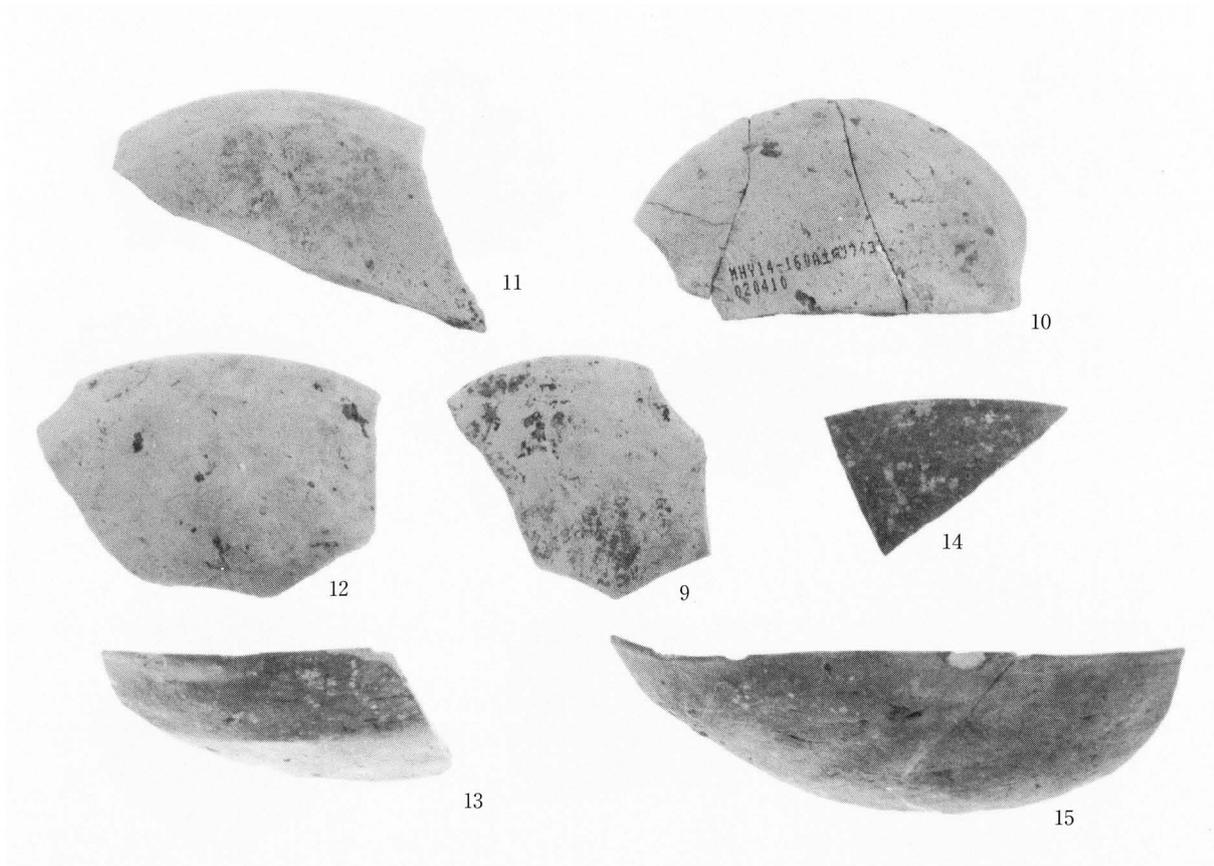


土師器皿 (3・5・8)、陶器甕 (42)、円筒埴輪 (46)

図版4 水走氏館跡第3次調査 遺物

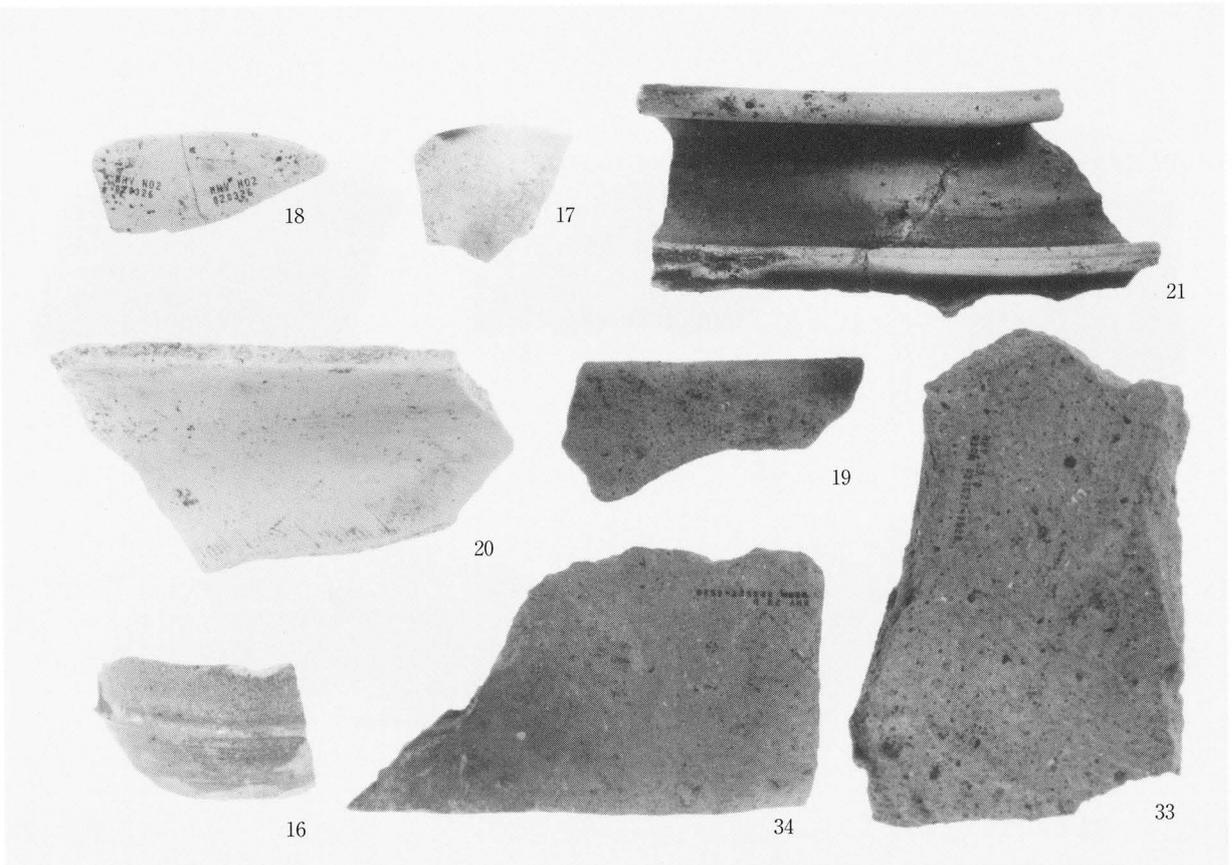


土師器皿 (1・2・4・6・7)

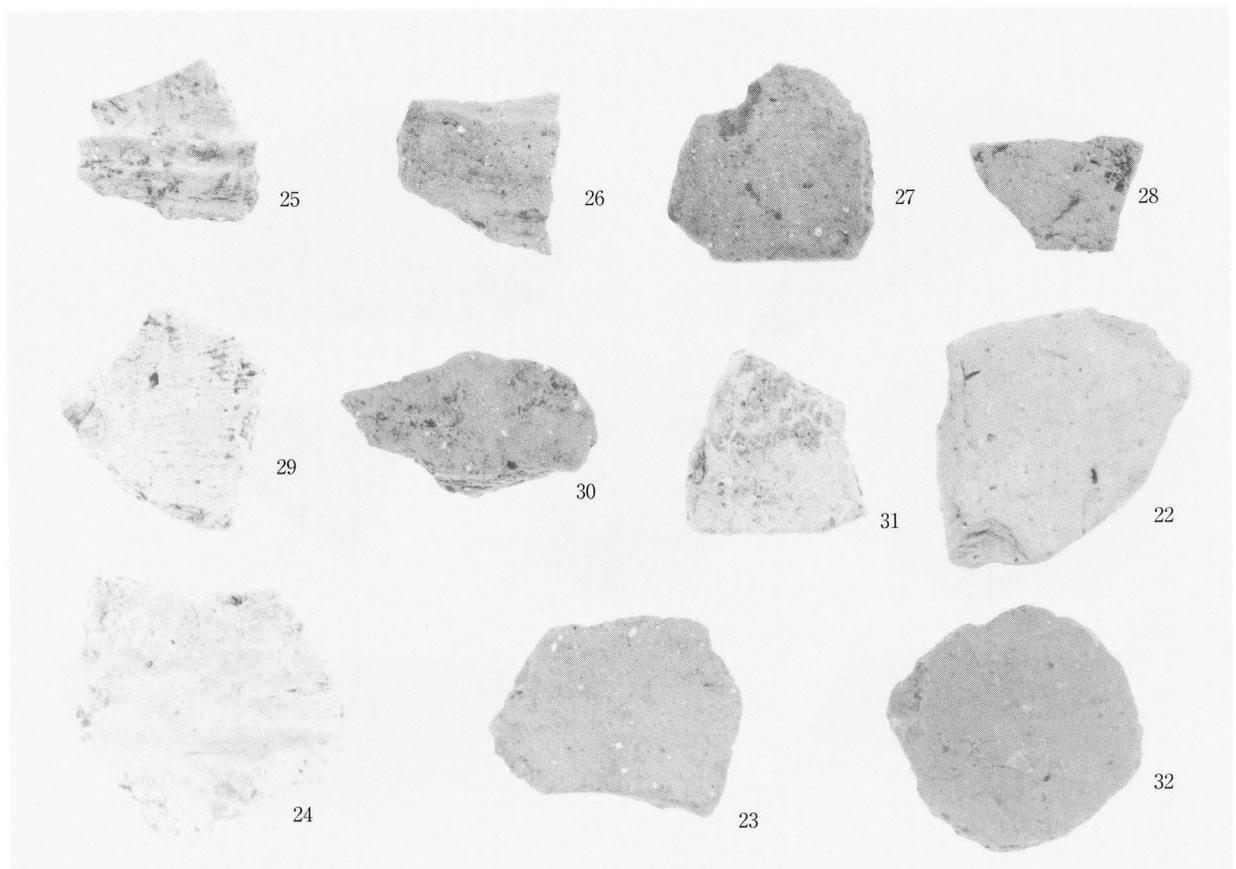


土師器皿 (9~12)、瓦器 碗 (13~15)

図版5
水走氏館跡第3次調査
遺物

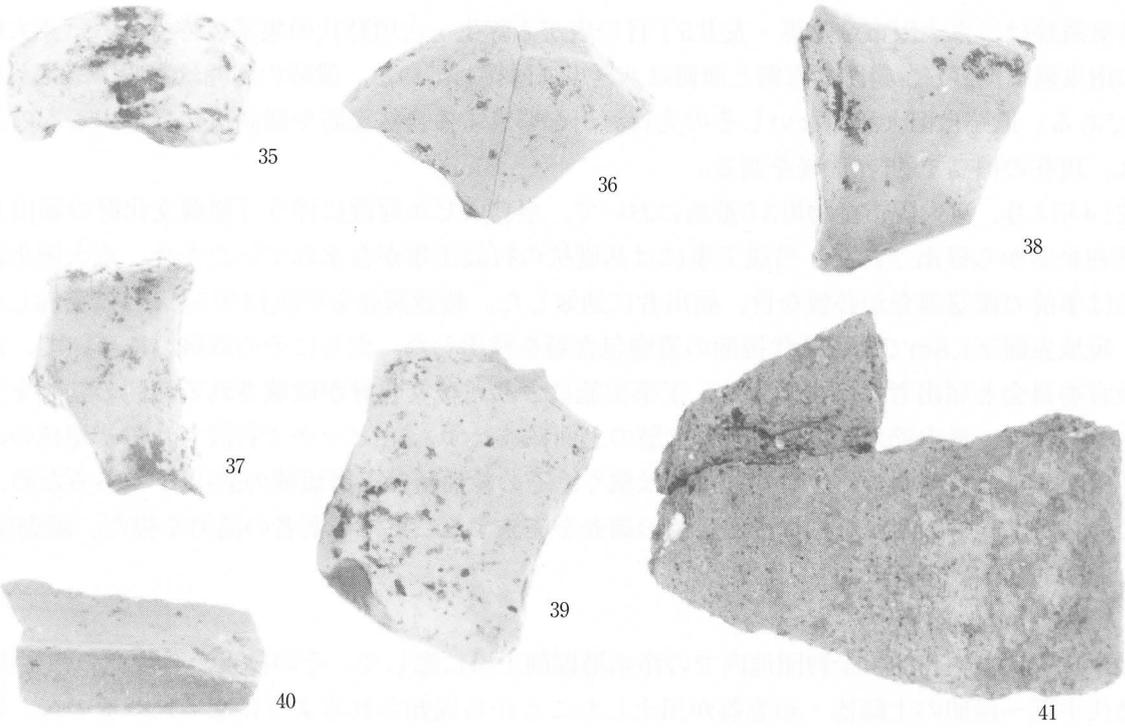


須恵器 碗 (16)、瓦器皿 (17)、土師器皿 (18)、甕 (19・20)、羽釜 (21)、平瓦 (33・34)

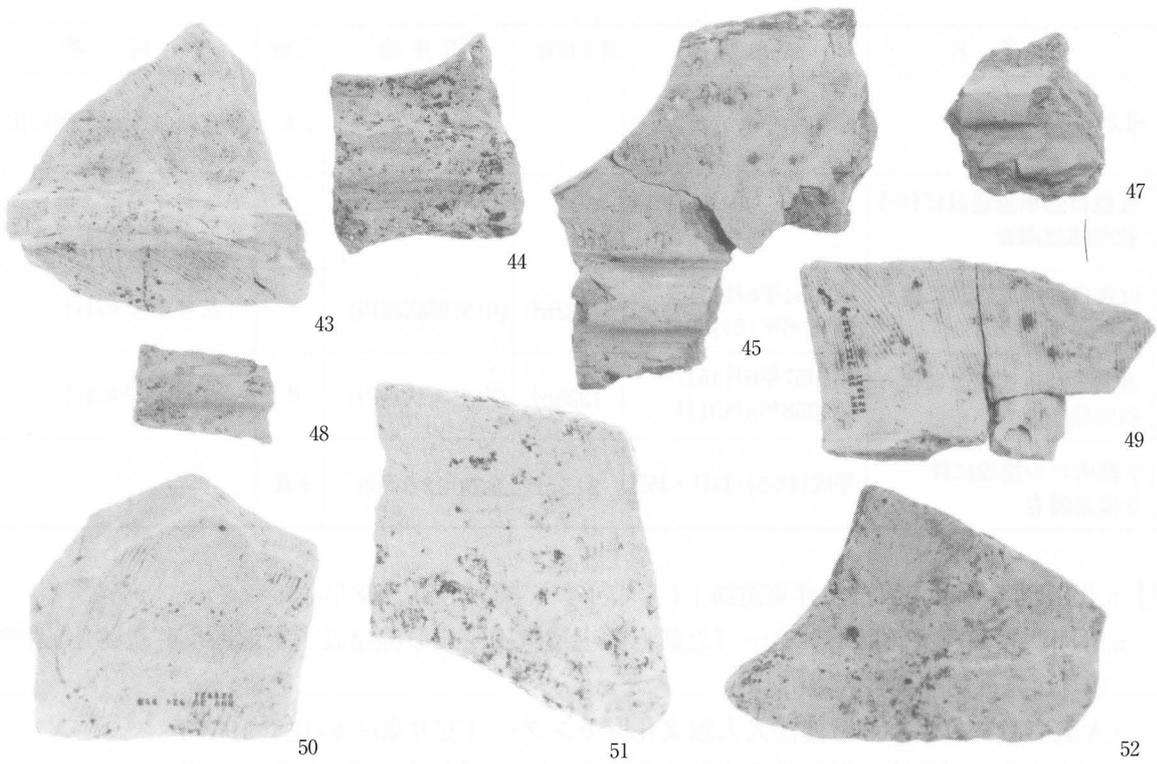


円筒埴輪 (22~31)、土製品 (32)

図版6 水走氏館跡第3次調査 遺物



土師器皿 (35・36)、高坏 (37・39)、把手 (38)、平瓦 (41)



円筒埴輪 (43~45・47~52)

第7章 友井東遺跡第5次発掘調査報告

1) はじめに

友井東遺跡は、東大阪市金物町・友井5丁目に広がる弥生～古墳時代の集落遺跡である。東大阪市西部の南東隅に位置し、遺跡の東側と南側は八尾市に隣接している。遺跡の範囲は東西、南北とも約350mである。遺跡は旧大和川ないしその先行河川が形成する自然堤防や微高地に立地するものと考えられ、現在の標高で約5m前後を測る。

平成14年4月、東大阪市金物町3-5番地において、事務所ビル建設に伴う「埋蔵文化財の届出」が一般営利企業から提出された。当該工事には基礎杭の打設工事が含まれていたため、東大阪市教育委員会は事前の確認調査が必要な旨、届出者に通知した。確認調査を平成14年5月1日に実施したところ、現地表面下1.8mで弥生時代後期の遺物包含層を検出した。直ちにその取扱いについて、東大阪市教育委員会と届出者は協議に入り、工事実施により埋蔵文化財が破壊される範囲の精査を行なった。その結果、地中梁の深度は遺物包含層の上面に達せず、5mピッチで打設される基礎杭のみが支障を来すことが判明した。また基礎杭は細く、その総面積は工事面積の5%以下であるため、申請地での埋蔵文化財の状況を把握する目的の調査を実施することで事業者の協力を得た。調査は、平成14年5月14日・15日の2日間実施した。

2) 友井東遺跡の調査

友井東遺跡は、昭和38年金物団地内での浄水場掘削工事に際して、その排土から後期の弥生土器、古墳時代中期～後期の土師器・須恵器が出土したことから周知されるようになった。その後、昭和48～57年に近畿自動車道建設に伴う試掘・発掘調査が財団法人大阪府文化財センター(現、以下「センター」と略す)によって行なわれた以外調査例はなく、遺跡の動態や様相は不明の点が多く存するまま今日に至っている。なお、センター実施分の調査成果との突合せは、後項で行ないたい。

	事業名	調査期間	調査面積	調査地	文献	備考
1	排水場掘削工事	昭和38年	—	金物団地内	a	推定箇所を第1図に出。
2	近畿自動車道建設に伴う範囲確認調査	昭和48年度	—	(中央環状線内)	b	センターでは「第1次発掘調査」とす
3	近畿自動車道建設に伴う発掘調査	昭和54年6月1日～昭和56年12月20日	4882㎡	(中央環状線内)	c	「友井東(その1)」
4	近畿自動車道建設に伴う範囲確認調査	昭和57年6月15日～昭和58年5月31日	1325㎡	(中央環状線内)	d	「友井東(その1)」
5	事務所ビル建設に伴う確認調査	平成14年5月14日・15日	31.5㎡	金物町3-5番地	本籍	

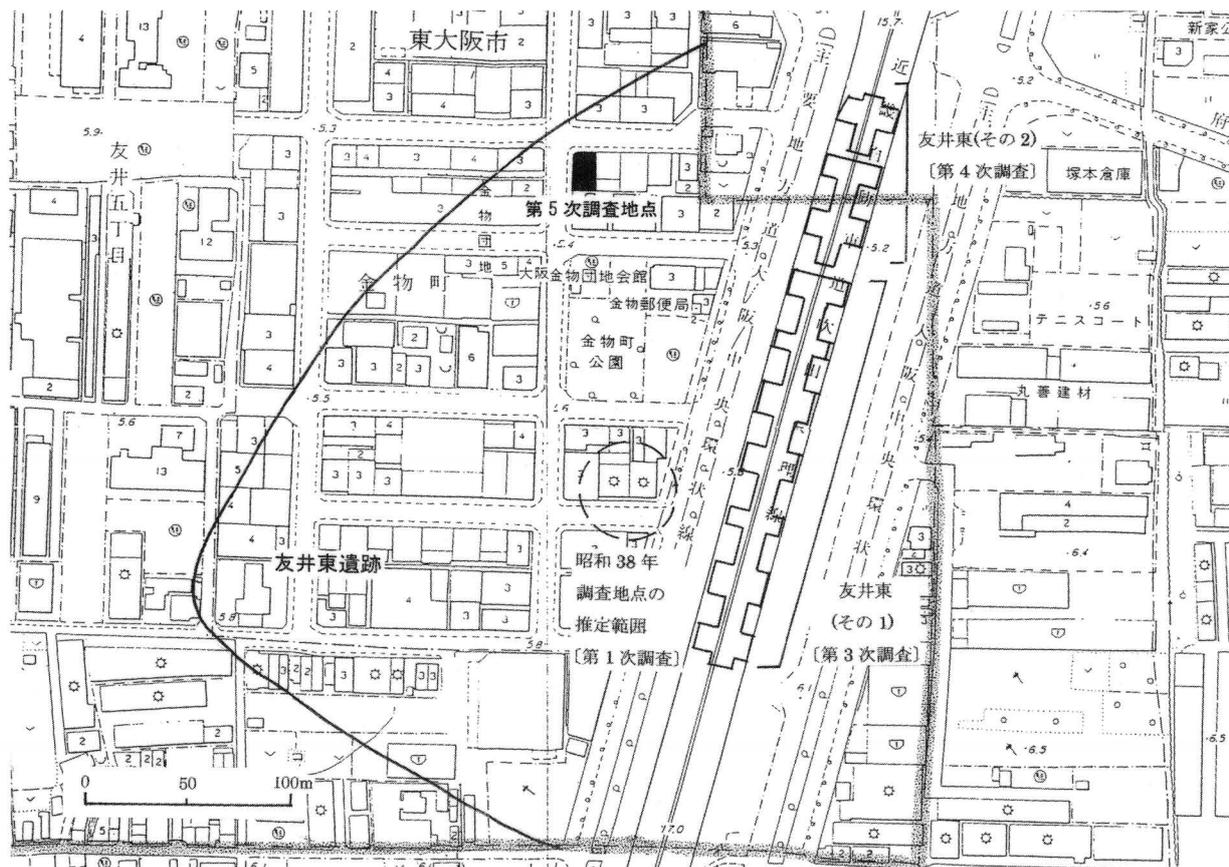
【文献】 a. 萩田昭次「東大阪市友井東遺跡」(『河内考古学』1号、1968年。)

b. 財団法人大阪文化財センター『近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告』、1974年。

c. 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター『友井東(その1)』、1984年。

d. 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター『友井東(その2)』、1983年。

第1表 友井東遺跡の調査一覧表



第1図 調査地位位置図

3) 調査の概要

調査は基礎杭の通りの脇に実施することとし、南北トレンチをAトレンチ(2m×9m)、東西トレンチ(3m×4.5m)と仮称した。調査面積は31.5㎡となる。Aトレンチを5月14日、Bトレンチを5月15日に分けて実施したため、接続部を部分的に重複させて実施した。

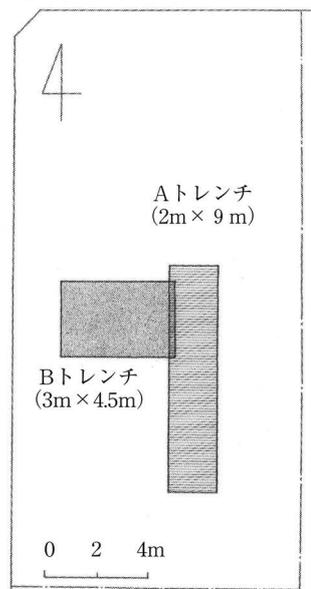
① 層位

まず、調査で確認した層序は以下のとおりである。(盛土は除く。)

第1層 旧耕土層である。Aトレンチでは2層に分層できた。1A層は5B4/1暗青灰色粘土、1B層は5BG5/1青灰色粘質砂で、その下部はシルト質粘土となっていた。

第2層 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混じり粘土。マンガンの沈着が著しい。耕作土と考えられる。弥生～古墳時代の遺物を少量含む。Bトレンチではこの層の下面に、第3層を切り込む形で、第2層と第3層の混合土が見られた。これを第2L層とした。断面観察では溝状を呈する。第3層の所見から、第3層の上面が凹地を呈していたところに流下・堆積したことが考えられる。

第3層 7.5YR4/1褐灰色粘土。古墳時代初頭～飛鳥時代の遺物包含層。Bトレンチでは下面で、第4層を主体に第3層がブロック状に混入する層が見られた。これを第3L層とする。第3下層は自然流路の堆積土と考えられる。



第2図 調査トレンチ図

第4層 10G5/1緑灰色極細粒砂～中粒砂。上面はAトレンチ検出遺構の遺構面をなす。Bトレンチでは層厚70cm以上を確認している。

② Aトレンチ

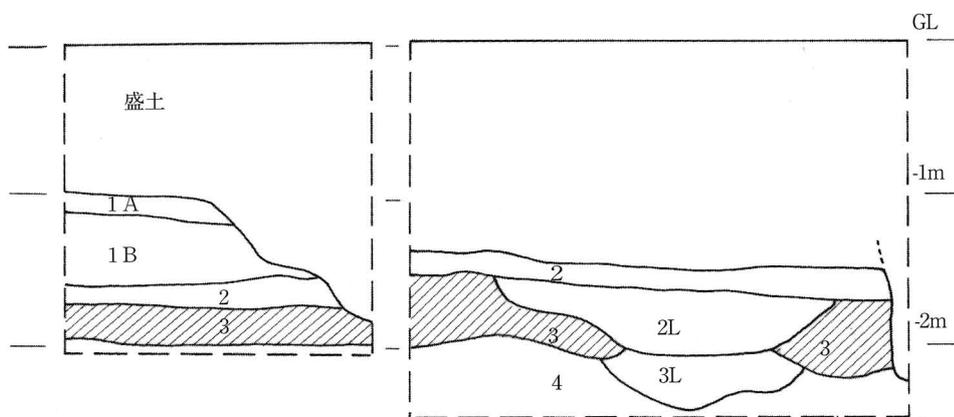
Aトレンチの南端では、旧建物の損壊が少なく、旧耕土層以下の層序を確認することができた。トレンチ南端部第4層上面で、ピットを4基検出した。SP1は現存長で60cm、深さ30cmを測る。SP2は現存長で長径80cm、短径60cm、深さ10cm以上を測る。SP1と切り合うが、埋土の差はほとんどなく、SP1と一体のものとして捉えられる可能性がある。SP3は現存長で長径85cm、短径55cm、深さ33cmを測る。SP4は現存長で長径90cm、短径50cm、深さ26cmを測る。ピットの埋土はいずれもN4/灰色粘土であった。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと考えられる。SP4の北側では、第3層から遺物が集中して出土しており、下面に何らかの遺構が存在した可能性が指摘できる。ピット内の遺物は庄内式土器の細片のみで混入品は認められなかった。このことからピットは古墳時代初頭の所産と推定しておきたい。ピットはベース面の状況と埋土の観察から、柱穴等とは考えられず、小土坑状の形態をもつものである。なお、Aトレンチ北側では第4層上面で湧水点に達しており、遺構面精査は困難な状況であった。南側でピット群を検出し、所期の目的は達成されたため北側の調査は断念した。

第3層での遺物包含は濃密で、2日間の調査で出土したコンテナ2箱の遺物のうち、ほとんどはAトレンチで出たものであった。

③ Bトレンチ

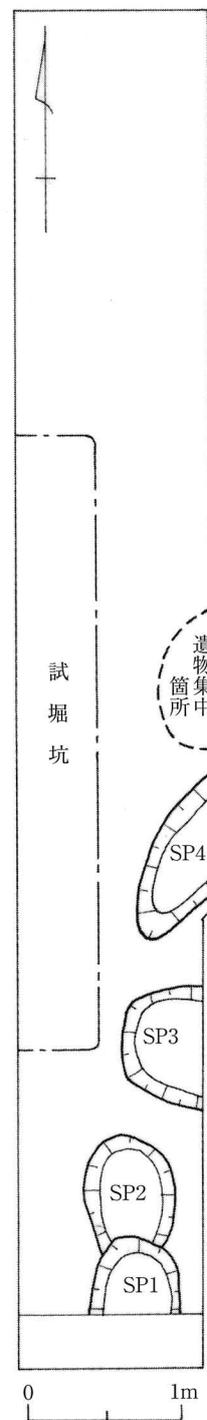
Bトレンチでも遺物包含層である第3層(褐灰色粘土層)を確認した。しかし、遺物の包含は稀薄で少量にとどまった。

Bトレンチでは、まず第4層の堆積後南北に流下する自然流路(第3L層)が走り、しばらくあって第3層が堆積したものと考えられる。自然流路の上部は第3層上面のレベルが凹面を呈していたため、第3層を切り込む形で第2L層が



- 1 A 5B4/1暗青灰色粘土
- 1 B 5B6/1青灰色粘土中粒砂
- 2 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混じり粘土
- 3 7.5YR4/1褐灰色粘土
- 4 10G5/1緑灰色極細粒砂～中粒砂
- 2 第2層と第3層の混合土
- 3 第4層を主体に第3層がブロック状に混入する層

第4図 調査地断面図



第3図 Aトレンチ遺構平面図

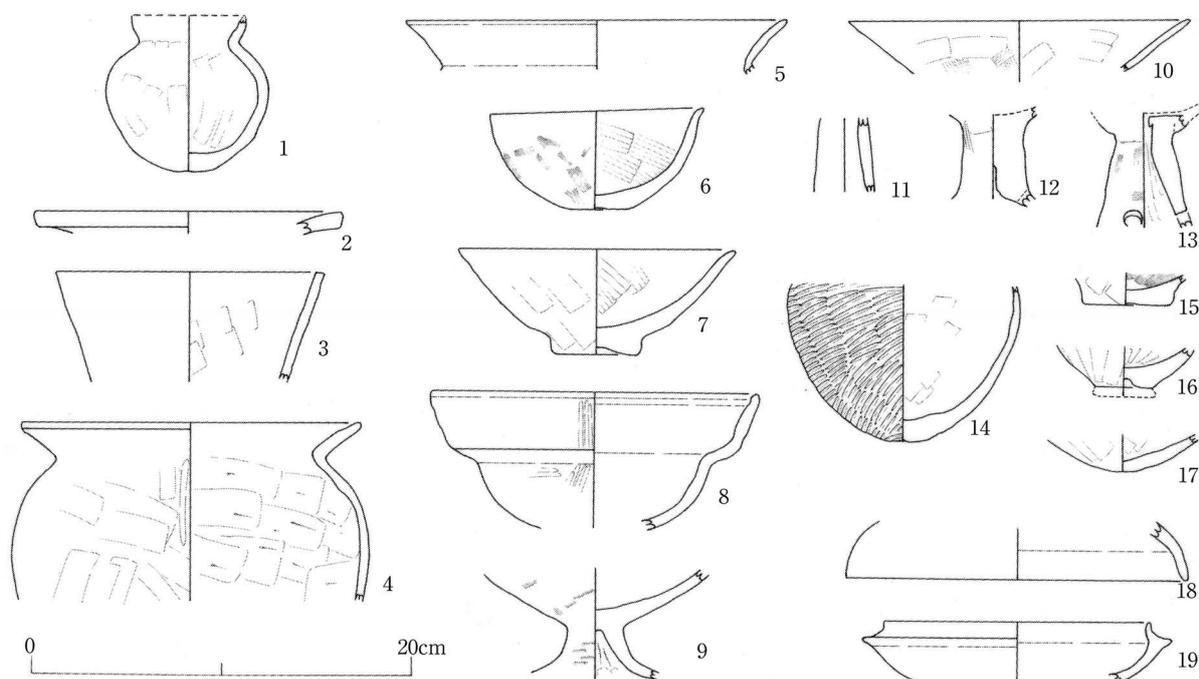
嵌入了ことが推定できる。またベース層となる第4層は遺跡周辺での調査成果から庄内式期を大きく遡るものとは考えにくく、第3L層の堆積時期は庄内式期前後とみるのが妥当と思われる。

4) 出土遺物 第5図に図示した遺物は、すべてAトレンチの第3層出土遺物である。

壺(1～3) 1は口縁端部のみを欠く小型丸底壺である。口縁部は短くやや外上方気味に立ち上がる。体部はわずかに横長の球形を呈す。外面はハケ、内面はイタ状工具による調整である。全体的に剥離している。口径6.0cm、器高8.3cmを測る。色調は外面橙色(7.5YR 6/6)、内面暗灰色(N 3/)を呈する。2は、広口壺の口縁部である。内外面ともナデで仕上げる。口径16.0cmを測る。色調は外面橙色(5 YR 6/6)、内面明赤褐色(5 YR 5/6)を呈する。3は長頸壺、もしくは短頸壺の口縁部である。口縁端部に面をもつ。外面は摩滅のため調整は不明であり、内面はイタナデで仕上げている。口径14.0cmを測る。色調は橙色(7.5YR 7/6)を呈する。

甕(4・5) 4は頸部が大きく「く」の字に屈曲し、直線的に外上方に広がる口縁部をもつ。最大径が上部に位置する。外面をイタナデ、一部ミガキ、内面を斜め下から上方向のケズリで仕上げる。鉄分が付着し、剥離が著しい。口径17.6cmを測る。色調は外面にぶい黄褐色(10YR 5/4)、内面にぶい黄橙色(10YR 7/2)を呈する。5は外反する口縁部で、内外面ともナデ調整をする。摩滅が著しい。口径20.0cmを測る。色調は灰白色(2.5YR 8/1)を呈する。

鉢(6～8) 6はほぼ完形で、碗形を呈し、平底をもつ。不整形であるが、口縁直下を強くなでることによって口縁端部がやや外反しつつ先端部が尖る。外面は細かいハケ(18条/cm)、内面は粗いハケ(4条/cm)を施す。口径10～11.2cm、器高5.0～5.5cm、底径3.0cmを測る。色調は外面にぶい橙色(7.5YR 7/4)、内面橙色(7.5YR 6/6)を呈する。7は口縁に向かって直線的に外反し、口縁部先端は細くなる。底部は上げ底気味である。外面はイタナデ、内面は粗いハケ(2～3条/cm)を施す。口径14.4cm、器高5.6cm、底径4.2cmを測る。色調は外面灰黄(2.5YR 7/2)、内面灰黄褐色(10YR 6/2)を呈する。8はわずかに外上方に広がる有段の口縁をもち、体部下半は丸みをもつ器形である。外面はナデ後ミガキで仕上げる。内面は口縁部に浅い沈線を施し、段の内面はナデ、下



第5図 出土遺物実測図

半部は付着物のため調整は不明である。口径17.0cmである。色調は黄灰色(2.5YR6/1)を呈する。

高坏(9~13) 9は壙形の坏部と湾曲しながら裾に広がる脚部をもつ。外面はハケメ(12条/cm)、脚部内面に絞り痕が残る。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。10は口縁先端部が尖る直線的に立ち上がる口縁部である。内外面とも板状工具により調整している。口径18.0cmを測る。色調は橙色(5YR7/6)を呈する。11~13は脚部の破片である。11の調整は内外面とも摩滅のため不明である。色調は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。12は外面をミガキ、内面は摩滅のため調整不明である。剥離が著しい。色調は灰白色(10YR8/2)を呈する。13は個数は不明だが脚部に円孔をもつ。外面に細かいハケ、内面にイタナデを施す。上面に杯部と接合しやすくするためか放射状の筋を施す。色調は浅黄橙色(7.5YR7/4)を呈する。

底部(14~17) 14は鉢か壺の下半部で丸底である。底部外面が小さくくぼむ。外面は左下がりのタタキ(3条/cm)、内面はハケを施す。底部外面にまでタタキを施す。色調は外面橙色(5YR6/6)、内面灰褐色(5YR5/2)を呈する。15は平底。外面はハケ、内面は細かいハケ(15条/cm)を施す。底径4.4cm。色調は灰白色(10YR8/2)を呈する。16は底部輪台技法により、貼り付けた底部部分が剥離している。底径3.0cm。外面はイタナデ。内面は蜂の巣状のハケを施す。色調は外面浅黄橙色(10YR8/3)、内面明黄褐色(10YR6/6)を呈する。17は丸底。外面はイタナデ、内面はハケを施す。外面に黒斑あり。色調は外面灰白色(5YR8/2)、内面にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。

須恵器(18・19) 18は坏蓋で口径18.0cmを測る。内外面とも回転ロクロナデで仕上げる。酸化により外面が赤褐色になっている。色調は外面赤褐色(10YR4/4)、内面にぶい橙色(2.5YR6/3)。19は杯身。浅い体部でほぼ水平にのびる受部をもち、口縁先端部はやや尖る。内外面ともロクロナデを施す。色調は灰白色(5YR8/1)を呈する。

おおむね、土師器は庄内式期後半から布留式期に、須恵器は7世紀に属すると考えられる。

5) まとめ

今回の調査範囲は極めて限定されたものであったが、従来不詳であった遺跡の動態・様相に新たな知見を加えることができた。まず、古墳時代初頭に遡る可能性がある遺構を検出した。第4層上面はAトレンチで現地地表下-2.0m前後を測り、友井東遺跡での従前の確認調査では、あまり埋蔵文化財が発見されていないことから、今回の申請地付近では自然堤防上の微高地が形成されていたことが考えられる。恐らく島状に微高地が点在し、そこに住居が営まれていたのではないだろうか。遺物は前記のように第3層から古墳時代初頭~飛鳥時代の土器が出土した。第3層は第3次調査〔『友井東(その1)』(第1表の文献c)]の基本層序では第V層に相当すると考えられる。また、古墳時代中期~後期の掘立柱建物が第3次調査の北端部で検出されている。第3次調査地から今回の調査地は北西へ約120mの地点となり、この間に該期の集落跡が遺存している可能性が考えられよう。

金物団地内は友井東遺跡内に所在するが、過去の確認(試掘)調査で遺物包含層が検出されたことがなかった。これは、①友井東の弥生~古墳期集落の規模が限定されると考えられること、②現地表面から浅い層位で遺物包含層が検出されるため金物団地造成時に削平を受けたと考えられること、によるものと推察される。ただ、今回は造成時から今日まで建替えが行なわれなかったことにより、遺物包含層の遺存状態が良好であったものと考えられる。従って、調査地で再び遺物包含層が確認されるケースは多くはないと思われるが、団地内での諸工事に伴い今後事前の調査を重ね、集落の様相を解明していく必要がある。最後に、今回の調査地は友井東遺跡のほぼ北端部に位置し、第3層の広がりからみて、本遺跡の範囲を北方及び西方に拡大する必要があると痛感される。

図版1 友井東遺跡第5次発掘調査 遺構



調査前の状況



Aトレンチ遺構検出状況（南より）



Aトレンチ遺構掘削後状況（南より）

図版2

友井東遺跡第5次発掘調査

遺構



Aトレンチ第3層内土師器壺出土状況



Aトレンチ南壁～西壁



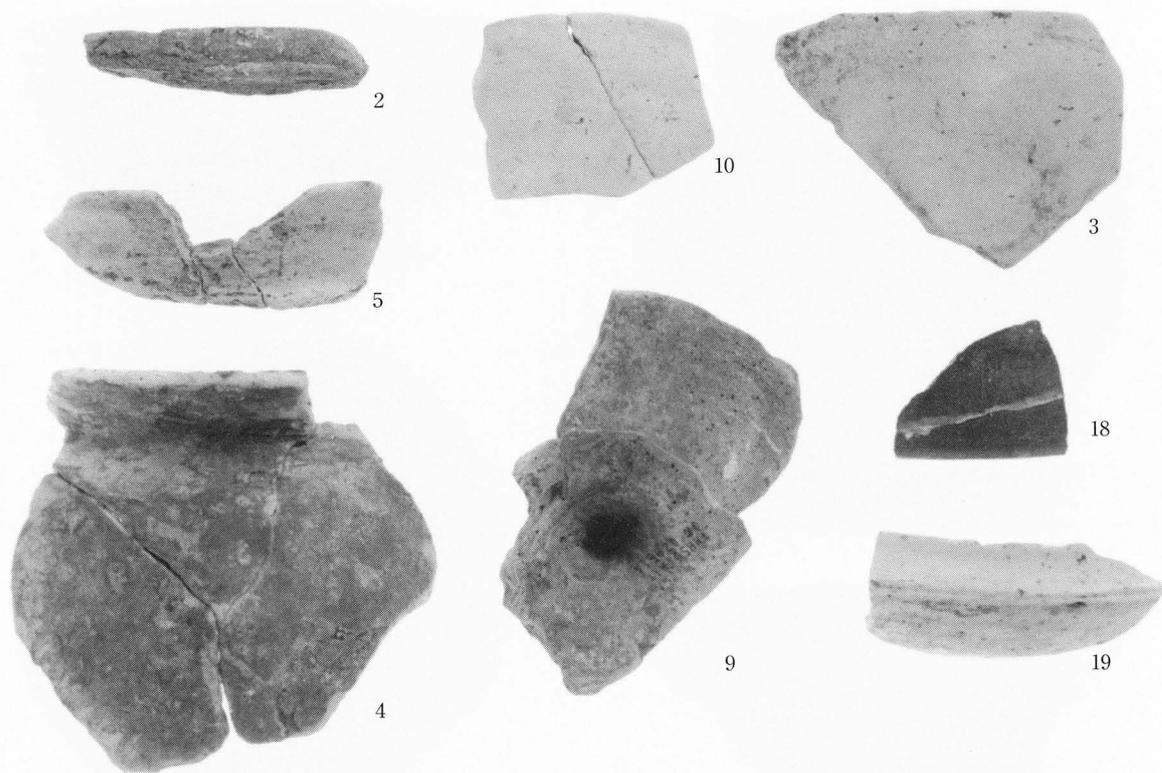
Bトレンチ北壁

図版3 友井東遺跡第5次発掘調査 遺物

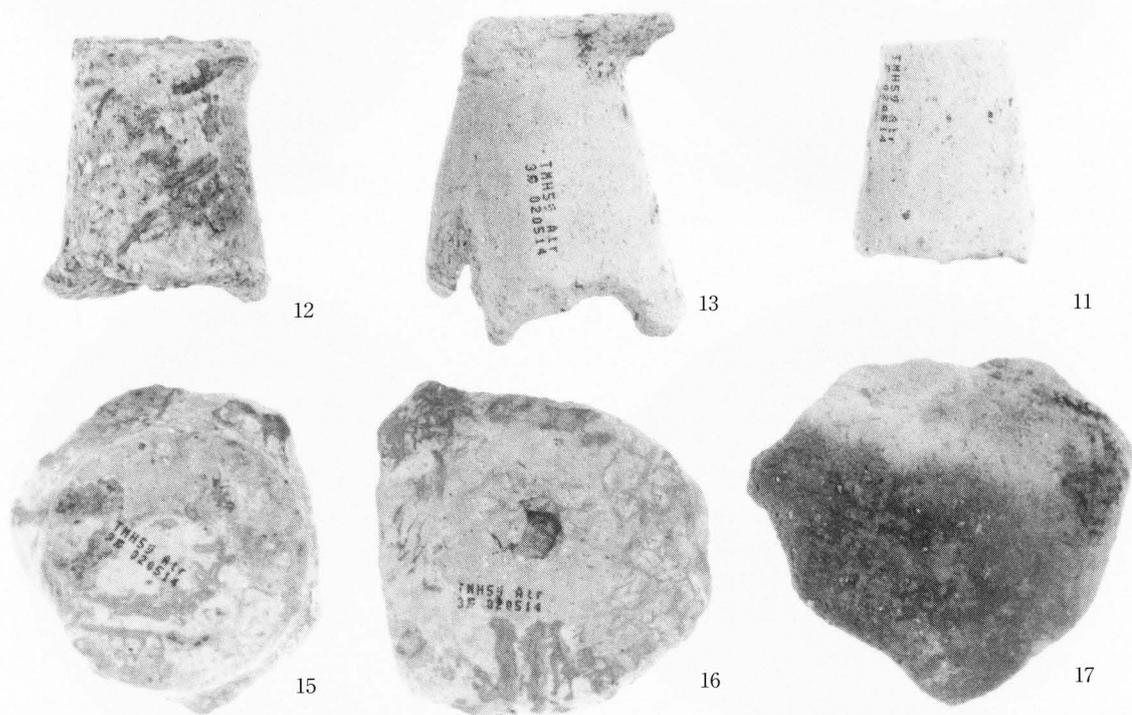


Aトレンチ第3層出土土師器壺(1)、鉢(6~8)、底部(14)

図版3 友井東遺跡第5次発掘調査 遺物



Aトレンチ第3層出土土師器壺(2・3)、甕(4・5)、高坏(9・10)、須恵器坏蓋(18)、坏身(19)



Aトレンチ第3層出土土師器高坏(11~13)、底部(15~17)

報告書抄録(その1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう —へいせい14ねんど—
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報 —平成14年度—
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太 横山佐夜子(第3章・第6章・第7章出土遺物) 榎原美智子(第4章・第5章出土遺物) 安部みき子(第5章人骨)
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
なわていせき 縄手遺跡	東大阪市南四条町 754-1番地	27227	72	平成13年12月5日	4.4 m ²	賃貸共同 住宅建設
やまはたこふんぐん 山畑古墳群	東大阪市四条町 479-3,4	27227	66	平成14年2月 4日・2月18日	22.9 m ²	個人住宅 建設
	東大阪市瓢箪山町 932-5番地	27227	66	平成14年2月 14日・3月5日	28.3 m ²	個人住宅 建設
うりゅうどういせき 瓜生堂遺跡	東大阪市下小阪 5丁目31-1番地	27227	95	平成14年10月 16日～10月31日	60 m ²	賃貸共同 住宅建設
ばばがわいせき 馬場川遺跡	東大阪市横小路町 3丁目1150-3番地	27227	89	平成14年11月6日 ～11月27日	30 m ²	個人住宅 建設
みずはやしやかたあと 水走氏館跡	東大阪市五条町 1320-2,1322-3,1323-1, 1324-2,1331-2番地	27227	59	平成14年3月 26日・4月10日・ 4月15日・4月 18日・4月23日・ 4月26日・5月 27日・5月28日・ 9月21日・9月 27日	確認 調査 27m ²	宅地造成 工事
ともいひがしいせき 友井東遺跡	東大阪市金物町 3-5番地	27227	105	平成14年5月 1日・14日・15日	4m ²	事務所ビル 建設

報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄手遺跡 (第17次調査)	集落	鎌倉時代～ 室町時代	溝	瓦器	
山畑古墳群 (第21・22次 調査)	古墳群 集落	古墳時代～ 平安時代	落ち込み	土師器 須恵器 黒色土器 丸瓦・平瓦	
瓜生堂遺跡 (第51次調査)	集落	縄文時代 弥生時代 平安時代	ピット・溝・ 土坑・落ち込み	土師器 須恵器 製塩土器	
馬場川遺跡 (第13次調査)	集落	古墳時代 奈良～平安時代	土壇墓・土坑・ ピット・溝	縄文土器 土師器	人骨 出土
水走氏館跡 (第3次調査)	館跡	古墳時代 鎌倉時代	土坑状遺構	土師器 須恵器 瓦器 埴輪	
友井東遺跡 (第5次調査)	散布地 集落	古墳時代 飛鳥時代	ピットー	土師器 須恵器	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報
—平成14年度—

発行日 平成15年3月31日
 編集・発行 東大阪市教育委員会
 〒577-0843
 東大阪市荒川3丁目4番23号
 TEL06-6728-9361
 印刷所 ミヤビプリント社

